弘前大学農学生命科学部・農学生命科学研究科 令和2年度 教育改善に向けたアンケート調査 報 告 書



令和3年12月22日 弘前大学農学生命科学部 自己評価委員会

巻 頭 言

農学生命科学部長 佐々木 長市

平成14年度に開始された「卒業・修了生を対象としたアンケート調査」は、今年で18回目になります。この内容は、学部の教育改善の明確化や特徴などを示唆してくれる貴重なデータとなっています。この取り組みは、学部では自己評価委員が解析の労を執り、教育改善員会とともに検討し、構成員にFDとして公開しています。この情報は、各教員の教育研究における有意義な情報及び改善点を提示してくれている貴重なものです。特に、新任の教員にとっては有効性が高いと考えています。なお、このアンケートは、「学部・大学院教育のあり方」と「教員対象の教育評価アンケート」が大きな特色です。

今日では、大学及び学部も学生教育における質の向上を図るため、学生の意見を聞きながら改善を図ってきております。学部・研究科の教育理念、教育目的、教育目標、学科の教育目標さらにはアドミッションポリシーなどの指針に基づき教育がなされております。こうした明確な指針に沿った教育は、大衆化した時代の教育の質の保証には重要なことと考えられます。また、内容や評価の公表は、大学あるいは学部の個性的な教育の深化に大いに貢献すると思われます。このデータは、学部のより良い教育や個性化に貢献する一助として大いに評価されるべきでしょう。

今年の学生は、コロナ感染症の影響で、令和2年前期はメディア授業というこれまでに経験したことのない体制となり、その対応に苦戦しました。教員もこれまでと違う授業となり、その教え方の経験値のない状態での手探りの講義となりました。幸い後期からは対面授業となりましたが、マスクの着用、ソーシャルデスタンスや換気などのコロナ対策の必要性が求められました。シラバスの記載もメディア授業対応が求められました。こうした講義体制の変更も含むアンケートが今回の変更点と特筆すべきことになります。

本アンケートからは、ガイダンス、シラバス、専門教育に対するする学生の満足度が学部全体で約80%と高い肯定的な意見が確認されています。施設への要望では、プロジェクターの更新やエアコンなどの設置などの改善がなされ、この質問項目への満足度を高めているようです。施設の利用面での不便に対して改善を進めていますが、今後学生数が増えるに従い、新たな要望が出ると考えられます。学部の卒論に対する満足度は学部全体として約80%にまで上昇しました。これまでの長い間のたゆまない改善がこうした結果に結びついているのでしょう。今回は、これまでにない講義方法の改善の要望が求められる結果となり、メディア授業の影響かもしれないと考えております。今後の学生のアンケート結果を注視していく必要があると思います。

最後に、本調査に対し、労をいとわずにとりまとめいただいた自己評価委員会の各位に衷心より謝意を申し上げます。

目 次

巻頭言	1
はしがき	3
I. 学部卒業時学生対象教育評価アンケート	4
1. アンケート調査内容	4
2. 調査結果	7
Ⅱ. 研究科修了時学生対象教育評価アンケート	68
1. アンケート調査内容	68
2. 調査結果	71
Ⅲ. 教員対象教育評価アンケート	100
1. アンケート調査内容	100
2. 調査結果	102
IV. 教員対象授業アンケート(学部授業及び研究科授業)	121
1. アンケート調査内容	121
2. 学部授業に関する調査結果	124
3. 研究科授業に関する調査結果	134
V. アンケート調査結果に対する各学科の見解	142
生物学科	142
分子生命科学科	142
食料資源学科	143
国際園芸農学科	144
地域環境工学科	145
VI. 教育改善委員会(令和 2 年度教育改善にむけたアンケート調査についての意見)	147
学部卒業時・研究科修了時学生対象アンケートについて	147
教員対象授業アンケートについて	148
教員対象教育評価アンケートについて	148

はしがき

農学生命科学部の自己評価委員会は、学部ならびに研究科の教育の適正化、カリキュラムの改善などを目的に、学部4年の卒業予定学生及び研究科2年修了予定学生を対象にした授業評価と、各教員を対象とした専門科目の授業評価についてアンケート調査を実施してきた。平成14年度(15年2月実施)以降、これまで17回行われ、今回は第18回目である。平成17年度からの調査では、それ以前の内容に加えて学生と教員を対象として教育評価アンケートを実施している。そのアンケートにおいては、学生および教員対象の各アンケートに同種の質問項目を設けており、学生と教員との間における意識の相違についても読み取れる。また、各年のアンケート結果の比較によって、カリキュラムの改変や施設状況の変化の実態やそれらの影響、学生の意識・要望の変化、教員の取り組みの変化なども読み取れる。

以上のような背景から、本年度もこれまでのアンケートとの継続性に配慮し、それらの内容を 踏襲して次の4事項についてアンケートを実施した。

- I. 学部卒業時学生対象教育評価アンケート
- Ⅱ. 研究科修了時学生対象教育評価アンケート
- Ⅲ. 教員対象教育評価アンケート
- IV. 教員対象授業アンケート(学部授業及び研究科授業)

各アンケートの設問内容は、それぞれのアンケート調査結果の冒頭に示した。設問は、選択肢式のものと、その回答理由を記述させるもので構成した。選択肢として、「強くそう思う」、「そう思う」、「どちらとも言えない」、「そう思わない」、「全くそう思わない」等の5段階を設定した。設問の回答に関する分析では、「強くそう思う」と「そう思う」を併せて「肯定的な評価」とし、「そう思わない」と「全くそう思わない」を併せて「否定的な評価」とした。また、学生の回答理由の記述は、明らかな誤字や個人名以外は、できるだけ原文のまま箇条書きで記し、各学生が選んだ選択肢番号を行頭に付し、学科あるいはコース別に記載した。

本アンケートの設問の設定については、大きな変更はせず、設問の趣旨が的確に受け取られるような範囲の変更にとどめている。これは、本報告書の内容は、教育改善や組織評価等に活用されると想定され、さまざまな取り組みの成果や問題点の把握を可能にする経時的データの役割もあると考えたためである。

本アンケートの結果は教育改善に活用されるべきことから、昨年度と同様に教育改善委員会と 各学科の学科長にも本報告(案)の一読を願い、それに対する見解、意見を提出してもらい、本報 告の最後に掲載した。

今回の卒業・修了時学生によるアンケート結果にも、本学部・研究科の授業や教員の教育方法 に対して厳しい意見や、教育体制に関するさまざまな意見が含まれている。関係各位および教育 改善委員会におかれては、カリキュラムの教育内容や方法の改善のためにはもちろん、教育体制 の充実を図るためにも、それらを大いに参考にされることを望む。

I.学部卒業時学生対象教育評価アンケート

1. アンケート調査内容

調査目的:農学生命科学部の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため、4年間この学部で 教育を受け、今まさに卒業しようとしている学生を対象に、学部教育について総合 的な評価を得ることを目的とした。

調査方法:電子メールで学生に本アンケートについて周知し、Forms で回答を依頼した。なお、アンケートは個人を特定できない設定にして行われた。

調查対象:令和3年3月学部卒業予定者 217名

調査期間:令和3年2月1日~3月23日 有効回答者数:181名 (回答率83%)

調査項目:設問は以下のとおりである。(ただし、下記の[]の項目名は、回答結果の分析にあたってグループ化のために設けたものである。)

「学部・学科の教育目標等の認識]

設問 1. あなたの所属学科をお答えください

設問 2. 本学部の教育理念、教育目的および教育目標を知っていますか。

設問 3. あなたが所属する学科の教育目的を知っていますか。

設問 4. あなたが所属する学科の入学者受入れ方針(アドミッションポリシー)を知っていますか。

設問 5. あなたが所属する学科の教育目的は以下の通りですが、学科のカリキュラムはその目標に合致していると思いますか。

設問 6. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

「学科の専門教育について]

設問 7. 本学部では年度初めに学年毎にガイダンスを行っていますが、ガイダンスの内容は適切だったと思いますか。

設問 8. シラバスは受講科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。

設問 9. あなたが所属する学科で受けた専門教育に満足していますか。

設問 10. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

[教員の指導について]

設問 11. 所属する学科の教員の、講義・実習・演習などにおける学生への指導や対応に満足していますか(卒業研究については設問 25 で別に聞きます)。

設問 12. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 13. 履修した科目の成績評価について質問します。成績評価の結果に疑問や異議を持った ことはありますか。

設問 14. 疑問や異議があったときは、学部教務に「成績評価の問い合わせ」を提出し問い合わ せできることになっていますが、あなたはそれをしましたか。

設問 15. 問い合わせをした場合、その回答に満足しましたか。具体的に記入して下さい。

[学生の主体的学習について]

設問 16. 講義の受講に当たり、受講期間中にあなたは講義室での受講時間の何倍程度の時間 を、講義室外での学習(予習や復習など)に当てましたか。大学設置基準では、2単位の 科目の場合、90 時間の学習が必要になりますが、講義室では30 時間(90 分を2時間とし て扱い×15回=30時間)の学習時間しかありません。そこで、講義室外での学習が必要 になります(講義室での2倍の時間)。学習時間にはインターネットを利用した関連情報 の収集、課題やレポートの作成、外書講読・文献講読・専門英語の予習、小テストのため の勉強、中間や期末試験のための勉強、研究室内でのプレゼン準備なども含めても構いま せん。ある1科目を想定して回答しても構いません。

設問 17. 大学教育では、学生自身の主体的、意欲的な学習が要求されます。あなたは講義に対 してどのような姿勢で取り組みましたか。

設問 18. 実験・実習についてはどうですか。

設問 19. 大学在学中のカリキュラム(教養教育も含む)の中で、もっとも印象に残った科目が あれば、その科目名と理由を記入して下さい。

[学生への教育支援、施設・設備について]

本学部や本学では皆さんに助言したり、皆さんからの相談・苦情を受け付けたり、皆さんのニー ズを把握するために、下記のような10のルートを用意しています。

- 1. 学生センター
- 2. クラス担任と面談 3. 指導教員と面談
- 4. 指導教員以外の教員と面談 5. 学科長と面談 6. 学生総合相談室

- 7. 保健管理センター 8. 就職支援センター 9. 学部長直言箱

- 10. 学長直言箱
- 11. その他 12. 利用したことはない

在学中あなたは次の(1)~(3)の項目について主にどれを利用しましたか。

設問 20. (1) 学業

設問 21. (2) 学生生活

設問 22. (3) 進路

設問 23. 本学部の以下の施設について、どのように感じていますか。

評価	1. 充分満足	2. ほぼ満足	3. どちらと	4. やや不充	5. かなり不
施設	1. 707 INVE		も言えない	分	充分
1. 講義室					
2. 実験・実習室					
3. 情報処理演習室					
4. 蔵書室(4階)					
5. 学生自習室・学生					
控室 (2階)					
6. 卒業研究を行っ					
た研究室					

設問24. 各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

[卒業研究について]

- 設問 25. 卒業研究を行ったことに満足していますか。
- 設問 26. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。
- 設問 27. あなたの卒業後の進路は次のどれですか。
- 設問 28. 本学部のカリキュラムで学んだことは、進路の決定にどのように影響しましたか。
- 設問 29. 本学および本学部の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。

[本学部の教育のあり方について]

- 設問 30. あなたが本学部を卒業するに当たり、大学卒業者に相応の知識や学力を身に付けたと 感じていますか(大学卒業者に相応の知識・学力は自分のイメージしたもので結構で す)。
- 設問 31. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。
- 設問 32. 本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点を、次の項目の中から一つを選んで下さい。
- 設問 33. 上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい。
- 設問 34. 総合的に判断して、本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。
- 設問 35. 上記のように回答した理由を記入して下さい。
- 設問 36. 食料資源学科と国際園芸農学科の学生のみお答えください。皆さんの受けたカリキュラムは「食」(主に食料資源学科の皆さん)または「国際化」(主に国際園芸農学科の皆さん)の知識を身につける上で役立ったと感じていますか。
- 設問 37. 上記のように回答した理由を記入して下さい。

2. 調査結果

設問 1. あなたの所属学科をお答えください。

	令和2年度			令和元年度			平成 30 年度		
	卒業生	回答者	回答率	卒業生	回答者	回答率	卒業生	回答者	回答率
	数	数	(%)	数	数	(%)	数	数	(%)
生物学科	38	38	100	37	35	95	46	34	74
分子生命科学科	40	37	93	36	31	86	44	29	66
食料資源学科	56	46	82	55	53	96	37	33	89
国際園芸農学科	53	34	64	46	43	93	36	32	89
地域環境工学科	30	26	87	27	25	93	29	27	93
合 計	217	181	83	201	187	93	192	155	81

表 I-1. 各学科の卒業生と回答者数の推移

昨年度は、回答率上昇のため、卒業研究発表会前の1月末からアンケートを実施し、卒業研究発表会の際に学科長が回収するようにした結果、回答率は93%と平成30年度の81%からも大幅に上昇した。この結果を受けて、今後もアンケートの実施方法は令和元年度の例に沿って行われる予定であったが、世界的なコロナ感染症の問題が発生したために、令和2年度は急遽、Formsを用いたオンライン回答で実施されることとなった。その結果、回答率が83%と昨年度に比べて減少した。当初、回答期間を2/1から2/28としたところ、2/28時点での回答率は76%であり、その後再度アナウンスをかけて締め切りを3/23まで延長した結果、回答率が83%になったことを申し添える。この事実と回答率が学科でばらつきがあることを考えると、今後もオンラインでのアンケートを継続する場合、周知方法の改善によって十分回答率を高めることは可能であるといえる。

[学部・学科の教育目標等の認識について]

設問 2. 本学部の教育理念、教育目的および教育目標を知っていますか。

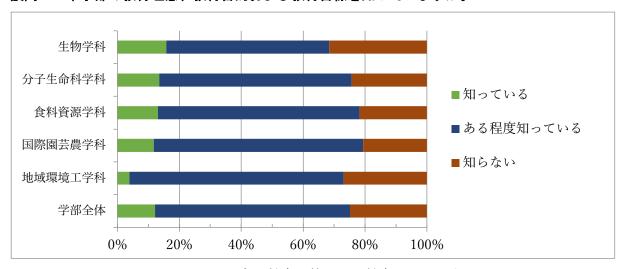


図 I-2. 理念、教育目的および教育目標の認識

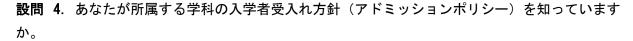
学部全体で見ると、「知っている」と「ある程度知っている」の合計は75%で、過去3年(平成29年度54%、平成30年度54%、令和元年度54%)と比べて明らかに高くなった。これは昨年度の改善点として、掲示板を利用した学生への周知を行ったことの効果がでたのかもしれない。来年度以降の傾向も注視すべきである。

生物学科 分子生命科学科 食料資源学科 国際園芸農学科 地域環境工学科 学部全体 0% 20% 40% 60% 80% 100%

設問 3. あなたが所属する学科の教育目的を知っていますか。

図 I-3. 学科の教育目的の認識

学部全体では、「知っている」と「ある程度知っている」の合計は77%で、過去3年より上昇した(平成28年度58%、平成29年度59%、平成30年度51%、令和元年度56%)。地域環境工学科では「知っている」と「ある程度知っている」の合計が92%であった。



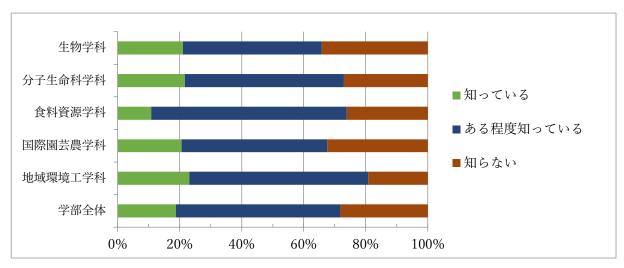
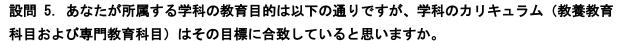


図 I - 4. 学科の入学者受け入れ方針の認識

学部全体では、「知っている」と「ある程度知っている」の合計は72%であり、過去3年より上昇した(平成29年度49%、平成30年度45%、令和元年度46%)。60%を下回る学科はなかった。



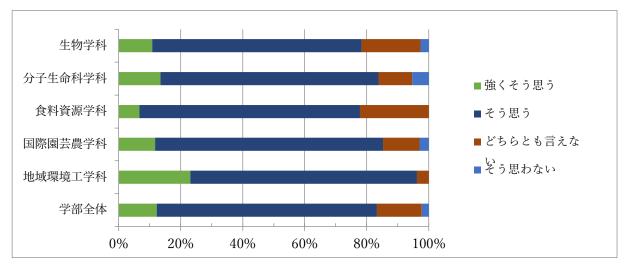


図 I-5. 学科の教育目的とカリキュラムの合致

学部全体で見ると、肯定的な評価が83%で、過去3年(平成29年度66%、平成30年度67%、 令和元年度77%)に比べて高かった。地域環境工学科は例年通り肯定的評価が多かった。

設問 6. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない 5. 全くそう思わない

【生物学科】

- 1. 幅広く生物学を学べ、研究室に所属後は興味を探求できたから
- 1. 今お世話になっている研究室では、発生生物学について研究させてもらっており、研究室としても進化についてみんな真剣に研究しており、生物学にまつわる面白さを共有できている気がするから。
- 1. そんな風になりたいと思うので
- 2. 各授業の名称・カリキュラム内容や教授たちの考え方と、この教育目的がほぼ一致しているように感じたため。
- 2. 学部における勉強および研究で上記項目に準じたことを達成できたと思うから
- 2. 生物学について深く学べたから
- 2. 合っていると思ったから
- 2. それを目的に弘前大学に入ったから
- 2. そう思ったから
- 2. 大学の講義良かったから
- 2. 生物学科で活動するにあたって、基礎コースでも、生態コースでも、基礎的な知識と、それに対する理解が大切だと思いました。
- 2. 外部どの連携がよくとれているから。
- 2. 真面目にやれたかわからないけどたのしめたので
- 2. 講義を受けた限り、目標に対して間違ってるようには感じなかったため

- 2. 研究室でその教育が十分できてると思うから
- 2. 生物学科における生態学、環境科学に関する知識は、実際に有意義なフィールドワークを行える地理的環境を活用できているように感じた。
- 2. 生物に関わる広い分野に触れることができるのは間違いないから。
- 2. 生物学の研究に関して、様々な人がそれぞれ違った面から研究を行い、生態学や保全に向けた知見を深められていると思うため。
- 2. 教育目的とカリキュラムの内容にズレがないと感じたから。
- 3. 共用の機材が古く、故障することが多いため、足止めをくうことがしばしばだったことを踏まえました。
- 3. 目的をよく知らないから。
- 3. 教員や講義によるから
- 3. 基礎生物学コースではあまり白神云々は関係なかったため
- 3. ゼミの活動が殆ど無かった
- 3. 体験することが最も身に付くと思うが、集中講義など体験型の講義よりも座学の方が多いと 感じるため。
- 4. 希望に沿わない研究室に配属された場合の配慮が少なく感じるから。

【分子生命科学科】

- 1. 大学生の本懐である
- 1. カリキュラムを学ぶことで教育目的が達成できると思うから。
- 1. 研究活動を通して、生命現象の解明に寄与できたため
- 1. 日々の講義や卒業研究を通じ、分子生命科学の知識が身につけることができる環境が整備されていると感じたから。
- 2. 学科に設置されている講義とその内容が教育目標に沿っていると思った。
- 2. 担当教員からそう指導されているため。
- 2. そのような講義はあった
- 2. 分子生物学や生化学についてだけではなく、微生物学や酵素についても多面的に学べた
- 2. 必修科目の合格ラインが高かったから。
- 2. 幅広い講義科目から広い範囲を学ぶことが出来たと思うから
- 2. 目標達成のために必要な講義は揃っているため
- 2. 糖鎖工学を深く学んだから
- 2. 授業でそのように感じたため
- 2. 研究室がよかった
- 2. 授業内容的にも合致していると感じた。
- 2. そう思うため。
- 2. 物理化学などの分野の知識もみにつき、またバイオテクノロジーではより最先端の知識が身に つくと感じたから
- 2. 自分の研究が学科のカリキュラムに沿った内容であったから。
- 2. 研究室で学べたと思う。
- 2. ほぼ目標に合致していると感じたため

- 2. 自分自身が探究心を持って研究に取り組むことが出来たと感じているため。
- 2. この4年間には述べられた目標の通りに、分子生命に関わる講義を受けてきました。
- 2. 幅広い分野の基礎を学び、最先端の一端を見ることができたため
- 2. 基礎的な内容から応用的な内容まで授業が多岐に渡っている。
- 2. 自分が望めばある程度までの実験ができるため
- 3. 学部の目標である豊かな人間性は育成されてないと思う
- 3. 最先端といわれると少し疑問に感じるため。
- 3. 基礎基本の習得まではできたと思うが、活かせるところまでは到達できていないと思うから。
- 3. よくわからないから
- 4. 教員の自由な気がする

【食料資源学科】

- 1. 社会に出て活躍できる自信がついたため。
- 1. 目的が学科で学んだことに沿っていると思ったから
- 1. カリキュラムに則った教育を受けている実感があるため。
- 2. そう思ったから。
- 2. 大学を選ぶ時に大学のホームページやパンフレットなどよく理解してから選びましたためです。
- 2. 学科の目的は選ぶコースによって達成できるかどうか異なってくるが、カリキュラムの内容に 沿っていると思う。
- 2. 様々な講義や課題を通して知識や考え方、取り組みを行うことができたと感じているため。
- 2. 授業で目的の人材を育成するような事ができていたと思うから。
- 2. 食品の性質についていろいろ学べたから。
- 2. 食品の生産から消費に至るプロセスに関わる様々な分野について学ぶことができたから。
- 2. 比較的早期に研究室配属されたことで、専門的な分野をより学ぶことができたため。
- 2. 学科内で多数の分野があるので、幅広い知識を得られるという面では当てはまっていると感じた。
- 2. コースが分かれてからは取りにくくなる食品機能や栄養、育種などに関する授業を3年次までに受けることができたので。
- 2. 各講義内容が理念に沿う物だったから
- 2. 研究室によるが、専門的で実践的な研究が出来る。
- 2. 必修授業での専門性が高く、食品衛生関連の任用資格も得られるから
- 2. 食品に関するあらゆる知識を学ぶことが出来たから。
- 2. 方針にそった研究をしているから
- 2. 教育目的に沿った必修科目であったと思うため。
- 2. 幅広い分野について学べたと思うから。
- 2. 幅広い知識を専門知識を身につける事が出来たため
- 2. 自分が拝見した卒論の内容はこの教育目的を達成していると思うから
- 2. 幅広いのは事実だと思う。
- 2. そのような授業があるから

- 2. 食に関する様々なことを幅広く学べるから
- 2. 書いてあるとおりのことが学べたと思う。
- 2. 専門科目がしっかりしている
- 2. 知識や技術を得る機会が多かったように感じたため。
- 2. 目的と講義内容が一致しているから
- 3. そこまで専門的な内容の授業がない気がするし、授業数も少ないと思う。コースに分かれるのが3 年生になってからなので、食品について専門的に学ぶ機会が少なかったのが残念だった。
- 3. 教員の方針によって変わるから
- 3. 課題に対応できるほど専門的な知識が身に付いてはいないため。
- 3. 内容が被っている講義があるので、もっと科目を考え直した方が良い。
- 3. 食料資源学科は、バイオ系から食品製造系まで幅広い研究室があり、様々な授業を受けれるという点ではとても良かった。しかし、3年次に行われる研究室配属後は、他の分野や研究室との関わりがほぼなく、卒業発表ではお互いの専門が大きく違うために、なかなか内容が理解しにくいということがあり、上記の回答を選んだ。
- 3. 学科内の研究内容にばらつきがあるため。
- 3. 食品の授業が多くて、偏りが大きかった。
- 3. よくわからない

【国際園芸農学科】

- 1. 教育目的に合った授業が行われていると感じたから。
- 1. 日本の農業に加えて、国際的な農業を多く学べたと思うから。
- 1. 専門科目の充実度がよかったから
- 2. 教育目的に書いてあることを授業で学んだから
- 2. さまざまな農学の学問を学ぶことが出来、農業実習などで体験的に学習出来たからです。
- 2. フィールドワーク等の活動を研究室で行い、実践的な学びを得ることができたため。
- 2. 専門以外の授業にも手を抜かずに取り組んでいたため。
- 2. 以上のことに関する授業を受けた
- 2. 特にゼミ活動を通して上記の目的に沿った教育が行われていると感じた。
- 2. 地域の特性を活かした授業や活動を行っているから。
- 2. 授業の際に、さまざまなトピックにおいて東北地方の地域レベルのことから海外の事情もからめた国際的なことまで触れられていたため。
- 2. 農業に関する知識を多角的に学ぶことができたと思う為
- 2. 英語の授業の多さや世界的視点で考えることを要求されてきたから。
- 2. 講義の内容が幅広く充実していた為
- 2. 各分野を広く浅く学んできたように感じたから。
- 2. 上述の様に構成された講義であったから。
- 2. 地域の内容や国際化についてなど、様々な講義があったから
- 2. 入学時よりも教育目標に近い人材に近づいたと感じるから
- 2. 当てはまっていると思ったから
- 2. 学科について、農学について幅広く学べたと思うから

- 2. 国際や経済、栽培などまで幅広い分野の講義・実習を行うことが出来るため。
- 2. 食と農について幅広く学ぶことが出来たので。
- 3. 世界の農業についての講義は受けたが、あまり記憶に残っていないし、大学生活の中で活用する機会があまりなかった。
- 3. カリキュラム内容的に国際的な活躍は見込まれないと思う為
- 4. 何も国際的な人間を育てる特色がなかったと思う

【地域環境工学科】

- 1. この学科で上記のことを学べたから。
- 1. インターンシップに参加した際、企業の仕事内容に学校で学んだ知識が使われていたから。
- 1. 技術者育成のために必要な講義ばかりで、よくできたカリキュラムだと感じたから
- 1. 農業土木について深く学べたから。
- 2. 講義で習った内容と大方合致しているため
- 2. 教育目的通りの内容を身につけることができたから。
- 2. 農業土木技術者として、社会へ貢献できる環境が整っているから。
- 2. 専門をしっかり学べるから
- 2. 基礎的授業が多くあったため
- 2. 授業がしつかりしていた。
- 2. 農業土木について学ぶことができたから
- 2. 4年間通して、土木の知識がある程度身についた。
- 2. 授業が上記に則って行われていたため
- 2. 教育目的に沿った学習をしているから
- 2. 目標となる人材に近づけた感じたから
- 2. 授業の内容が目標に則しているから
- 2. カリキュラムに沿ったことを学んでいるから
- 2. 水、土、農業土木に関する知識を幅広く習得できるため
- 2. 授業でも習ったから

「学科の専門教育について]

設問 7. 本学部では年度初めに学年毎にガイダンスを行っていますが、ガイダンスの内容は適切だったと思いますか。

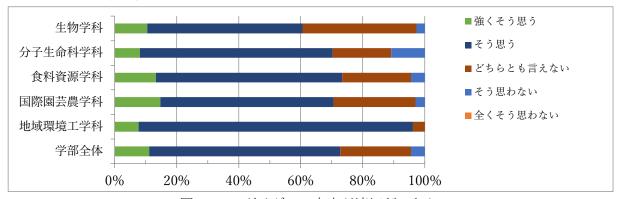


図 I - 7. ガイダンス内容が適切だったか

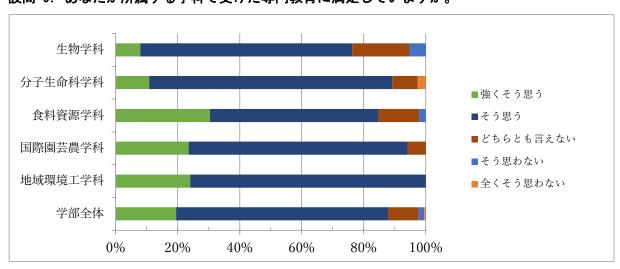
学部全体では、肯定的な意見の割合が 73%であり、過去 3 年(平成 29 年度 71%、平成 30 年度 75%、令和元年度 72%) と同程度であった。地域環境工学科で肯定的な評価が 95%以上であるのに対して、生物学科はおおよそ 60%だった。

生物学科 分子生命科学科 ■強くそう思う 食料資源学科 ■そう思う ■どちらとも言えない 国際園芸農学科 ■そう思わない 地域環境工学科 ■全くそう思わない 学部全体 0% 20% 40% 60% 80% 100%

設問 8. シラバスは受講科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。

図 I-8. シラバスは役立ったか

学部全体での肯定的な意見は 92%で、過去 3 年間(平成 29 年度 81%、平成 30 年度 83%、令和元年度 88%)に比べて若干上昇した。どの学科でも肯定意見は 8 割を超えているなかでも、食料資源学科での肯定的意見は 100%だった。



設問 9. あなたが所属する学科で受けた専門教育に満足していますか。

図 I-8. あなたが所属する学科で受けた専門教育に満足しているか

学部全体では、肯定的意見が88%で過去3年間(平成29年79%、平成30年81%、令和元年度82%)に比べて若干上昇した。生物学科だけが肯定的意見が80%を下回った。

設問 10. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない 5. 全くそう思わない

【生物学科】

- 1. 深く学べた
- 1. 講義が良かったから
- 1. 生物に関わることを学びに来たから
- 2. 専門教育の授業は楽しいものばかりだったが、知識を入れにくい授業をする先生もいた。
- 2. 学会発表の理解の基礎知識にいかせたから
- 2. ほとんどの先生方の講義に満足いったが、そうでない先生が在籍していたため。
- 2. 大体イメージ通りだったから
- 2. 農業についての知識を幅広く得ることが出来たから。
- 2. 生物学について学べたから
- 2. 興味ある内容の授業が受けれたから
- 2. そう思うから
- 2. そう思うから
- 2. 興味があったがなくなった分野、興味がなかったが湧いた分野があるため、専門教育のさわりとしてはよかった。
- 2. 満足してるため
- 2. 先生方によって様々な専門的な内容に触れていて、いろんな角度で生物学に触れることができました。
- 2. より専門的な知識に触れることが可能なため
- 2. 知見は深まったと思う
- 2. 深い知識を与えてくれたから。
- 2. 楽しめたので
- 2. この4年間で、様々な興味深いお話が聞けた上に、知識もつけることができたため
- 2. 十分に知識を得れるから
- 2. 各専門教育が分離せず、それぞれの知識が繋ぎ合うような形で知識をつけていけるため。
- 2. 興味深い内容の講義もあったが、全く興味をそそられない内容・展開の授業もいくつかあったため。
- 2. 生物学に関する様々な知識を学ぶことのできる内容だったため。
- 2. 幅広い分野の知識を得ることができ、満足しています。
- 2. 基礎生物学、生態学ともに幅広く学べたから。
- 2. 研究室配属後に研究活動に勤しめたため。
- 2. ある程度、望んでいた内容を学ぶことができたから。
- 3. 構成不十分な講義があったため。
- 3. 必要性の感じられない授業や必要性はあるが指導内容に納得いかないものもあるから
- 3. 講義を取ってないから
- 3. 人間関係に苦労して研究に集中出来なかったため
- 3. 生物学といっても色々な教科に分かれているので理解が難しいため。

- 4. 知識として身についていないから。
- 4. 受けたくない授業もあったから

【分子生命科学科】

- 1. 興味深く専門的な内容の講義を多く履修できたと思ったから。
- 1. 幅広く専門分野を学ぶことができ、さまざまな課題に対して多面的に考えることができるようになったから
- 1. 専門的な教育を受けられ、身のためになったから。
- 2. 実験などで専門知識を身につける事が出来た。
- 2. 学べた
- 2. 専門知識の蓄積と社会の貢献度合いが証明された
- 2. 自分の進路選択に大きく関わったため。
- 2. 近代の生物学における様々な知識を会得することが出来た
- 2. 幅広い分野にわたって基礎的な知識を得られたと思うから。
- 2. 先進の研究について学べた
- 2. 講義内容の難度が自分に丁度良かったため
- 2. 特になし
- 2. 授業で感じたため
- 2. 学びたかった授業は多くあった。
- 2. そう思うため。
- 2. 一部疑問が残るこうぎがあったため
- 2. 専門分野をいろんな観点から学べたから。
- 2. 狙い通りの学びができたため
- 2. 講義で学び、研究で活かして満足する教育が受けられたため
- 2. 可も無く不可もなかった
- 2. 専門的な知識が身についたと思ったから。
- 2. アンケートの理由欄が多すぎて面倒、選択方式にして欲しい。
- 2. 有機化学、生化学、分子生物学といったミクロな生物系の知識を得ることができたため生物
- 2. 自分の学習したい分野からそこから繋がる内容まで学習することが出来る。
- 3. 教授によって授業の質にばらつきがあったから。
- 3. 必要な基礎知識が多いことは理解しているが、実際に研究室配属されてから、卒業研究を行うことができる時間が足りないと感じたから。
- 5. 教員の自由な気がした

【食料資源学科】

- 1. そう思ったから。
- 1. 食業に興味を持つきっかけは専門授業を受ければ受けるほどです。
- 1. 基礎的分野から発展分野にわたり、様々な学問を学ぶことができたと考えているため。
- 1. 非常に興味深い内容の授業が多かったため。
- 1. さまざまな資格も取れるような授業内容になっていたから。

- 1. 研究室でのゼミや卒論の内容にとても満足しているため
- 1. 勉強になったから
- 1. 興味があることを学べたと思うから
- 1. 生産環境や栄養評価、安全性の確保など、「食」をテーマにあらゆる方向からの講義を受けられたと思うため。
- 1. 他では学べないことが学べたため
- 1. 4年間通して学びたかったことが学べた。
- 1. 不満に感じたことがないため。
- 2. 元々興味のある分野だったので、それなりに面白いと思って受講していたから。
- 2. 興味のある授業が多かったため
- 2. 入学前に期待していた通りのものを学べたから。
- 2. 卒業研究において役に立ったから。
- 2. 食品に関連する知識を広く学べたから
- 2. 自分の興味のある分野を良い環境で学ぶことができたから。
- 2. 研究に関わる分野以外も広く受けることができたため。
- 2. 食品科学コースでは、衛生や栄養の授業以外にも食品加工の実習や授業があり、充実していたため。
- 2. 食に関する知識を多く学べた
- 2. 座学が多かったように思う。
- 2. 食品に関する知識を様々な角度から学ぶことができたため。
- 2. 入学前に学びたいと思ったことを学べたため。
- 2. 色々な分野の授業を受けることができたから
- 2. 入学前から学びたいと考えていた分野について学べたから
- 2. 適切な難易度だったと思うから
- 2. 自分の専攻していた分野の存在もそうだが、いろいろな分野の存在を知れた
- 2. 学びたいことを学べた
- 2. 深く学べる
- 2. 専門科目がしつかりしている
- 2. 専門性の高い内容だったから
- 3. 専門という割にはすでに知っている内容が多かったり、浅い内容の授業があったから。
- 3. もう少し食品以外の講義も受けたかったから。
- 3. 1年生のときに、作物育種学や、食品なんちゃら学など、いきなり専門的なことをやってもわからない。それよりかは、生化学だったり、基本的なことを幅広く履修すべき。基礎的なことを学んでから、2、3年で少し専門的なことをやれば、良いと思う。
- 3. 進む予定の分野の講義が多めに選択できると嬉しい。
- 3. 実験する設備が整っていない
- 4. 自分が研究してい分野の授業が少なくて、配属後にとても苦労した。

【国際園芸農学科】

1. 自信の引き出しが増えたから。

- 1. 専門分野に関して多くの知識を得ることができたから。
- 1. 他では経験できないと感じたため
- 1. 非常に興味深い内容だったから
- 1. 満足しているから
- 1. ここでしか受けられないと感じる講義があったから
- 1. ゼミが充実していた
- 2. 幅広く学ぶことができた。
- 2. 基礎から応用的な学問まで学べたので。
- 2. 農業について幅広く学べたから。
- 2. 3年次以降の研究室で、専門分野の知識を身に着けることができたため
- 2. 農場実習が多く、実験なども毎週行われていたから
- 2. 基本的な知識を得た
- 2. 農場実習は刺激的であったと感じる。
- 2. 園芸に関する知識をたくさん得られたから。
- 2. 自分が学びたいと思っていたことを多く学ぶことが出来たから。
- 2. 自分の知りたい知識にあった濃い授業であったと思う為
- 2. 楽しかったから。
- 2. 良いと思うから
- 2. 専門的な知識を身につけられた為
- 2. 普段の生活では知ることが出来ないものを学べたから
- 2. 自分の興味がある分野の講義を受けられたから。
- 2. フィールドワークを基に理論等に当てはめて取り組めたから。
- 2. シラバス通りに進むとは限らなかったが、評価基準など事前に知ることができ役だったから
- 2. 座学だけでなく、海外研修や実習など実践的な講義を行えるため。
- 3. 意欲さえ十分にあれば自学できる知識も多かったので
- 3. 基本的な事は多く学べたが、授業によってはあまり専門的でもないものもあった

【地域環境工学科】

- 1. 仕事する上で、大切なベースの部分を学べたから。
- 1. 教授が丁寧に説明してくださったから。
- 1. 他大学よりも専門的に感じた。
- 1. 授業がしっかりしていた。
- 2. 自分が身に付けた知識を社会に出ても活かせると思ったから。
- 2. 社会に出て役立つ専門授業が多かったから
- 2. 就職に際して必要な専門知識を身につけることができたから
- 2. 面白かった
- 2. わかりやすかったから
- 2. 専門科目について一通り授業を受けることが出来たから
- 2. 無事に土木系に就職できたため
- 2. 農業土木の分野を中心として知識を習得できたため

- 2. 学んだ知識が就活など生かせたから
- 2. 役に立つ
- 2. 不満なところがなかったから
- 2. 自分がこれから使うであろう専門知識を得られたため
- 2. よく学べた。
- 2. 身になったから
- 2. 各分野に専門の先生がいるため、疑問がある場合すぐに質問に行ける環境が整っていたから。

[教員の指導について]

設問 11. 所属する学科の教員の、講義・実習・演習などにおける学生への指導や対応に満足していますか(卒業研究については設問 25 で別に聞きます)。

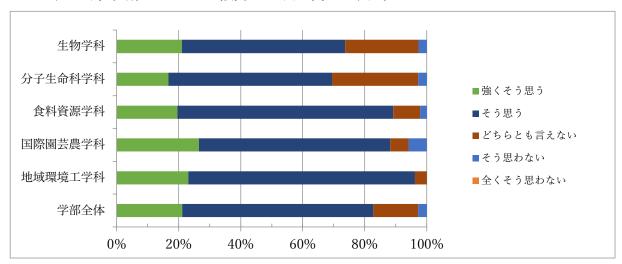


図 I-11. 教員の指導や対応に満足か

学部全体では83%の学生が肯定的な意見であった(平成27年度69%、平成28年度72%、平成29年74%、平成30年82%、令和元年度80%)。過去5年間(平成27年度から平成30年度)で微増し続けていたが、平成30年度以降、約80%で推移している。過去3年の傾向では、生物学科と分子生命科学科の肯定的な評価は他学科よりも低く、今年度は80%を下回ったのに対して、例年通り、地域環境工学科では肯定的意見が非常に多かった。

設問 12. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない 5. 全くそう思わない

【生物学科】

- 1. しっかりと指導してくださるから
- 1. 多様な専門を持つ先生方から多くの知見を得たため
- 1. そう思うから
- 1. 野外実習はとても楽しかった
- 1. 聞きににいったら優しく教えてくれるから
- 1. 深い知識を与えてくれたから。
- 1. 生物に関わる様々な分野の先生に関わることができたため。

- 2. 数名、とても満足のいかない指導をされる方がいるため。
- 2. 指導が粗い先生がいて適切な実験が出来ない回があった。
- 2. 丁寧に教示して頂いたので、概ね満足している。
- 2. 皆さん丁寧に講義してくださったから。
- 2. 親身に相談に乗ってもらった
- 2. 熱心に教えてくれたから。
- 2. そう思うから
- 2. 知識の理解を深められたため
- 2. 教員の多くは優しく接して下さった
- 2. 極稀に、満足のできない対応をされたことがあるが、殆どの先生方は真摯に対応して頂けたため。
- 2. 熱心に指導してくださるから
- 2. 求めた疑問にはほぼ何かしらの解答や解説を与えてくれるため。
- 2. 大半の先生が親切な講義を展開しているが、やはりそうではない先生も目についてしまう。
- 2. 様々な教員の方が学生に分かりやすい講義などをされており、研究室でも一人一人に親身になって研究の手助けをしてもらったため。
- 2. レポートの書き方や解剖への姿勢なども教えていただいたため
- 2. わからないことに対して積極的に指導してもらえたため。
- 2. 学生の理解を深めるための工夫をして、講義・実習・演習をされていたから。
- 3. 先生によって異なるから
- 3. 先生の機嫌によって変わるから。
- 3. 対応が悪い人もいるから
- 3. どちらとも言えない
- 3. 伝わらないこともあるため
- 3. 実際目の当たりにした環境では快適でしたが苦労してる人の話も聞いたので
- 3. 教員によって指導や対応に満足できる人とそうでない人がいたから。

【分子生命科学科】

- 1. 適切にケアをしていただけたため
- 1. 丁寧にお教えいただけたから。
- 1. 懇切丁寧なご指導をいただけたため
- 2. 学生の理解を深める工夫が講義内でよく見られたから。
- 2. 講義は充分な品質を持っていると感じたから。
- 2. ゾウリムシについて詳しく教えてくれた
- 2. 丁寧で分かりやすい指導を受けることが出来た
- 2. 質問等に行った際にも丁寧に対応していただけたから。
- 2. 必要最低限以上のことを学ばせてもらった
- 2. 特になし
- 2. そう思うため。
- 2. 一部に満足行かないものがあった

- 2. 実験を通していろんな考え方をできたから
- 2. 適切な学習のサポートがあった。
- 2. 説明内容が分かりにくい講義もありましたが、全体的に言うと、何かの問題があれば、教員と相談することあるいは解答してもらうことができて、満足しています。
- 2. アンケートの理由欄が多すぎて面倒、選択方式にして欲しい。
- 2. 概ね想像通りの指導
- 2. 研究に対し親身に指導してくれ、相談にも乗ってくれる。
- 3. いい教授もいれば悪い教授もいるから
- 3. 人による
- 3. 各教員の格差が大きいと感じたため。
- 3. 教授によって変わる。良い先生もいた。
- 3. 指導に熱心な先生とそれほどでも無い先生の差が激しかった
- 3. 授業によって差はあった。
- 3. 学生の理解度と授業・試験が伴っていないと感じることがあったから
- 3. 教員による
- 3. 良い教員もいればハラスメント体質の強い教員もいるから
- 4. サポートがない

【食料資源学科】

- 1. すごく疑問を分かりやすく説明してくれたり、指導もしっかりしてくれました。
- 1. 相談事などにも真摯に対応してくださったから。
- 1. 主体的に取り組み、意見を求めに行けば懇切丁寧に指導してくださったから
- 1. 勉強になったから
- 1. 専門的な技術などについて学べたから
- 1. 熱心に指導を行っていたため
- 1. 質問に対して適切に回答し、十分な指導をしていただいているため。
- 2. 指導や対応に不満を持ったことはないため。
- 2. そう思ったから。
- 2. 学生のために色々工夫していたと思うから
- 2. 講義ありがとうございました。
- 2. どの学生においても平等に対応していたと思うから。
- 2. 課題の提示や講義での説明を丁寧にしていていただいたと考えているため。
- 2. 教授がしっかり授業してくれたから。
- 2. 満足しているから。
- 2. 特に疑問や不満などが無かったため。
- 2. 人によりけりだが、ちゃんと単位を取れるくらい理解はできたため。
- 2. 授業はわかりやすく、評価方法も明確であったため。
- 2. 丁寧に指導してくれた
- 2. 教員による。
- 2. 理由は特にない。

- 2. 指導や対応に疑問を感じたことがなかったため。
- 2. 丁寧な指導だったから
- 2. 試験対策をしやすい授業が多く、また、あらかじめ成績評価方法が明らかであり、先生方の温情を感じたため。
- 2. 手厚かったと思うから
- 2. 特に不都合は感じなかったから
- 2. 役立つ知識を得ることができる内容だった
- 2. 説明がわかりやすかった
- 2. 分からないことはわかるまで教えてくれたから。
- 2. スライドがしっかりしている
- 2. 疑問に対して詳しく教えてくれたから。
- 3. 講義で板書の文字が読み取れないことがあった
- 3. いろいろな講義や実験などがあったため。
- 3. 覚えてない

【国際園芸農学科】

- 1. 多くの調査を体験できたため
- 1. 非常に丁寧であるため。
- 1. しっかりとした指導が行われていたから。
- 1. 講義に満足している為
- 1. 非常に良くしてもらった
- 1. 満足しているから
- 1. 各授業で熱心に指導してくださった
- 1. 自分の知りたいことや分からないことについて、先生は真摯に向き合ってくれたので。
- 2. 自分の学ぶ意欲さえあれば、担当の先生は何事にも対応してくれた。
- 2. 生徒、一人一人を見て、適切なご指導をしていただきました。
- 2. 何を覚えておくべきかをしっかり伝えてくれるので、後々役に立つことが多かった。
- 2. 質問すれば対応してくれる方たちだと思う。
- 2. 分かりやすい授業でした。
- 2. 退屈な時間が少なかったと感じるため
- 2. 実際に体験しながら学ぶことが出来たから。
- 2. とても良くしていただいたと思うため
- 2. 聞きたいことをすぐに聞けた。
- 2. 良いと思うから
- 2. 特に不満はない。
- 2. 専門科目については講義に対する不満が特にないから
- 3. 結局は自分達で先輩などから情報収集していらから。
- 4. 回答を控えさせていただきます
- 4. 教員によって対応がバラバラ

【地域環境工学科】

- 1. 適切な指導だったと思うため
- 1. 先生がしっかりしていた。
- 1. 不満なところがなかったから
- 2. 大学生として見てくれているから。
- 2. わかりやすい。
- 2. 満足しているから
- 2. 親身に教えていただいた
- 2. 学生の理解度を見ながら授業をしてくれていた
- 2. 専門をある程度理解できた
- 2. 特に不満を感じなかったため
- 2. 特になし
- 2. 質問したら丁寧に指導をしてくれるため
- 2. わかりやすかった。
- 2. 分かりやすかったから
- 2. 丁寧に指導してもらえたから。

設問 13. 履修した科目の成績評価について質問します。成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはありますか。

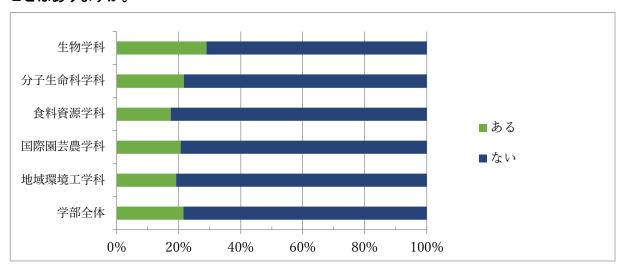


図 I - 13. 成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはあるか

学部全体で成績評価に疑問があったと回答した学生の割合は22%で、令和元年度(23%)と同程度であった。

設問 14. 疑問や異議があったときは、学部教務に「成績評価の問い合わせ」を提出し問い合わせできることになっていますが、あなたはそれをしましたか。した場合、その回答に満足しましたか。具体的に記入して下さい。

1. した 2. しなかった 3. 疑問や異議がなかった

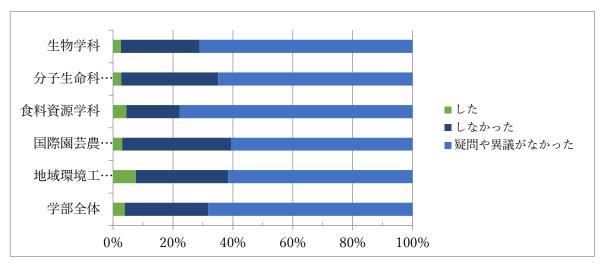


図 I - 14. 成績評価の問い合わせをしたか

設問 15. 問い合わせをした場合、その回答に満足しましたか。具体的に記入して下さい。

【生物学科】

- 1. 養教育の英語の単位が、最初「可」と通知されたが後に「不可」とされ問い合わせたが、納得は出来ず、諦めて次年度単位を取得した。
- 3. しなかった
- 3. 問い合わせをしていない

【分子生命科学科】

3. なし

【食料資源学科】

- 1. あまり納得がいかなかった。
- 3. 問い合わせをしていない

【国際園芸農学科】

- 1. 問い合わせに対する回答がなかったので不満である
- 3. 特になし

【地域環境工学科】

- 1. 満足した。
- 1. 気にするほどでもないので、スルーした
- 2. していない
- 3. 自分の成績が悪かったと、先生に言われ、納得してもう一度受けました。

[学生の主体的学習について]

設問 16. 講義や演習の受講に当たり、その講義の受講期間中にあなたは講義室での受講時間の 何倍程度の時間を、講義室外での学習(予習や復習など)に当てましたか。大学設置基準では、 2 単位の科目の場合、90 時間の学習が必要になりますが、講義室では 30 時間 (90 分を 2 時間と して扱い×15 回=30 時間)の学習時間しかありません。そこで、講義室外での学習が必要にな ります(講義室での2倍の時間)。学習時間にはインターネットを利用した関連情報の収集、課 題やレポートの作成、外書講読・文献講読・専門英語の予習、小テストのための勉強、中間や期 末試験のための勉強、研究室内でのプレゼン準備なども含めても構いません。ある1科目を想定 して回答しても構いません。

- 1. 0.5 倍未満
- 2. 0.5 倍以上~1.0 倍未満 3. 1.0 倍~2.0 倍未満
- 4. 2.0 倍~3.0 倍未満 5. 3.0 倍以上

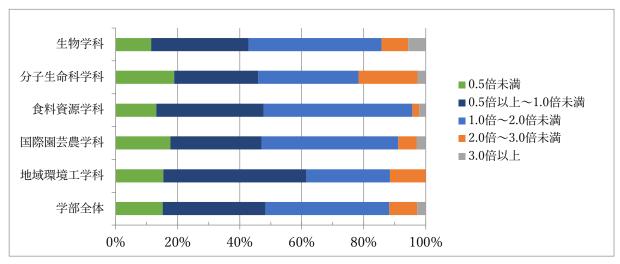


図 I-16. 1日平均どの程度の時間を予習や復習に充てたか

学部全体での学習時間について、「1.0 倍未満」の割合が 48%(平成 30 年 53%、令和元年度 48%)、「1~2 倍未満」と回答する割合が40%(平成30年33%、令和元年度36%)、「2.0倍以上」 の割合が 12% (平成 30 年 14%、令和元年度 16%) であり、ほぼ横ばいの状態であることがわかっ た。

設問 17. 大学教育では、 学生自身の主体的、 意欲的な学習が要求されます。あなたは講義に ついてどのような姿勢で取り組みましたか。

主体的・意欲的学習を、「学生自身が講義室外で学習したことを示す(可能性のある)記述」 の有無を基準として判断すると、 回答総数 144 件のうち、 該当したのは 79 件(55%) であった (令和元年度は、回答総数 164 件、 該当したのは 77 件(47%))。 設問 16 で示したとおり、1 日 当たりの予習と復習時間の合計時間が講義時間の1倍以上と回答した学生の割合が学部全体で約 50%にのぼることからすると、おおよそ半数の学生は講義外での学習に取り組んでいると思われ る。

これに対して、単位を取得することのみを目的とし、「授業は休まずしっかり聞く/理解するよ う頑張って聞く」という意味の受動的であることが明白な記述も多数あり、これらも1日当たり の予習と復習時間の合計時間が講義時間の1倍未満と回答した学生の割合が学部全体で48%にの ぼっていることと関連があるように思われる。この傾向は過去3年間でほぼ変化していない。

今年度の学生は改組後2世代目であり、1年次に教養教育を受け、大学での学びにおける「主体的・意欲的な学習」のあるべき姿勢について、入学直後から積極的に指導することが、基礎ゼミ・地域ゼミなどを介して行われるようになっている。しかしながら、そのような効果が表れているようには見えず、来年度以降の変化を引き続き見ていく必要がある。

【生物学科】

- ・講義内容に加え、疑問点は質問したり、自ら調べるなどしました。
- ・興味がある科目は授業・レポート共に意欲的に取り組んだが、興味がないものは単位を最低限 取れるような勉強をした。
- ・研究において必要になるであろう基礎知識を取り入れられるように取り組んだ
- ・良い単位の結果を取得するために努力もしたが、わからない場所は質問したり友人に聞いたりした。
- ・可能な限り意欲的に取り組んだ
- 普通
- ・講義の内容をしっかり理解したいという姿勢
- ・主体的に学んだ
- 休まず出席しました。
- 理解しようとした
- ・授業内でその先生しか話せない話をよ学ぼうとした
- ・それなりの姿勢で取り組んだ
- ・興味があるのは積極的に
- ・あくまでも自学主体
- やる気を持って
- 内容を理解しようと、講義外で知識を取り入れました。
- 受け身
- ・授業料以上は学ぼうと思っていた
- ・集中して取り組んだ。
- ・極力欠席をしないように意識
- ・知識を深めるための姿勢
- ・自分から進んで学ぶ姿勢。
- ・人一倍真面目とはいえなくとも人二倍自堕落ではなく。
- ・基本的に講義の予習や復習を繰り返していたり、論文を読んで知識を蓄えていた。
- ・興味深い知識を知れると考えているため、できるだけ自分から調べるようにしている
- ・興味ある知識に関しては、それを良く知る人から学び方を教わるようにしていた
- ・自分の好きな分野に関しては意欲的に取り組んだ
- ・興味があるもしくは将来役に立ちそうな内容の授業には積極的な姿勢で取り組んでいました。
- 努力はしていた
- やや受け身の姿勢でした。
- ・主に、自分の学びたいことを講義を通じて吸収しようとしていた。

- ・意欲的に取り組んだ。
- ・教養教育科目のみ意欲的に取り組んだ
- ・興味のある生物学に対する知識を深め、生態学的な理解を深めるように取り組んだ。

【分子生命科学科】

- ・シラバスに毎回目を通して必要な部分の予習やインターネットを使った検索による事前学習を していた。
- 全てを自分のものにするつもりでとりくんだ。
- ・ 積極的に参加した。
- ・単位が取れれば良い
- ・わからないところは自主的に調べた
- 意欲的ではない
- 類杖をついていた
- ・教科書だけでなく、参考図書を図書館で借りて読んだ
- ・意欲的に取り組んだ
- 講義によって様々でした。
- ・授業内容をきちんと理解できているか、他人に説明できるかを考えながら受けていました。
- ・予習をしっかりして、当日の講義で困らないようにする。
- ・意欲的な時と受動的な時があった
- ・全身全霊をかけて望みました
- ・講義に対して、意欲的に学んだ。
- ・単位が取れるように、欠席せず、勉強に取り組んだ。
- ・知らないことを知りたいという姿勢。
- ・がんばっていた
- ・学習意欲は弱く、模範的な学生ではなかった。
- ・ 積極的に取り組んだ
- ・主体的に取り組んだ
- ・主体的な姿勢
- ・受動的な姿勢
- 意欲的だった。
- ・講義中の内容を聴き、印象に残らせます。あまり理解できなかったところは復習します。
- ・残念ながら受動的、ただ、しっかり聞く
- ・授業で習うことを理解する。
- ・勉学において行かれないように取り組んだ

【食料資源学科】

- ・授業は1度も休んだことがないし、教授の話をしっかり聞き、試験なども手を抜かずに取り組みました。
- ・真面目に講義を受けた。
- ・特に興味を持ったものは自分で調べたりした
- ・講義中に興味をもったことについては自分で調べるなどして知識を深めた。

- ・やや意欲的に取組んだ
- ・好きな分野の話は、積極的に聞いた
- ・まず講義内に集中して受講しました。後、気になった所は自立で調べたり先生に質問したりした。
- ・意欲的に取り組んだ。
- ・予習はあまり行わなかったが、復習や更なる疑問などについて調べ、疑問を取り除くようにしてから、次の章に移るように取り組んだ。
- ・自分に必要なことは何かを最優先に考えた姿勢。
- ・真摯に取り組んだ。
- ・単位習得を目標に学習した。
- ・講義自体には真面目に取り組んでも、それを応用しようといった主体性はなかった
- ・研究室配属されてから自主的、意欲的に学習及び研究に励んだ。
- ・進む分野に関しては特に意欲的に取り組んだ。
- ・板書を毎回しっかり記録し、テスト勉強に役立てるように努めた。また、事前に教科書や配布 資料を読むなどした。
- ・1~2年生では教養科目が多く、余り興味が持てない科目もあったため、講義には出ても熱心に 勉強するということは多くなかった。3年生から研究室に配属され、専門授業が多くなってから は、どの講義も興味深く、きちんとメモをとり、わからないことを自分で調べることが多かった。
- ・教えられた最低限の事は理解する
- ・能動的に学んでいたが、その知識を活かそうとはしていなかったと思う。
- ・私は特に大学3年生以降はバイトも辞めて学業に専念した。それが本来大学生としてすべきことだと早く気付ければ良かったと少し後悔しました。
- ・一般的な意欲で取り組んだ
- ・普通に取り組んだ。
- ・積極的に勉強を行いました。
- ・わからない点は指導教員や図書館を利用し、自主的に勉強をした。
- 言われたことだけを行ってきた
- ・その回の授業テーマを意識しながら聞くようにした。
- ・主体的に取り組んだと思います。
- 分からないことをそのままにしないように心がけていた
- ・遅刻欠席と締切に気をつけていた
- ・なるべく講義の内容を納得できるように。
- 少し甘かった
- ちゃんと聞いてた
- ・真面目に取り組んだ
- ノートは必ずとる。
- ・授業前に予習をした
- ・反省すべきところではありますが、受動的な姿勢で受講していました。
- ・面白い、興味深いものは講義外の内容も調べた
- ・疑問点がある際は教員に積極的に質問をする。

【国際園芸農学科】

- 単位をとりたい
- ・メモを積極的に取るようにした。
- ・メモをしながら、できるだけ先生の話を聞いた。
- ・自分の将来へ役立つものかどうか考えて受講した
- ・1、2年生のころは大変意欲的だったが、周りの学生との熱量の差が著しかったためやる気をなくした。
- ・知識を自分のものにしようと考え、真剣に取り組んだ。
- ・ 高校までの授業の延長としてできるだけ余裕を持って単位を取れるように学習するという姿勢 だった。
- ・真面目に取り組みました。
- ・講義はしっかりと聞くようにしたが、予習や復習などはあまりしなかった。
- ・自身の気になる課題をみつけ、解決法を模索していく姿勢
- ・自分の興味関心のある分野の講義を多く取った。
- おおむね主体的であったと思います
- ・単位が欲しいと思っていた。
- 頑張って
- ・やや能動的であった
- ・授業に出てきた内容を理解する程度
- そこまで意欲的ではなかった。
- ・友人とのディスカッションを通じて学ぼうという姿勢
- ・分からないことがあったら、自分で調べるなどしていた
- ・15回の講義を一定の意欲を維持する姿勢
- ・理解するように努めた
- ・妥協せずに取り組んだ
- ・常に自分の知りたいことを優先した
- ・興味のあるものにのみ力を入れた
- ・大学3年生以降は意欲的だった。

【地域環境工学科】

- ・もっと真面目に授業を受けたら良かったなと思ってます。
- ・最低限の単位を取りつつ、課外活動にも力を入れる。
- ・先生が言った大事なことをメモにとった
- ・真面目に。
- ・科目によるが、主体的に取り組んだ
- 覚えるだけでなく理解する
- 受け身だった
- ・前向きな姿勢
- ・真面目に取り組んだ。
- ・専門的な知識を身につける

- ・真面目に
- ・授業で教わる知識の習得に努めた
- 楽観的
- 教わったことは理解できるようにしていた
- ・興味のある講義は集中して参加した
- しっかり聞いていた。
- テスト前に勉強をした
- ・専門の知識を深められるように全ての授業に出席するように心がけていた。

設問 18. 実験・実習についてはどうですか。

コメントの約8割(145件中112件、77%)が「真剣に取り組んだ」、「積極的に行った」など令和元年度(161件中77件、48%)より前向きな記述が増加した。「学生実験の回数を多くできればいいのではないかと思った。(分子生命科学科)」、「コースに分かれてから行う実習が、もう少し多ければ良いと感じた。(食料資源学科)」、「実習は2年生でもいいが、実験は3年生でやる方が卒業研究の時に困りにくくなると感じた。(国際園芸学科)」など要望もあった。

【生物学科】

- ・熱心に取り組んだ
- ・研究室配属の準備としてはとてもためになりました。
- ・意欲的に取り組んだ。レポートは余裕を持って提出することは困難だった。
- ・講義学んだことを思い出しながら行った
- ・実験・実習前に目標を立てて動き、わからないところは質問をするなどした。
- ・実践的に学べた
- ・やや意欲的
- しっかりついて行きたいという姿勢
- ・基礎から整体まで様々に学べた
- 為になりました。
- 面白かった
- ・積極的に参加した
- 良かったと思う
- ・積極的に受けた
- ・失敗を恐れない
- 伝わらない部分がある
- 適切です。
- できるだけ知識を得ようとした
- 楽しかった
- ・チームでやる時も、個人でやる時も積極的に取り組んだ。
- ・研究室配属の前に行われるため適正なタイミングで行われている
- あまりよくわかっておらず、質問もあまりしていなかった
- ・協力しながら進んで実験した。

- 面白かった
- ・非常に有意義で、一般にはあまり体験しないようなことができ、非常に満足しております。
- ・研究室に配属された後は先生の協力もあるが、基本的には自分の知識も必要になるため緊張感を持って行える
- ・興味ある知識に関しては、それを良く知る人から学び方を教わるようにしていた。
- ・意欲的に取り組んだと思う。
- ・参加した実験・実習には積極的に取り組みました。
- ・真摯に取り組み、様々な面で生物学に対する実験などの知識を深めた。
- ・全力で取り組んだ
- ・配属されてからは前衛的に取り組みました。
- ・経験を通して、より専門知識や技能を高めようとしようとしていた。
- ・意欲的に取り組んだ。
- ・実習は意欲的に取り組んだ

【分子生命科学科】

- ・学生実験の回数を多くできればいいのではないかと思った。
- ・全てを自分のものにするつもりで取り組んだ
- ・ 積極的に参加した。
- ・実験は面白い
- 適切だった
- ・意欲的ではない
- ・悪くない
- ・実験はままごとにならないように予習したり、操作の意義について考えた。
- ・実際の経験を詰む良い経験となるようにとても意欲的に取り組み、関心を持ったことに対して は質問し、より理解を深めた
- ・研究室に疑問を持つ学生が多かった。
- ・人から動作を見られると手が震えてしまうことが恥ずかしく、消極的な姿勢になってしまって いました。
- ・事前に手順を確認する
- 満足
- 楽しかったです
- ・自主的に考え、学ぶことができた。
- 不満はなかった。
- ・楽しみたいという姿勢。
- ・がんばった
- ・教授自身の研究紹介の場のようになっていたことがあり、不満があった。
- ・さらに詳しく調べて取り組んだと思う。
- ・自ら率先して実験をすすめた
- ・主体的に行動した
- ・受動的な姿勢

- ・非常に意欲的だった。
- ・実際的に手を動かすことができ、それぞれの研究室の研究分野も少し把握し、いいと思います。
- ・班員と議論しながら有意義な時間を送れた
- ・基礎的な実験手法などを身につける。
- ・勉学において行かれないように取り組んだ

【食料資源学科】

- ・積極的に取り組み、その後のレポートなどもしっかりやりました。
- ・集中して取り組んだ。
- ・人とコミュニケーションをとり、楽しみながら受けた
- ・充実していたと思う。
- ・やや意欲的に取組んだ
- ・仲間と協力しながら、取り組んだ
- 充実でした
- ・意欲的に取り組んだ。
- ・各コースの内容について満遍なく触れることができ、よかったと感じている。
- 良い経験になった。
- さまざまな実験をさせていただけた。
- ・自分の卒業研究などに役立つよう考えて取り組んだ。
- ・2年、3年次とともに実験や実習の講義があったため、目的を考え主体的に臨んだ
- やや少なく感じた。
- ・意欲的に取り組んだ。
- ・事前に配布されたマニュアルを読み込んで実験に臨み、チームで協力して行った。レポートの まとめ方について自分で調べた。
- ・コースに分かれてから行う実習が、もう少し多ければ良いと感じた。
- ・技能的な面で真摯に取り組んだ
- ・集中講義以外のものは座学が殆どだった。
- ・研究費以上の実験をたくさんさせて頂きました。感謝しかありません。
- 良かった
- 少なかった。
- ・興味があることだけでなく、全ての実験実習について詳しく学べるように頑張った。
- ・大変満足している。
- 分からないことは先輩などに聞いた
- ・注意事項を特に意識していた。
- ・主体的に取り組んだと思います。
- ・熱心に取り組んだ
- ・気になることは TA の人に質問した
- ・後輩たちは学生実験が短くて大変だなと思った。
- 少し甘かった
- ・真面目に取り組んだ

- ・先輩や同期に積極的に聞く。
- 自ら率先して動いた
- ・反省すべきところではありますが、受動的な姿勢で受講していました。
- ・面白い、興味深いものは講義外の内容も調べた
- 充実している。

【国際園芸農学科】

- ・とても楽しかったです。周りの人とも仲良くなることができ、講義外でも交流を持つことができ、大学生活に幅が広がりました。
- ・先生の話を一つ一つ理解しながら、聞くようにした。
- ・実習は2年生でもいいが、実験は3年生でやる方が卒業研究の時に困りにくくなると感じた。
- ・実習は実践的で積極的に取り組もうと思えた
- ・意欲的だった
- ・楽しかったため、努力という感覚はない。
- ・良い経験
- ・農場実習は大学に入っていなければ経験できなかったため良い経験になった。
- ・真面目に取り組みました。
- ・実験のノウハウを覚えるために真剣に臨んだ。
- ・貴重な経験ができたと感じている。
- ・主体的に取り組んだ
- ・おおむね主体的であったと思います
- ・単位が欲しいと思っていた。
- 良かった
- 満足している
- ・日常では出来ないことなので意欲的に取り組んだ
- ・体力や力が必要な時は大変だった。
- ・友人とのディスカッションを通じて学ぼうという姿勢
- ・非常に良い内容だった。
- ・協調性と主体性のバランスを考えた姿勢
- ・理解するように努めた
- ・良い経験になった。コースを選ぶ素材にもなったと思う。
- ・常に自分の知りたいことを優先した
- ・周囲と協力して取り組めた
- ・実験は受動的なものが多かった。課題を与えられて調べる、等。

【地域環境工学科】

- ・知識をアウトプットすることができた。
- ・実験・実習の意味を考えてから行った
- ・積極的に。
- ・主体的に取り組んだ
- ・意義を考える

- 受け身だった
- ・前向きな姿勢
- しつかり取り組んだ。
- ・実用的な経験と共に知識を身につける
- ・ 意欲的に
- ・技術の習得に努めた
- ・楽しみながら取り組むことができた
- 楽観的
- 教わったことは理解できるようにしていた
- ・興味のある講義は集中して参加した
- しっかり聞いていた。
- テスト前に勉強をした
- ・専門の知識を深められるように全ての授業に出席するように心がけていた。

設問 19. 大学在学中のカリキュラム(教養教育も含む)の中で、もっとも印象に残った科目があれば、その科目名と理由を記入して下さい。

全回答数 111 件中 86 件 (77%) (令和元年度 126 件中 103 件 (82%)) は、講義の内容や教授法のすばらしさが理由で印象に残っている科目、代えがたい体験を理由に印象に残った実験実習科目であった。学科単位で行われる実習が印象に残るケースが強いようで、生物学科では 32 件中7件 (令和元年度 24 件中 5 件) が臨海実習あるいは生態学野外実習、食料資源学科では 27 件中3件 (令和元年度 34 件中 4 件) が食品加工学実習、地域環境工学科では 14 件中 2 件 (令和元年度 16 件中 4 件) が地域環境工学実験であった。

改組に伴う事業のひとつであった海外研修入門が必修である国際園芸農学科では、「海外研修」を挙げたものが令和元年度では36件中19件とコメントの半数に相当したのに対して、今年度は16件中2件であった。この世代が海外研修を受けた時期はまだコロナ禍ではなく、減少した理由はよくわからない。一方、海外研修入門が選択となる他4学科では、海外研修入門を印象に残っている科目にあげたのは3件(令和元年度1件)だった。また、学科毎に印象に残る科目が違う中で、農場実習は多くの学科で共通して印象に残っていた:生物学科(3名)、分子生命科学科(0名)、食料資源学科(2名)、国際園芸農学科(2名)、地域環境工学科(1名)。特に印象にない、あるいは単位取得に苦労した科目は、全回答数111件中19件(17%)(令和元年度126件中23件(18%))であった。

【生物学科】

- ・動物行動学/もっとも学びたかった分野だから
- ・臨海実習。基礎生物学研究の楽しさを知ることができた。
- ・動物生理学・例えと板書を効果的に用いながらの授業だったから。動物のみならず化学物理分 野の話もしてくれたので幅広く知識を付けることが出来た。
- ・教育実習。実際の現場で働くことでその一端を垣間見ることができた。また卒業研究の時間も 時期的に奪われたため、結果が上手くいかず苦しみを見たのも一端にあると考える。
- ・ウイルスと医療 理由:同じ生物系でも生物学と医学の見方が全く異なったから

- •農場実習
- ・国際食品マーケティング論 農業分野でのマーケティングに興味があったから。
- 生物学実験
- ・臨海実習 資料集などで見た内容を自分の手で再現できたから
- 臨海実習
- 臨海実習
- ・臨海実習:泊まりがけで楽しかったから
- 特に無し
- ・農場実習で羊の毛刈りをしたこと
- 生熊学野外実験
- 農場実習
- 山田史夫教授の授業
- ・映画スピーキング 英語の歌をステージで発表しました。
- ・植物病理学 理由:講義内容が難しく、テスト対策のための時間を多く割いたため
- ・キャリア形成の発展、面白かったから。
- ・水圏資源管理学 身近な話も多いので
- ・臨海実習 この実習でかなり、生物学的知識や、実験技術を叩きこめることができ、かなりや りがいを感じたため
- ・分子進化学 教科書の知識にとどまらず、学生の質問を取り入れて授業してくださるのがあり がたかった
- ・キノコ学。教養教育でありながら専門に近い科目であり、1.2年といった早期から専門教育の日程の窮屈さに囚われず今後の専門的知識を得ることが出来たため。
- 特にあまりないです。
- ・海外研修入門、オーストラリアに行けたから
- ・動物行動学でもともと興味のあった動物に関する様々な面白い事例などを学ぶことができたた め。
- ・キノコ学 ニッチでおもしろかった。
- ・植物生態学(講義者は杉山修一先生)専門性が高いと当時に、様々な内容を簡潔に分かりやすく紹介されていたため。植物生態学への興味・関心が非常に高まった。
- ・動物生理学。生徒からの疑問に答える時間をどの科目よりも多く取っていたから。
- ・動物行動学 行動学に興味があったから。
- ・アニメ学、「かわいい」の授業、西洋美術。興味のある分野で、知識を得ることが楽しかったか ら。

【分子生命科学科】

- ・遺伝子工学 理由:他の講義であまり詳しく触れない内容を基礎から応用まで学ぶことができたから。
- 卒業研究
- 分子生命科学実験
- ・生体物理化学1 ある意味強烈だった

- ・分子生物学 I 面白かった
- ・なし
- 特に無し
- ・日本の消費文化、映画を見たので覚えてる。
- 微生物生熊学
- ・生体物理化学1 なかなか理解できず、教授にご迷惑をおかけしてしまったから。
- ・バトミントン
- 細胞分子生物学
- ・とくにないです。
- 特になし
- ・生体物理化学:落単率が高いことで有名だったから。
- 特になし
- ・生化学、最も興味のある分野だったため
- 植物生化学
- ・生物有機化学 教員から受けたハラスメント的な言葉が忘れられない
- ・卒業研究:大変だったので
- ·分子生命学 I と Ⅱ
- ・Reading 初級(教養) 能動的に output を重視

- ・農場実習 初めて農業に取り組み、大変さを学んだから。
- ・鍵盤楽器演習 ピアノのレッスンを受けることができ、専門知識のある教員のレッスン方法が 論理的でとても面白かった
- ・文学-現代女性文学の世界-;読んだ本の感想をほとんど初対面の人と話し合うというのが新鮮だった
- ・食品安全管理学、食産業情報論 理由、公衆衛生関係が好きだから
- ・微生物バイオテクノロジーです。教科書の知識以外実際の情報や解説ビデオも活躍してくれました。
- ・食品加工学実験:座学ではなく実際に演習したことで実験内容が印象に残っている。
- · 作物育種学 [
- ・食品保蔵学 日常生活に役立つ知識が多かったため。
- 農場実習。
- 分子栄養学
- 特にない
- ・昆虫生物学 分かりやすく面白い内容だった。
- ・食品加工学実習:知識だけでなく、実際に食品の加工を行うことができ、とても充実していたため。
- 食品安全生理学
- ・菌学。学びが多かったので。
- ・菌学 田中和明先生 ゼミの先生であり、最も力を入れて取り組んだ授業だったため。

- ・なし。
- ・学生実験 色々な分野の実験ができたから
- ・微生物バイオテクノロジーⅡ, 講義の合間に、内容に関わる事例や映像の紹介があり、興味深かった。
- ・作物育種学 特にわかりやすかった
- ・作物育種学 1年次の講義で最も難しかったから
- ・菌学 楽しかったので。
- ・特になし
- ・昆虫生理学 自分が興味ある分野について深く学べた
- ・食品加工学実習。みんなで食品を加工して楽しかったから。
- ・植物病理学 専攻していた科目の講義であったため。
- 分子栄養学

- ・農場実習、いつもは座学だが、外に出て体を動かして授業を行うことが新鮮だったから。
- ・海外研修:講義で聞くよりもやはり目で見たほうが驚きがあった。
- 食農経済調査実習
- 実習
- ・園芸農学基礎演習。農場実習はとてもおもしろかった。
- ・声の文化
- ・英語 授業が多い。
- 卒業研究
- ・園芸農学基礎実習です。農業の現場を身をもって学ぶことができとても勉強になりました。
- ・英語 大学内で1番学んだから。
- 作物学汎論
- ・農業実習 体験的に学習できた為
- ・実習 普段出来ないから
- 海外研修入門
- ・食料経済論・1年の前期からレポートやテスト、リアクションペーパーなどを行い、非常に大変だったが、大学の授業の厳しさも分かり、非常に良い経験となった。
- 食料経済論

【地域環境工学科】

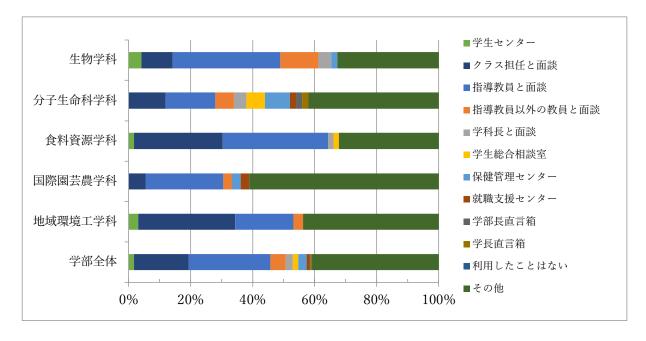
- 農業実習
- ・地域環境工学実習 今までの知識を実践的に活かせたから
- ・実験 面白かった
- ・地域計画学演習 おもしろかった
- 用基
- ・水理学 授業が丁寧で分かりやすかった。

- 海外研修入門
- ・海外研修入門 普段学んでいる技術の必要性を実感することができたため
- ・武道の世界
- ・尺八の授業、音が出たら単位確定は印象深い
- ・地域環境工学実験 実験することで今まで教わったことがよりわかるようになったから
- ・ 特になし
- ・ない
- ・卒業研究: 忙しすぎて辛かったから

[学生への教育支援、施設・設備について]

本学部や本学では皆さんに助言したり、皆さんからの相談・苦情を受け付けたり、皆さん の二一 ズを把握するために、下記のような10のルートを用意しています在学中あなたは次の(1)~(3)の 項目について主にどれを利用しましたか。

設問 20. (1) 学業



図Ⅰ-20. 学業に関する相談窓口

学業に関する相談の場合、学部全体では、「利用したことはない」と「その他」を別にすると、「指導教員と面談」26%(平成30年度36%、令和元年度26%)、「クラス担任との面談」17%(平成30年度12%、令和元年度11%)の順に高い傾向は例年通りであった。学科毎で見ると、食料資源学科では「クラス担任と面談」と「指導教員と面談」の合計が5割を超えており、特に教員への相談率が高いことがうかがえた。続いて、地域環境工学科と生物学科が高く、特に生物学科は「クラス担任と面談」と「指導教員と面談」の他に「指導教員以外の教員と面談」の割合も高いという特徴があった。

設問 21. (2) 学生生活

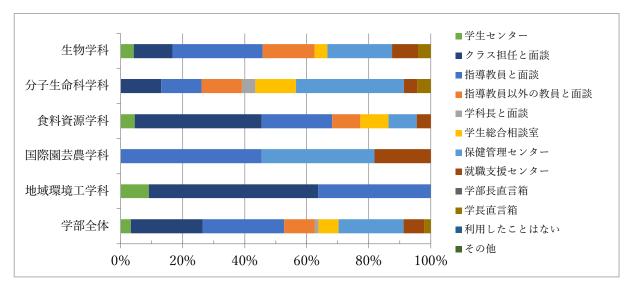


図 I-21. 学生生活に関する相談窓口

学生生活に関する相談の場合、学部全体では、「指導教員と面談」(26%、平成30年度17%、令和元年度16%)、「クラス担任と面談」(23%、平成30年度7%、令和元年度23%)、「保健管理センター」(21%、平成30年度7%、令和元年度9%)の順に高かった。

設問 22. (3) 進路

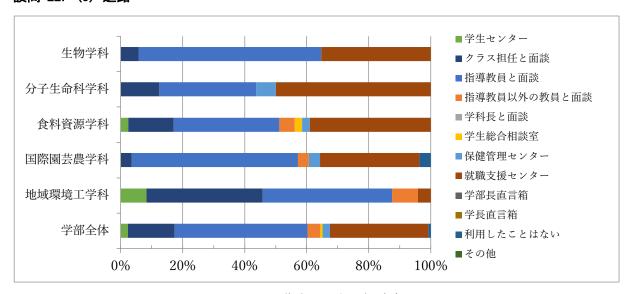


図 I-22. 進路に関する相談窓口

その他

【生物学科】

・ホームページ。

【食料資源学科】

• 公務員講座

- 大学生協
- ・キャリア形成の発展授業。
- ・農学部教務担当(主に真壁さん、工藤さん)

【地域環境工学科】

・進路担当の先生との面談、森先生。

進路に関する相談の場合、学部全体では、「指導教員と面談」(43%、平成30年度30%、令和元年度25%)が最も高かった。次に多い「就職支援センター」(32%、平成30年度32%、令和元年度34%)は昨年と同様のレベルだった。

設問 23. 本学部の以下の施設について、どのように感じていますか。

(1) 下表の該当する欄に〇を書き込んで下さい。

評 価 施 設	1. 充分満足	2. ほぼ満足	3. どちらと も言えない	4. やや不充 分	5. かなり不 充分
1. 講義室			Oncavi),;	7673
2. 実験・実習室					
3. 情報処理演習室					
4. 蔵書室(4階)					
5. 学生自習室・学生					
控室 (2階)					
6. 卒業研究を行っ					
た研究室					

1. 講義室

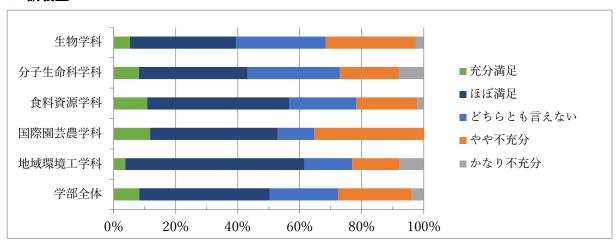


図 I - 23 - 1. 本学部の施設に対する満足度 (講義室)

平成 28 年度から一部の講義室に冷房設備が導入されている。その影響が現れるか平成 30 年度に 続き注目された。その結果、昨年度は学部全体では「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は 51%で、 昨年度は一昨年度に比べて 5%上昇して 50%となった。そして、今年度は 50%とほぼ横ばいの結 果となった。一方、令和元年度は「やや不充分」と「かなり不充分」の合計は14%で、平成30年度から21%減少していたが、今年度は28%であった。したがって、本年度は満足度が不満足度を上回る結果であったが、継続して改善する必要があるといえる。実際、設問24を読むと、変わらず講義室における夏の暑さと冬の寒さを指摘する声が非常に多い。冷房設備に関しては、いまだ導入されていない講義室もあり、今後もさらに導入を進めていく必要がある。

2. 実験・実習室

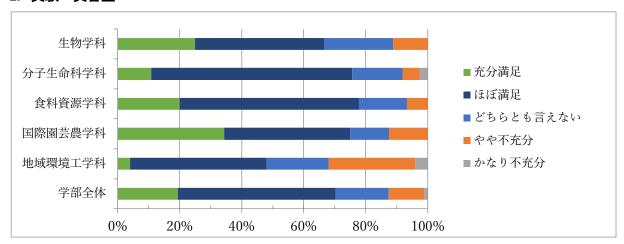


図 I - 23 - 2. 本学部の施設に対する満足度(実験・実習室)

実験・実習室について、学部全体では「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は70%であり、令和元年度から5%上昇した(平成30年度59%、令和元年度6%%)。一方、「やや不充分」と「かなり不充分」の合計は13%であり、令和元年度からほぼ横ばいの状態であった(平成30年度23%、令和元年度15%)。地域環境工学科以外の学科は満足度が6割を超えていた。

3. 情報処理演習室

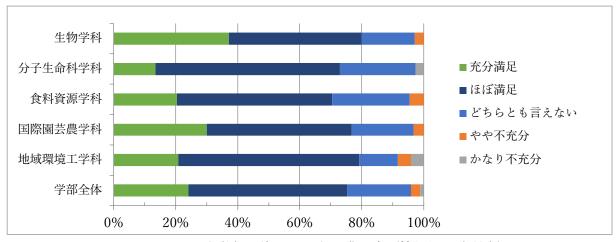


図 I - 23 - 3. 本学部の施設に対する満足度(情報処理演習室)

情報処理演習室について、学部全体では「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は75%であり、「やや不充分」と「かなり不充分」の合計(4%)を大きく上回った。情報処理演習室は過去にも満足度が高く、平成24年度以降、「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は70~79%で推移している。満足度には学科間でやや差があるように見られるが、学科間差に年次を超えた一定の傾向を必ずし

も見いだすことはできない。利用頻度のかなり低い学科もあるため、得られた値が実際に高い満足度を反映しているものかは不明である。

4. 蔵書室(4階)

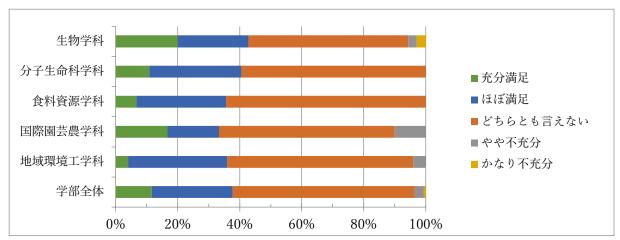


図 I - 23 - 4. 本学部の施設に対する満足度(蔵書室 [4 階])

平成 27 年度に、4 階に蔵書室を新設して図書閲覧室内の蔵書の大半を移設し、従来の図書閲覧室内の蔵書スペースに学生控室を設ける改修が実施された。そのため平成 28 年度からは、図書閲覧室の蔵書ではなく、新設された蔵書室の満足度を調査することとした。その結果、学部全体では「どちらとも言えない」が 59%で最も多かった。この割合は過去 4 年間の数値(平成 28 年度56%、平成 29 年度56%、平成 30 年度55%、令和元年度60%)とほぼ同じであり、また平成26、27 年の図書閲覧室内の蔵書スペースにおける「どちらとも言えない」の割合(47~48%)を上回った。この結果は、昨年度と変わらず蔵書室の利用が少なく、学生が所蔵図書の現状を十分に把握していないことと大きな関係があると考えられる。一方、「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は38%であり、昨年度34%と比べて横ばい状態であった。平成25年度以降27%→31%→34%→34%→34%→32%→36%→34%と推移してきたことを考えると、依然として改善の余地がある。書誌や雑誌の閲覧がオンライン利用に移行する中で蔵書室の利用を拡大しようとするなら、授業科目の参考図書や学部学生向けの専門図書を計画的に更新・拡充し、学生に積極的に周知していくことが望ましい。

5. 学生自習室・学生控室 (2階)

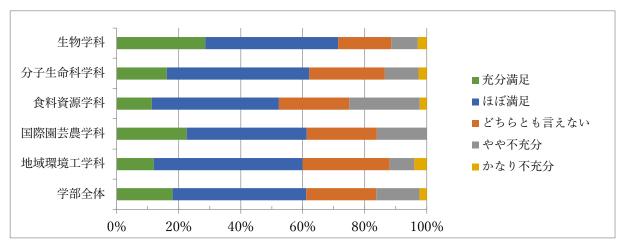


図 I - 23 - 5. 本学部の施設に対する満足度(学生自習室、学生控室 [2階])

平成27年度までは図書室の閲覧スペースと所蔵図書の満足度を別々に調査していたが、閲覧スペースの利用目的の主流が自習になってきたことと、所蔵スペースが学生控室に改修されたことを受け、平成28年度からは「学生自習室・学生控室」として、その満足度を一体的に調査することとしている。学部全体では「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は61%であり、平成30年度66%、令和元年度65%と比べて横ばい状態であった。但し、平成26、27年度の閲覧スペースおよび平成29年度の学生自習室・学生控室への満足度は、52~57%であること、また、今年度の満足度が不満足度である「やや不充分」と「かなり不充分」の合計16%(平成30年度12%、令和元年度13%)を大きく上回っていることを考えると、「学生自習室・学生控室」の運用年数も積み重なり、学生の中で定着してきたといえる。

6. 卒業研究を行った研究室

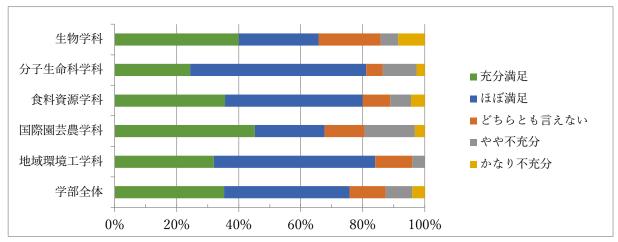


図 I - 23 - 6. 本学部の施設に対する満足度(卒業研究を行った研究室)

卒業研究を行った研究室について、「充分満足」と「ほぼ満足」の合計は全ての学科で6割を超えており、学部全体では76%である(平成29年度70%、平成30年度75%、令和元年度78%)。研究室に対する満足度が高い要因は必ずしも明らかではないが、環境(設備)というよりも、設問25卒業研究を行なったことに関する満足度が全ての学科で8割を超えているという事実とも

無関係ではなく、熱心で誠意ある指導が学生の研究室での居心地をよくしているとも考察できる。

設問 24. 各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

今年度は 58 件の要望や意見があったが、そのうち 27 件は冷暖房に関するものであった。経年的にみても、その割合は依然、増加しており、学生の切実な要望であることがうかがえる。他方、講義室への冷房設備の導入が着実に進められているので、継続して推移を見守るべきだと思う。これからは研究室の冷房環境についても検討する必要があるのかもしれない。建物内の Wi-Fi 環境の改善、トイレに関すること、学生の居室等に対する要望が挙げられていた。

【生物学科】

- ・休み時間に講義室のエアコンを停止しないでほしい。
- ・夏暑すぎて冬寒すぎるので何とか温度環境を整えて欲しいと思います。
- ・冷暖房が欲しい。
- ・少人数で各階に勉強や自習・休憩などが可能であり、安定したネット回線と速度、充電スペースなどがもっと欲しい
- ・ 特になし
- 無し
- ・実験室と学生控室は分けて欲しい
- ・エアコンを5時に止めないで欲しいです。
- ・コラボの各階のウォシュレットの格差をなくして欲しい
- 西日どうにかしてほしい
- ・講義室のエアコンを機能させてほしい
- ・研究室のパソコン・印刷機など学習補助の設備充実をしてほしい。
- ・自習室は狭く、サークル等のグループに使用されると利用できない。

【分子生命科学科】

- 大きい教室にこそクーラーが欲しかった
- ・清潔感がほしい
- カードキーが足りない
- ・なし
- ・学生が自由に質問したりしながら勉強できる場を広げてほしい。
- ・講義室の空調設備を整えて欲しい
- ・なし
- ・なし
- ・冬の間の室温が低い
- ・夏季の402講義室の環境(冷房、人口密度)

- ・農生はエアコンが付いてない部屋が多く、夏暑すぎて授業に集中できないことが多々あった。
- クーラーの設置

- ・講義室や、実験室のクーラーの完備
- ・各研究室に希望をとり、網戸の設置をお願いしたい。
- ・特にない
- ・4 階の教室は夏暑かったので、全室エアコンを完備にしてあげてほしいです。(既に対応済みであればすみません)
- ・ 今年はコロナ禍で仕方がない面もあったが、やはり冬季期間は寒く、暖房をもう少し強めて欲 しいと感じた。
- ・特になし
- ・農生棟の教室に空調が無く、夏が暑かった。
- ・クーラーをもっと多く設置して欲しい。
- ・特になし
- ・農生棟の温度調節があまりよくない。
- · 1211
- ・コラボセンターの暖房が自動で切れる時間帯が分かりにくかった。
- ・特にない
- · 冷暖房設備
- ・製氷機が少ない
- エアコンがあればいいと思う
- ・座席数がもっと欲しい

- ・夏が暑すぎる。特にテスト期間が暑く、手と腕の汗でテスト用紙がふにゃふにゃになった。
- ・夏の実験室が暑かったので、エアコンを設置してほしい。
- ・全体的に古かったり、数が不足している
- ・講義室にエアコンが欲しい。
- ・講義室に時計がほしかった。
- 特になし。
- ・講義室・研究室の冷暖房設備をきちんとして欲しい。他の研究室との差が大きい。
- ・エアコンをつけてほしい
- ・エアコンが無い部屋を無くしてほしい。
- ・全室にエアコンを取り付けてほしい。

【地域環境工学科】

- ・wifi が弱い場所があるので、平等にしてほしい。
- ・特になし
- ・屋外実験棟の充実
- 講義室が暑い
- ・空調の完備
- ・ゼミ室にあるパソコンには office を必ず入れて欲しい。

[卒業研究について]

設問 25. 卒業研究を行ったことに満足していますか。

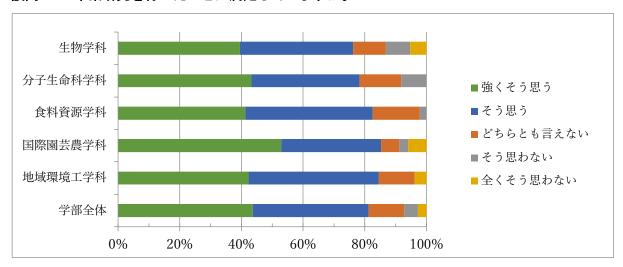


図 I - 25. 卒業研究を行ったことに対する満足度

設問 26. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

- 1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない
- 5. 全くそう思わない

【生物学科】

- 1. 希望通りの研究室で興味のある研究を行うことができたため。
- 1. 実験をして自分なりの結果を出す過程が辛いながらも楽しかった。自分だけの技術を得られた。
- 1. たくさん学べたから
- 1. 卒業研究を通して、自分の興味関心に基づいて、これまで得た知識を整理しながら気づきを得ることが出来たから。
- 1. やりたいことができたから
- 1. 研究を行うという貴重な経験を積めた為
- 1. 統計学の知識や、マイクロソフトオフィスの使い方について学べた。
- 1. 今までやってきたことを利用して、ここでしか出来ないような深い実験ができたと思います。
- 1. やり切る大切さを学んだ。
- 1. 素晴らしい指導教官と先輩達に出会えたから
- 1. 今まで注目さたことのなかった森林の生態学について様々な面から知識を深めることができたため。
- 1. 興味をもった分野の研究を自分なりにやりきることができたから。
- 1. プレゼンテーション能力の向上や研究をまとめることの練習ができたため。
- 2. 楽しかったから
- 2. テーマを持ちやり遂げる経験ができたから
- 2. そう思うから
- 2. 自分で考える力が身についた

- 2. 考える力は養われたから
- 2. 全く知らない分野を知れた
- 2. 研究と呼べる内容を取り扱えたため
- 2. 大学に行かなければ経験できないことなので
- 2. 結果もさることながら、研究に至るまでのプロセスや発表に纏めるノウハウを学べたため。
- 2. 指導先生のもと厳しくも指導していただけて成長することができた
- 2. 辛いけれど得るものも多かった
- 2. 良い経験になったから。
- 3. 研究をしていない人生も悪くないかもしれないため。
- 3. 自分のやりたいテーマができなかったが、別のテーマでもそれなりに楽しくやりがいがあった
- 4. 満足いく結果が得られなかったので、悔いが残る結果になったため。修士では今回の結果を踏まえて行動したい。
- 4. 現時点で研究が殆ど進んでいないため
- 4. 卒業研究の発表に費やすことのできる時間が短いために、どうしても伝えきれないことが出て きてしまったため。
- 5. 准教授との関係で鬱になった生徒が増えたから
- 5. 発表時間が6分間なのは短すぎる

【分子生命科学科】

- 1. よい結果を得るために毎日のように実験して試行錯誤を重ねることができた。技術と共にいろいるな知識や考え方と方法を学ぶことができた。
- 1. 望む結果が出たから
- 1. 大学に入ったからには実験はしたかった
- 1. 自分の進路を考える上で重要だったため
- 1. 色々と学ぶことができたため
- 1. 問題解決能力を得ることができたから。
- 1. 1年生の頃から研究したかった分野をできたため
- 1. やりたい研究を行い、成果を挙げられたため
- 1. これまでで一番能動的に取り組むことが出来たから。
- 1. アンケートの理由欄が多すぎて面倒、選択方式にして欲しい。
- 1. 高校までの学習とは大きく異なり、解決法が明確でない問題に取り組むことができ、成功も失敗も含めて良い経験となった
- 1. 4年間で学べたことを生かすことができたため
- 2. やらないよりまし
- 2. 自らの研究テーマに対しての知識を深めたり計画的に実験を進めたことが良い経験となった
- 2. 助けられながら、内容は不十分かもしれないが形にすることができたから。
- 2. 学びたい分野で研究できたから
- 2. 自分の力が及ばなかったが、環境として素晴らしいものを用意していただいたため。
- 2. いい研究ができた
- 2. より専門的な知識や、実践的な技術を学ぶ機会となったから。

- 2. 進んで実験できたから
- 2. 研究するということを身を持って経験し、学習することが多くあった。
- 3. 内容に不満はないが、時間的な拘束が多かった。
- 3. まだ卒業研究に取り組んでいないので評価できない
- 3. その研究を行う目的や社会的意義をあまり感じることができなかったから。
- 3. やり遂げることができなかったから
- 4. 指導教員が非常に高圧的で、コアタイム以外の深夜時間や土日に実験を行う事を強要し、拒否すると卒業させないと脅してくるなど非常に苦痛を感じる生活でした。また昨今の時節にもかかわらず、マスクを着用せずまた6畳ほどの空間で十数人でミーティングを行うなど非常識的な行動をとり不審に思います。
- 4. 教員の指導が足りない

- 1. そう思ったから。
- 1. 指導教諭にしっかり指導していただいたので。
- 1. 研究内容に取り組む中で、様々な文献を読んだり、知識を得ることができたから。
- 1. 自分で考えて研究を行える機会は今後ないため、非常に有意義な時間となったため。
- 1. とても将来に役立つ可能性があるので。
- 1. 知識や技術の不足で苦しい思いをしたが、これまでの人生経験の中でそのような苦しさを感じることが少なかったため。
- 1. 研究分野以外の身になることも学ぶことができたから。
- 1. 自分の限界を知れた。
- 1. 自分の視野を広げることができたから
- 1. 自分の力になったから。
- 1. 熱心に指導教員にご教授いただけたため。
- 1. 実験を始めてから今までの授業内容が頭に入ってきた
- 1. 専門的な知識がついた
- 1. 仮説を立て実験し、出た結果から再考し、また仮説を立てるといった一連の考え方を学ぶことができたため。
- 2. 研究を通して知識が増えたし、成長できたから。
- 2. 科学的な研究が実際にどう行われているかを知れたから。研究を通して専門的な技術や知識を深められたから。
- 2. しっかり相談してから指導してくれたためです。
- 2. 今までの集大成だから。
- 2. 今後の課題が残っているため。
- 2. 自分が興味のある研究をするというのは、おそらく大学にいる間しかできないため。自分で計画を立てて実験を行い、結果がどうであれ、それをまとめて発表することは大きな経験になった。
- 2. プレゼンテーションの能力が身についた
- 2. 進路には活かせないかもしれないが、行った意味はあったと思う。

- 2. 座学ではできない経験ができたから。
- 2. 達成感があった
- 2. ひとつのゴールや期限に向かって頑張れたことが良かった。
- 2. 自分で考え行動することの大切さを知った
- 2. 学術的要素に絡めて人間的に鍛えられた
- 3. 卒業研究で学べたこともあったが、その時間を使って講義を受けたいとも思った
- 3. 就活や実習などで思ったよりも卒業研究が進まなかったから。
- 3. コロナのせいで時間に追われてた。
- 3. 何も分からない状態から完成させたことで達成感が得られたが、あらかじめ知っておけばさらに深く追究できたと思われる事柄がとても多かったため。
- 3. もっと深く調べたいこともあったから
- 3. 知識を得ることはできたが、拘束時間が長く、プライベートな時間に支障をきたした

- 1. これからの人生での経験になった。
- 1. 青森県に関わる農業の研究が出来たから。
- 1. とても楽しかったから。
- 1. 農業の専門知識やパソコンの操作スキルだけでなく、社会人としてのマナーを学ぶことができた
- 1. 最初で最後となる論文作成にあたって批判的に論文を読んで、指導教員の指導のもとテーマの設定、考察し論理的に文章を書くということは大学生でしか経験できない貴重な経験だったし、論理的な思考能力が多少なりとも身についた。
- 1. 研究のために他の論文を読むなど、様々な知見を得ることができたから。
- 1. 内容に満足しているため。
- 1. 就職先の仕事に役立つ
- 1. 大学院に行くので、論文の書き方を充分学ぶことができた。
- 1. 先輩のご指導のもと、学生中心で試験を検討し結果をまとめられたため
- 1. 研究を行う前と比べ力がついたと思うから
- 1. 論文を書くという、研究者にならなければ大学でしかできない経験ができたから
- 1. 今後の人生のおいて中々無い経験ができたから
- 1. 主体的な学習、研究を行うことができた。
- 2. office が前よりも使えるようになったから。
- 2. 自分のためになったから。
- 2. 一つの物事について自分で考える力がついたと思うから。
- 2. 自分の知識を深めることは勿論、就職において活用したりできた為
- 2. 良かったから
- 2. 調査によって新たな発見があったから
- 2. 色々な面で成長できたと思うから
- 2. 経験値として
- 3. 学習が不十分であった為

- 3. やる事はある程度決められており、もう少し具体的に助言等して欲しかったから。
- 4. テーマをもっと練ればよかったから
- 5. 助言をもらおうとしても突き放されたから。

【地域環境工学科】

- 1. 学生最後に、学業にすごい時間をかけて取り組むことができたから。
- 1. 研究をしていくうちに、新しい発見をすることができたから。
- 1. 身につけたことが多い。
- 1. 良い出来だった。
- 1. 達成感があった
- 1. 研究に不自由なく楽しく行うことができたため
- 1. 最後までやり遂げることができたから
- 1. 上手くはできなかったけど頑張った甲斐があった。
- 2. 卒業研究を行うことでその分野の知識向上につながったから
- 2. 満足しているから
- 2. 楽しめた
- 2. 人前での発表
- 2. 大学以外ではあまり出来ない経験である
- 2. 大学生を無事終えた気分
- 2. 大きな失敗なく実験できたから
- 3. あまり身にならなかった
- 5. 精神的につらすぎて二度としたいということしか思わないから。

卒業研究を行ったことに対する満足度は、学部全体では「強くそう思う」と「そう思う」の合計が 81%であった。卒業研究を行ったことに対する満足度は、平成 $26\sim30$ 年度で $84\%\rightarrow78\%\rightarrow85\%\rightarrow84\%\rightarrow90\%\rightarrow87\%$ と本年度の結果も含めてこの 7 年間高評価である。満足した理由(設問 26)を見ると、研究活動を通して自己の成長を実感したり、大きな達成感を得たりする学生が多いことがわかる。一方で、設問 26 で回答のあった理由の 136 件中 9 件が否定的な内容だった。その理由として、「准教授との関係で鬱になった生徒が増えたから」「指導教員が非常に高圧的で、コアタイム以外の深夜時間や土日に実験を行う事を強要し、拒否すると卒業させないと脅してくるなど非常に苦痛を感じる生活でした。」「助言をもらおうとしても突き放されたから。」など指導体制への不満があげられていた。

[進路支援について]

設問 27. あなたの卒業後の進路は次のどれですか。

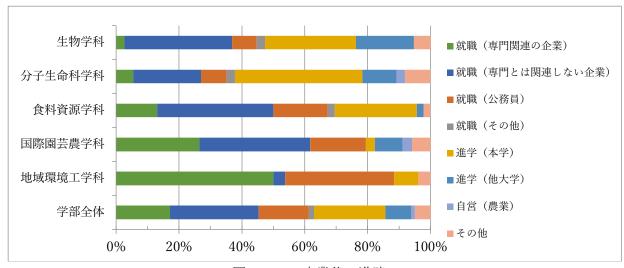


図 I - 27. 卒業後の進路

学部全体では就職した者の割合は 63%で平成 26~令和元年度(61~73%)と変わらない傾向であった。進学(本学と他大学)した者の割合は 31%であり、平成 30 年度 (26%)、令和元年度 (29%)より微増した。この値は、平成 26~27 年度 (21~22%)よりは増加しているが、平成 25 年度 (36%)より低い値である。「専門性を高めてさらに有利な就職を目指すことができる」を PR するなどして、進学者数を高める必要がある。ちなみに本年度の他大学への進学者は 15 名(進学者の 27%)であった(平成 29 年度 10 名、平成 30 年度 6 名、令和元年度 16 名)

学科単位でみると、就職した者の割合が最も高いのは地域環境工学科の88%、次いで国際園芸農学科の79%、食料資源学科の70%であった。一方、進学(本学と他大学)した者の割合が高いのは生物学科と分子生命科学科がそれぞれ47%と51%だった。ちなみに生物学科は平成29年度34%、平成30年度59%、令和元年度48%であった。また、分子生命科学科も平成29年度45%、平成30年度21%、令和元年度48%というように、進学率は年度によって大きく異なり傾向が読み取れないことがわかる。

設問 28. 本学部のカリキュラムで学んだことは、進路の決定にどのように影響しましたか。

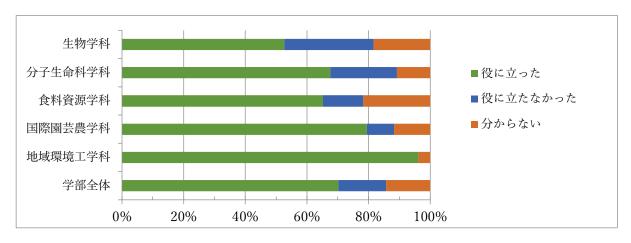


図 I - 28. カリキュラムで学んだことはどのように進路に影響したか

カリキュラムで学んだことはどのように進路に影響したかについて、学部全体では「役に立った」は70%、「役に立たなかった」は15%であった。「役に立った」は平成26~28年度には50~59%、平成29年度65%、平成30年度55%、令和元年度61%と推移してきているので、今年度の評価は例年より良かったと判断できる。学科単位でみると、「役に立った」割合が最も高いのは地域環境工学科の96%、次いで国際園芸農学科の79%であった。このことは、両学科では専門に関連する企業に就職する者の割合が高いことと関係していると思われる。両学科に続くのが昨年度「役に立った」の割合4割に達せず全学科中で最も低くかった分子生命科学科の68%であった。食料資源学科と生物学科の「役に立った」の割合はそれぞれ65%と53%だった。ちなみに生物学科は平成30年度35%、令和元年度60%であった。生物学科と分子生命科学科の「役に立った」の割合が年度によってバラつくのは進学率とも関係しているのかもしれない。

生物学科 分子生命科学科 ■強くそう思う 食料資源学科 ■そう思う ■どちらとも言えない 国際園芸農学科 ■そう思わない ■全くそう思わない 地域環境工学科 学部全体 0% 20% 40% 60% 80% 100%

設問 29. 本学および本学部の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。

図 I - 29. 本学部の進路支援の取り組みは十分か

本学、本学部の進路支援の取り組みは十分だったかに対して、学部全体では「強くそう思う」と「そう思う」の合計は55%、一方「そう思わない」と「全くそう思わない」の合計は15%で、肯定的評価が否定的評価を大きく上回った。肯定的評価の割合は平成25年度から28年度にかけて32%から4年連続で増加していたが(平成28年度は49%)、平成29年度(43%)、平成30年度(44%)は減少に転じ、昨年度49%と平成28年度と同じレベルに回復していた。今年度の肯定的評価は昨年度よりも高くなっており、近年の本学部の進路支援の取り組みをある程度評価して良いと考える(とはいえ、肯定的評価は約半数なので引き続き改善は必要。)。設問22から、進路支援について指導教員との面談と就職支援センターを挙げる学生が多い。教員の個々の取り組みとともに同センターの取り組みが経年的に評価されていると思われる。

学科単位で見ると、「強くそう思う」と「そう思う」の合計は、最も低い分子生命科学科では38%(令和元年度27%)であるのに対し、最も高い地域環境工学科では81%(令和元年度88%)に達しており、学科間で評価の差が著しい。設問22では、地域環境工学科では進路についてクラス担任と指導教員に相談する合計の割合が他学科より多いことがわかる。地域環境工学科の高い評価には、就職を志向する学生の多さに対応して、教員のきめ細かな指導体制がうまく作用していることが反映していると思われる。

[本学部の教育のあり方について]

設問 30. あなたが本学部を卒業するに当たり、大学卒業者に相応の知識や学力を身に付けたと感じていますか (大学卒業者に相応の知識・学力は自分のイメージしたもので結構です)。

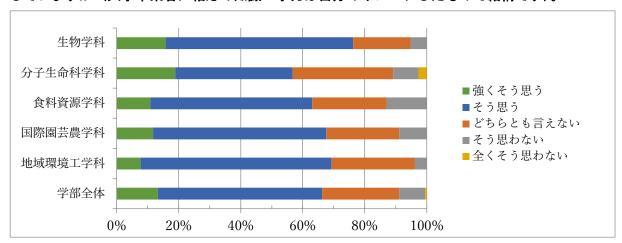


図 I - 30. 大学卒業者としての知識や学力を身に付けたか

大学卒業者としての知識や学力を身に着けたかという設問に、平成28年度から「大学卒業者に相応の知識・学力は自分のイメージしたもので結構です」という但し書きを付け加えている。その影響かどうかは明らかでないが、平成28年度には「強くそう思う」と「そう思う」の割合が52%まで増加し、平成29年度と平成30年度でさらに56%まで増加し、令和元年度は47%と減少したものの本年度は66%であった。「そう思わない」と「全くそう思わない」の合計は9%で、同程度の傾向が続いていた過去5年間(令和元年度は15%)より低くなった。

設問 31. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

- 1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない
- 5. 全くそう思わない

【生物学科】

- 1. 一通りのスキルなどを学べたから
- 1. 専門的な知識を多く得た。自発的に考え研究し課題を解決するちからを手に入れた
- 1. 実生活で役立つマナー、常識などを身につけることができたため
- 1. 入学時に思い描いた理想であるから
- 1. 大学で得た、文章の作り方、発表の伝え方は間違いなく社会人になっても役に立つと思っているため。
- 1. 学修姿勢・プレゼンテーション能力・対人能力などが向上できたため。
- 2. 主に研究室配属された後の学びが大きかったため。
- 2. 他の人とは違うような知識を付けられたように思うし、十分な時間があったからこそ一般教養の勉強も出来たから。
- 2. 自主的に活動したことで、高校まででは学ぶことが出来なかった事が様々あり、とても勉強になったため。
- 2. 今までわからなかったことがわかるようになったから。
- 2. よく学んだ

- 2. 感覚
- 2. そう思うから
- 2. 生物学の話に関して困ることが無く、議論が可能になったため
- 2. そう思うから
- 2. あまり専門的なことを教えてもらえなかった
- 2. 社会で働くために必要な基礎を学べた。
- 2. よく考えるようになったから
- 2. 高校の授業で学んだ内容をさらに深く学ぶことができました。
- 2. 知識を深められたから。
- 2. 特別な不足感はないので
- 2. この4年間である程度自分でもうまく立ち回ることができたと思うため
- 2. 大学に入る前に比べて、物の考え方に変化があったと思うから
- 2. 少なくとも、高校卒業時点では至れなかった細部へ思考を張り巡らすことができるようになったと感じるため。
- 2. 教養教育科目と教育けいの科目を受講したことにより次世代を担う世代としての自覚を持てたから。
- 2. 教養科目では社会に出るにあたり最低限の知識を身につけることができたと感じたため。
- 2. 大卒として社会に出るための常識や最低限の知識を得られたと思うから。
- 2. 大学卒業者に相応の知識を大学で学ぶことができたから。
- 3. 得た知識や技術を今後に生かせるか不安だから
- 3. 専門の知識のみに偏ってしまう
- 3. 相応にあまりにも差のある大学であると感じたため
- 4. まだまだ身についていないものも多いため
- 4. 分野に興味がなくなったので勉強しなくなった

【分子生命科学科】

- 1. 学部レベルの基礎的な知識は身につける事ができたため
- 1. 自身の力で問題を解決することができる様な能力を鍛えられたから。
- 1. アンケートの理由欄が多すぎて面倒、選択方式にして欲しい。
- 2. 受講可能な講義の大部分を履修したため生命科学分野の基礎的知識と技術を身に付けることができたと思う。
- 2. 知識は増えた
- 2. 専門的な知識はもちろん、大学卒業者としての常識やマナーを身につけることが出来た
- 2. 専門知識はまだまだだが、人間的に成長はできたと思う。
- 2. 学業に力を入れ、満足のいく自学自習ができたから。
- 2. 知識はついたと思う。
- 2. 専門の知識を活かせる職に就けるため
- 3. 身についていなくても卒業出来てしまうから
- 3. 相応の実力を身につけた自信がない
- 3. そう思ったため。

- 3. 一定の知識がついたと感じる一方で、専門的な知識が十分かと考えるとまだ足りないと思うから。
- 3. もっと勉強するべきだったと感じた
- 3. 卒業者に相応の知識、学力の目安が不明
- 4. 卒業研究を行ないながらもっと身につけるべき知識があり、自分の学習が足りていないと感じたため。
- 4. 実になるほど学業に励まなかったから
- 4. まだまだ未熟と考えているから
- 5. そのような指導はない

- 1. 本学部で学ぶことができる知識をたくさん身につけたから。
- 1. 授業のみならず、coc 推進室など多くの活動に参加できたため。
- 2. 高校を卒業した時よりも、知識が増えたし考える力もついたから。
- 2. そう思ったから。
- 2. 教養科目や在学中のアルバイトなどで常識を知る機会を得たから
- 2. 主に卒業研究を通して所属した研究室の分野については身につけられたから。
- 2. 気になる事を学ぶ事が出来たから役に立った。
- 2. 最低限の専門分野に関する知識を得ることができたと思っているため。
- 2. 授業や実験で学力を身につけたから。
- 2. 意欲的に学業に励むことができたから。
- 2. 入学前よりは進歩があると感じられるため
- 2. 大学でしか得られなかった専門知識を身につけられたと思う。
- 2. 卒論を進めるにあたり、たくさんの情報を得たり実験を行ったりしたから。
- 2. 大学においても勉学に励んだため
- 2. 入学前では知ることのないようなことも知識として得たから
- 2. 4年間という長い期間を使って学習に取り込むことが出来たため
- 2. 高校卒業時点には知ろうとも思わなかった知識を得られたから
- 2. 自分の専攻した分野を十分学ぶことができた
- 2. 高校卒業時に予想していたような学業が出来たから。
- 2. 専門知識を学べた
- 2. 想像より良い成績だったから
- 3. すべて忘れてしまっているから
- 3. 他の人に比べ自分の知識や学力が劣っているかもしれないが学びたかったものの知識は身につけたと思うから。
- 3. アウトプットの機会を自分で作らなかったため、何ができて何ができないかがわからないから
- 3. 興味を持ち、しっかりと勉強した科目もあったが、講義を聞くだけで終わらせてしまったという科目もあり、まだ勉強不足であるため。
- 3. まだ未熟だと思った。
- 3. 興味あることにしか真面目に取り組むことができなかった

- 3. そもそも大学卒業者に相応の知識や学力の基準がわからないため。
- 4. 卒業研究に本気で取り組むタイミングが遅かったため。
- 4. 現時点ではまだ知識が足りないと感じている。
- 4. 学びの範囲が広すぎて知識を深めるのことが出来なかった。
- 4. あまり役に立たない気がした
- 4. 基礎的な知識しか無く、大学卒業者として社会で知識を活かすには未熟だと感じるため。

- 1. 農業に関して当事者意識をもって考えるようになったから。
- 1. 他では得られない様々な知識を身につけられたと感じたから。
- 1. 何も分からなかった分野だったが、大体のことは、理解できるようになった。
- 2. 入学前より、農学の知識が増えたから。
- 2. 他人から吸収することが出来る場面が多かったので、学力はもちろん知識が身についたと思う。
- 2. 文献や調査によって農業を学ぶことができたと思う
- 2. ゼミ活動や卒論作成のための活動による影響が大きかった。
- 2. 将来のことを踏まえた授業を行ってくれたから。
- 2. 専門分野の知識を多く学べたから。
- 2. 大学を通して様々な経験をできたと思う為
- 2. 知識が増えたから。
- 2. 社会人として働く際に役立ちそうだから。
- 2. もし、否定した場合にはこれまでやってきた苦しいことが全否定されるから
- 2. 大卒程度の試験に合格しているから
- 2. 様々なことを経験できたから
- 3. 大学卒業者のイメージがわからないため。
- 3. 分からないから
- 3. 知識の定着がやや不十分であると感じる為
- 3. よくわからない
- 3. 独創性や発想力などの知識や学力では測れないものもあるため
- 3. 専門分野について、もっと勉強したかったと思う。
- 4. 勉強不足だから
- 4. 専門的なことをしっかりと把握しきれていないから
- 4. まだ足りないと思うから

【地域環境工学科】

- 1. 学んだことを進路に活かせそうだから。
- 2. 専門的な学びが多かったから。
- 2. 就職できたから
- 2. 就職できたから
- 2. 専門をしっかりと学んだ

- 2. 関連の知識をつけたから
- 2. 専門知識が身についた。
- 2. 様々な人と交流を持てた
- 2. 卒業に必要な単位を習得できたため
- 2. 公務員の専門職に合格できたため。
- 3. 相応の知識と言われるとわからないから
- 3. 忘れていることが多いため
- 3. 本学より偏差値的にレベルの高い大学と比較すると不十分な印象
- 3. 1.2年で受けた講義の知識を忘れているため
- 3. どちらでもない
- 4. 忘れてしまったところもあるから

設問 32. 本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点を、次の項目の中から一つ を選んで下さい。

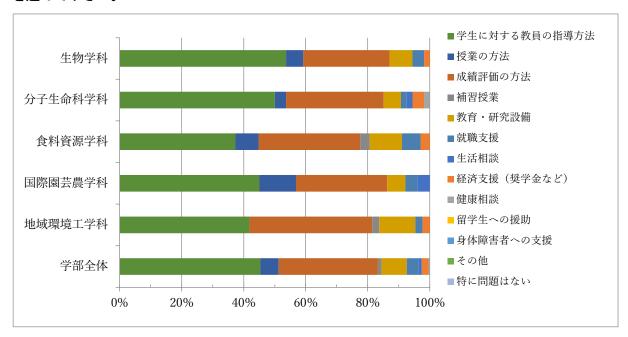


図 I - 17. 本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべき点

本設問のアンケート結果は例年と大きく異なる事態が発生した。平成26~令和元年度は「特に問題はない」が選択肢の中では最多で33~41%を占めてきたにもかかわらず、今年度は「特に問題はない」と回答した学生はゼロだった。これはアンケートの実施方法が今年度からFormsによるオンライン回答になったためなのか、それとも実際に何らかの変化があった結果なのか、次年度以降の結果を注視していくしかない。

昨年度は、早急に改善すべき点として選択された上位 5 項目は、学部全体でみると「教育・研究設備」(平成 30 年度 16%、令和元年度 22%)、「学生に対する教員の指導方法」(平成 30 年度 12%、令和元年度 8%)、「就職支援」(平成 30 年度 10%、令和元年度 6%)、「経済支援(奨学金など)」(平成 30 年度 7%、令和元年度 6%)であった。過去 5 年間をさかのぼっても、挙げられる上位 5 項目についてはそれほど変化がなかった。ところが、今年度は「学生に対する教員の指導

方法」が 45%、「成績評価の方法」が 32%でこの 2 項目で改善すべき点が 7 割を超える結果となった。例年 1 位の項目である「教育・研究設備」は第 3 位 (8%)、次いで「授業方法」が第 4 位 (6%)、「就職支援」が第 5 位 (4%) だった。

学科別にみても「学生に対する教員の指導方法」と「成績評価の方法」の割合にそれほど違いはなかったが、コメント数にばらつきがあり、特に「学生に対する教員の指導方法」については、生物学科 13 件、分子生命科学科 6 件、食料資源学科 0 件、国際園芸農学科 2 件、地域環境工学科 0 件だった。記述欄では厳しい意見が見られるので注意を要する。特に、研究室による教育の質の差、教員による学生のえこひいき、指導の放棄と受け止められるような発言や態度を指摘する声が目立つので、引き続き改善の努力が必要である。例年、アカデミックハラスメントの訴えがあるが、今年度は例年より多く、アカデミックハラスメント(と思われる)があることを訴えるものが 12 件含まれており、1 件は教員が名指しになっていた。

改善点として 2 位の項目であった「成績評価の方法」に関するコメントはほとんどなく学生が何に不満であるのか大多数の意見として提示することが難しかった。「教育・研究設備」に関する具体的な要望としては、例年通り、冷暖房設備、研究費用や研究室の設備やスペース、研究期間の短さに対するものがあった。「経済支援(奨学金など)」については、経済的に厳しい状況にある訴えが数件あり、奨学金関連や授業料免除に関する要望が寄せられた。「就職支援」に対しては、本学部における就職支援情報の少なさ・不十分さに対する要望が挙げられていた。コメントでは留学生に対する配慮を求めるものが数件あった。

設問 33. 上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい。

- 1. 学生に対する教員の指導方法 2. 授業の方法 3. 成績評価の方法 4. 補習授業
- 5. 教育・研究設備 6. 就職支援 7. 生活相談 8. 経済支援(奨学金など)
- 9. 健康相談 10. 留学生への援助 11. 身体障害者への支援 12. その他()
- 13. 特に問題は無い

【生物学科】

- 1. 各教員のやり方を尊重するのはいいと思うが、指導・教育方法に関しては差が大きすぎると学生は対応しきれないことがあると思うから
- 1. 英語の文法などをわかっていない先生に外書購読の授業を持たせるべきだはない。
- 1. もう少し態度を改めて欲しい
- 1. できない学生にも優しくして欲しい
- 1. 学生のモチベーションや精神衛生上問題が起きているため
- 1. 教員の研究に対する学生への理想に、学生の研究できる時間やスキルなどが追い付いていないように感じることがある。
- 1. 発達障害者への理解が不十分
- 1. 生徒のメンタルヘルス。教授が研究室の生徒の人生を背負っているという自覚
- 1. 精神的な苦痛を被った学生がいたため
- 1. 先生とあまり会わない
- 1. 具体的な指導が欲しい
- 1. 指導する気がないような教員が見られたから。

- 1. 教員といっても教員免許を持っていない、かつ社会経験がない、その上で学生に対して権力を もってしまうので、接し方が上手くない。その他にも要因はあるでしょうが、研究室配属後、 友人知人のうち3人が休学・一時不登校になりました。なんとかしてください。…アカハラと 言うつもりはないですが。
- 2. 教員アンケートの結果が反映されていない
- 2. 専門の選択科目で何を学ぶべきか一向に授業があった。
- 5. 講義室の冷暖房設備が不十分。
- 5. 教室の温度管理、オンライン授業への早急な対応
- 5. 空調設備を整えて欲しいです。
- 5. 研究費支援や共用分析機器の利用支援をもっと行ってほしい。
- 6. キャリア支援は必要だと感じる人が各自で取得するべきであり、学科の講義で忙しい時期に取得しろと言われても時間が割かれてとても大変だった。
- 8. 生活費が苦しいため
- 12. (その他:成績表の配布方法)手渡しでの成績表配布から移行できていないのは正直なところ、成績表配布に際して弘前にいなければいけない拘束力が働くため窮屈に感じる。また、配布時期の遅さも気になるところ。
- 13. そう思うから
- 13. なし

【分子生命学科】

- 1. ハラスメントをなくすべき
- 1. 所属する学生が全く守られていません。アカハラがあっても告発出来る状況ではありません。
- 1. アカハラの話をよく聞く
- 1. 担当教員と合わずに、精神的に苦しむ人が多いから。
- 1. 一部の教員がやや不満のある指導をしていた
- 1. ○○先生のことを何とかしてください
- 2. 授業時間外の課題が多い授業が複数あると私生活に支障が出てしまう
- 2. スライドを見せるばかりで生徒の理解が追いついない授業があるので、その授業で重要な点、 最低限理解しなければいけないことを上げた上で授業を進めてほしい
- 5. 研究室所属後の控え室(食事、休憩等)の充実
- 10. 初めてここに来る留学生に対しては、生活方面学業方面どちらも慣れていないと思うので、 正規の留学生にチューターも付けると助かると思います。
- 13. 特に無し

- 2. もっと分野に関する世の中の問題に対しての授業内容や課題内容を増やすということ。
- 2. 受講したい専門科目があっても、必修の教養科目の関係で取れないことがあり残念だった。
- 3. 一度の試験のみで評価するのは酷なので複数に分けた評価方法を取ってほしい
- 4. 日程決めが遅く感じた
- 5. クーラーの設置

- 5. 講義室が寒い。
- 5. 冬季の暖房(講義室・自習室)
- 5. 夏は部屋が暑すぎて授業に集中できなかったので、大変だった。
- 6. キャリアセンターのやっていることを教えてほしいです。
- 6. 相談した時期もあるのかもしれないが、相談に対して満足する回答が得られなかったから。
- 6. 特にない
- 10. 留学生が苦労しているのを見ていたから。
- 10. 留学生への奨学金を増やせばいいと思います。
- 12. (その他:入試の時点で制度を変えるべき) 試験科目の関係で、国際園芸を第二希望として入 試に取り組めるが、どちらかというと、食料資源学科は分子生命科学科と近い領域だと思って います。よく、『生物学科、分子』『食料資源、国際園芸』というような分け方をいろんな場面 でされますが、そこから見直すべきだとずっと思っていました。
- 12. (その他:所属研究室ごとの経済格差)研究費の内、用紙・インク代など全研究室で共通するような出費は印刷代として固定してほしい。学生が出費する場合があるため。
- 13. 特になし
- 13. ない
- 13. 特にない

- 1. 生徒一人ひとりに向き合うことが大切
- 1. 研究室配属後に担当教授との関係性が上手くいかない話をごく稀に耳にすることがありました。そうなった後の融通や、配属前の学生同士や教授との交流の機会が多ければ良いかと思います。
- 2. 配布されたプリントをただ読むだけなどの授業は意味のないように感じる
- 5. クーラー
- 5. 季節関係なく集中できる環境にしてほしい。
- 5. 教室のいくつかは冷房が効かないため夏期間が身体的に苦痛であるため。
- 5. 4年間大学に通って、冷暖房などの設備が不十分で講義に集中出来ないことが多々あったから。
- 6. 情報が回って来ないため全員に回るようにして欲しい。
- 10. 留学への充分な資金の援助
- 12. (その他:設備) エアコンがないと暑すぎて授業に集中できない。
- 13. 特にないです

【地域環境工学科】

- 4. 卒業研究のテーマに担当教員の専門分野外のテーマを決めるのをやめてほしい。自分も担当教員もわからないという状況になって大変苦労した。
- 5. 実験室のいらない道具を片付けたいけど、ゴミ庫に入りきらない。
- 5. 自身が所属するゼミの実験棟が不便である
- 5. 設備が不十分
- 5. 水利実験棟が古く、水が汚くて実験水を農生棟からタンクで運ばなければならなかった。水利

の実験棟ならせめて水はきれいであって欲しい。

- 6. 支援
- 13. 特になし
- 13. 特になし。

設問 34. 総合的に判断して、本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。

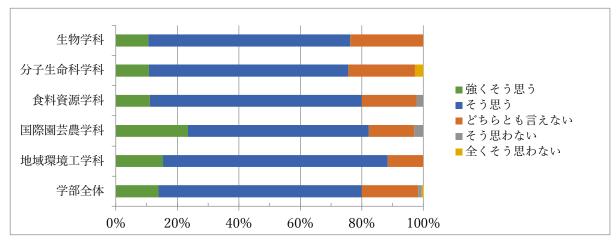


図 I - 34. 本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足か

本学部・学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますかという設問に対して、学部全体では「強くそう思う」と「そう思う」の割合が80%であり、過去3年間(平成29年度76%、平成30年度76%、令和元年度74%)より若干高かった。「そう思わない」と「全くそう思わない」は2%で、こちらは過去3年間(平成29年度5%、平成30年度6%、令和元年度6%)より低くなった。学科別にみると、昨年度は肯定的評価の割合が最も高いのは地域環境工学科で(92%)、その他の学科では60%(分子生命科学科)~79%(生物学科)とばらつきが大きかったが、今年度は8割前後の範囲で差がそれほどなかった。

設問 35. 上記のように回答した理由を記入して下さい。

1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない 5. 全くそう思わない

【生物学科】

- 1. 教諭はともかく学校全体としては手厚いサポートがあったと感じたため
- 1. 今いる研究室が素晴らしいから
- 1. 学生一人一人が自分のやりたい研究を十分に行えるような環境や指導を丁寧に行われていると感じたため。
- 1. 方法は違えど、研究に取り組む姿勢が感じられるため
- 2. 教養の授業をしている先生も含め、面白い話をしてくれる先生が多かった。
- 2. 先生の取り組みが手厚かったから
- 2. キャリアの授業が要らなかったと強く思うが、そのほかは概ね満足がいっている。ただし、コア科目にある「食料流通」や「企業」に関する講義があり、生物学科からすると必要な人が取れば良いのでは?と疑問が浮かぶ内容であった。これに対し、理学に対するコア科目が無かったことに対して疑問が残る。

- 2. 大まかに満足している
- 2. 部分的に満足しないことがあっても、満足することもあるから
- 2. 講義では基礎から応用まで幅広く知識を身につけることができ、教授は研究熱心だと感じるから。
- 2. 特になし
- 2. 不満がないから
- 2. そう思うから
- 2. そう思うから
- 2. 前向きにやってきた
- 2. 研究者を育成する機関としては優秀な教育を施していると感じる。
- 2. 大卒資格は得られる
- 2. 全体的に見て指導意欲がある学生がいるから
- 2. 先生方が自分の専門分野に対して、とても熱心に指導してくれました。
- 2. 意欲の高い学生の学びを深める場が整っていると考えるため
- 2. 深い知識を持っているから。
- 2. 生物学について興味が深まったから
- 2. 学びに関しては十分に大学進学の意義を感じるものだった。
- 2. 恵まれた指導先生に出会えるだけの先生の人数がいたため
- 2. 優秀な大学院生を輩出しているから。
- 2. 指導教員によって差があるとは思うが、研究活動を活発に行えたため。
- 2. 学びたいことが学べたから。
- 3. 共用機材のトラブル (特に GRC の miliQ) が多かった。
- 3. 他の学部を知らない
- 3. 大きな不満は感じなかった
- 3. 指導教員によるフォローが厚く、研究にうまく取り組むことができた一方で、研究するにあたって必要な設備(研究スペースなど)が不足しているようにも感じたため。

【分子生命科学科】

- 1. 高等学校まででは学ぶことができない様々なことを学ぶことができたから。
- 1. アンケートの理由欄が多すぎて面倒、選択方式にして欲しい。
- 2. カリキュラムと理念に沿った良い教育と研究活動をしていると思った。
- 2. 特になし
- 2. それなり
- 2. 4年間の学生生活で得難い経験ができた
- 2. 自学自習を基本とした場合に、わからなかったときなどには質問に行ったりすることができたから。
- 2. 特に不満がないため
- 2. 熱心に指導していただけたため
- 2. そう思ったため。
- 2. 自分に合った大学だと思う
- 2. あまり困ったことがなかったから

- 2. 満足な4年間を過ごすことが出来た。
- 2. 来るもの拒まず
- 3. 良かったのも悪かったのもある
- 3. 自分の研究室しか知らないので。
- 3. 人それぞれすぎるから。
- 3. 自身は満足しているが、人によっては精神的な不調を訴える人も存在した。
- 5. 守られるべき生徒が全く守られる制度にありません。

- 1. そう思ったから。
- 1. 地域についての研究や農林水産業に対しての研究や教育活動を行っており、青森県に貢献していると考えているため。
- 1. 非常に満足したため。
- 2. 研究はしっかりできたから。
- 2. 先生が親切に指導して下さったから
- 2. 要望通りに進められたためです。
- 2. 学びたかったものを学べたと思うから。
- 2. 先生が支援してくれる
- 2. 個人の取組み次第だが、十分な力を身に着けられるだけのカリキュラムだったと思う。
- 2. 学業、学校生活に十分満足できたから。
- 2. 他の研究室についてはわからないが、所属研究室では定期的なゼミもあり、発表練習や議論の 場もあったため、満足している。
- 2. 基礎だけでなくさらに踏み込んだ専門的な事まで教育してくれた
- 2. 地域に根差す大学として、実践的な学習が出来た。
- 2. 自分が満足できたから。
- 2. 私の所属した研究室では指導していただきながら熱心に研究に取り組めたため。
- 2. 学生への指導が丁寧であり、学科ごとの特色に合っていたと思うから。
- 2. 4年間を通して満足したから
- 2. 学びたいことが学べたため
- 2. 特に不満は思いつかないから
- 2. 地元に貢献しようとする意向が伺える
- 2. 不満がないから
- 2. 分かりやすかった
- 2. 熱意が伝わったから
- 3. カリキュラムや単位数などのシステム説明がわかりにくい。
- 3. 学科内の分野の差が講義や研究発表に影響していると感じる。
- 3. 他を知らないからこれが満足になるか分からない。
- 3. いいとこも悪いところもある

- 1. とても満足しています。ありがとうございました
- 1. どの先生方も非常に努力しており、自分も見習おうと思ったから
- 1. 自分の進みたい道を叶えるための努力ができる環境であったから
- 1. 卒業論文が充実していた。
- 2. 弘前大学で良かったと、思えるので。
- 2. 自分が興味あったことを満遍なく学べたと思うから。
- 2. 非常に熱心であるため。
- 2. 充実している。
- 2. 特に困ったことがなかったから。
- 2. ゼミの所属外の先生からもコミュニケーションをとれる機会が多かったから
- 2. 卒業できるから。
- 2. 良かったから
- 2. 講義に満足できた為
- 2. 英語教育に力を入れていることがわかるから
- 2. 専門性の高い知識はある程度得られたから
- 3. 可もなく不可もなくと感じたから
- 3. 卒業するだけのためであっても自分が受け持つ生徒への向き合い方はきちんとした方がいいと思う。
- 3. 全体的に、新しく何かを発見しようという空気感がない
- 3. 良い点も悪い点も半々だから。

【地域環境工学科】

- 1. 熱心だから。
- 1. よかった。
- 2. 満足しているから
- 2. 専門を学べて満足している
- 2. 熱心だから
- 2. 専門知識を身に付けさせてくれようという雰囲気を感じたから
- 2. 無事に卒業できそうだから
- 2. 農業土木・山間地環境などについて深く学べたため
- 2. 不満なところはなかったから
- 2. そこそこ研究設備があるから
- 2. 特になし
- 2. 講義の内容には満足しているから。
- 3. よくわからないから
- 3. そこそこ

設問 36. 食料資源学科と国際園芸農学科の学生のみお答えください。皆さんの受けたカリキュラムは「食」(主に食料資源学科の皆さん)または「国際化」(主に国際園芸農学科の皆さん)の知識を身につける上で役立ったと感じていますか。

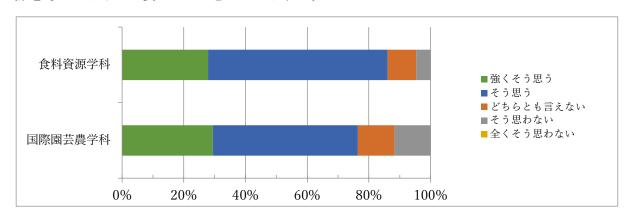


図 I - 36. カリキュラムは「食」または「国際化」の知識を身につける上で役立ったか

食料資源学科では、「強くそう思う」と「そう思う」と答えた学生の割合が86%で昨年度(令和元年度75%)より高くなった。一方、「そう思わない」と答えた学生は14%であった昨年度(令和元年度10%)とほぼ同程度であった(この2年で全くそう思わない」と答えた学生はいなかった)。ほとんどの学生は「食」に関するカリキュラムに満足しており、「食品や栄養について農学部系で専門的に学べるので選べる職種が広がったと思うから。」や「あらゆる方向から「食」に対するアプローチしており、理解が深まったと思うため。」などと肯定的意見が多くあった。

国際園芸農学科では、「強くそう思う」と「そう思う」と答えた学生の割合が76%で昨年度(令和元年度81%)より低くなった。一方、「そう思わない」と「全くそう思わない」と答えた学生は14%であった(令和元年度は「そう思わない」と答えた学生はおらず、否定的意見としては「全くそう思わない」と答えた学生が1名いたのみ)。設問19(もっとも印象に残った科目)で述べたように、「「海外研修」を挙げたものが、国際園芸農学科では、令和元年度では36件中19件とコメントの半数に相当したのに対して、今年度は16件中2件であった。今年度、肯定的評価が減少し、否定的評価が増加したことと関連があるのかもしれない。具体的な意見としては、「食の流通・経済学の授業や、海外実習などを経験し、広い視野で食の流通について考え、国際的な知識を養えたと思う為」や「海外研修や英語の授業により、海外へ視野を広げることができるようになりました。」などと英語講義の充実さや必修科目である海外研修入門が高く評価されていた。

設問 37. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない 5. 全くそう思わない

- 1. そう思ったから。
- 1. 食品や栄養について農学部系で専門的に学べるので選べる職種が広がったと思うから。
- 1. 食に関する知識は本大学で最も学ぶことができている自信があるため。
- 1. 栄養学の観点から専門的な研究ができたから。
- 1. 食品衛生関連の任用資格を得られたため

- 1. 青森県の食について興味があったのですが、たくさん学べた
- 1. 食に関する幅広い知識を身につけることが出来たため
- 1. あらゆる方向から「食」に対するアプローチしており、理解が深まったと思うため。
- 2. 食についてたくさんのことを学べたから。
- 2. 食についての講義はかなり豊富だったから。
- 2. 食品に関する講義が多かったため
- 2. 食料資源学科だからこそ食業に関係する知識を身につけました。
- 2. 食材や栄養機能、食に取り巻く環境などに関しての内容を幅広く学ぶことができたから。
- 2. 食についての授業、実験、資格があったから。
- 2. 食に関わる分野というのは幅広く、講義をうけることで、その中から興味を持てる専門を見つけることができたため。
- 2. 食に対する機能や生産環境等を多方面から学ぶことができたため
- 2. 栄養について学ぶ機会は多かったと思う。
- 2. 食の機能性を学んだから
- 2. 食品についての授業もあり、学びたいことについて学べたから。
- 2. 「食」は身近にあるものであるため
- 2. 食品だけでなく管理方法なども学べたから
- 2. そのような授業内容だったから
- 2. 食に関して幅広く深く学べた
- 2. 日常でよく使える
- 2. 食糧生産、栄養学的に面白い内容だったから
- 3. 全てが食にかかわる内容ではなかったため。
- 3. 食とそれ以外の要素が半々ぐらいだったため。
- 4. 生産に関わる問題点のような、日常生活ではあまり触れる機会の少ない事柄にも触れられたため、食に対する視野を広げることができた。
- 4. 昆虫は食ですか?

- 1. 海外研修や英語の授業により、海外へ視野を広げることができるようになりました。
- 1. 海外で学ぶ機会をもらえたため
- 1. 海外研修を通じて、グローバルな視点でも物事を考えられるようになったから。
- 1. 食の流通・経済学の授業や、海外実習などを経験し、広い視野で食の流通について考え、国際 的な知識を養えたと思う為
- 1. 国際的視点を持つきっかけになったから。
- 1. 役に立ったから
- 1. 国際関係の講義や海外研修などがあったから
- 1. 海外研修で異文化に触れることができたから
- 1. 海外研修を通して海外へのイメージや今後の日本農業の展望などを考えることができた
- 2. 海外研修に実際に行ったため。
- 2. 海外研修で知見が広がったため。

- 2. 授業や海外実習でそう感じたから
- 2. 農場実習とゼミ活動での経験が大きかった。
- 2. 青森に根ざした食品をたくさん取り扱っていたから。
- 2. Integrated という英語科目の必修があったから
- 2. 国際分野に関わる講義が多く、海外研修では実際に現地の農業を視察できたから。
- 2. 特定の地域だけではなく、日本から世界と幅広い視野を持つことで様々な観点からの意見や問題について学ぶことが出来たから。
- 2. 海外研修を通じて、海外の食ビジネスを肌で感じることができ、就活でも役にたったから
- 2. 実際に海外へ行き肌で感じられる機会を設けていただいたから
- 3. 食は学べたが国際的な面は実感していないから
- 3. 国際化についてやや不十分であると思った為
- 3. 国際化をしっかりと学ぶには、4年は短いと思う。
- 4. 「国際化」を学べたのは海外研修のみだった。
- 4. 卒業を目前に控えて、英語の知識はほとんど残っていないから

Ⅱ. 研究科修了時学生対象教育評価アンケート

1. アンケート調査内容

調査目的:農学生命科学研究科の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため、2年間、本研究科で教育を受け今まさに修了しようとしている学生を対象に、研究科における教育について総合的な評価を得ることを目的とした。

調査方法:電子メールで学生に本アンケートについて周知し、Forms で回答を依頼した。なお、アンケートは個人を特定できない設定にして行われた。

調查対象: 令和3年3月研究科修了予定者53名

調査期間:令和3年2月1日~3月23日

有効回答者数:47名(回答率89%)

調査項目:設問は以下のとおりである。(ただし、下記の[]の項目名は、回答結果の分析に あたってグループ化のために設けたものである。)

[研究科・コースの教育目標等の認識]

設問 1. あなたの所属コースをお答えください。

設問 2. 本研究科の教育目的および教育目標を知っていますか。

設問 3. あなたが所属するコースについて、概要を知っていますか。

設問 4. あなたが所属するコースの入学者受入れ方針(アドミッションポリシー)を知っていますか。

設問 5. あなたが所属するコースのカリキュラムはその目標に合致していると思いますか。

設問 6. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

[コースの教育について]

設問 7. シラバスは受講する科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。

設問 8. あなたが所属するコースで受けた教育(講義・演習など)について満足していますか (修士研究については設問 25 で別に聞きます)。

設問 9. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 10. 本研究科では年度初めに指導教員がガイダンスを行っていますが、その内容は適切で あったと思いますか。

[教員の指導について]

設問 11. 所属するコースの教員の学生への指導や対応に満足していますか。

設問 12. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

設問 13. 大学院で履修した科目の成績評価についてお尋ねします。成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはありますか。

設問 14. 疑問や異議があったとき、あなたは実際にどこに相談し、その対応に満足しましたか。具体的に記入して下さい。

「学生の主体的学習について]

設問 15. 講義の受講に当たり、 受講期間中にあなたは講義室での受講時間の何倍程度の時間 を、 講義室外での学習(予習や復習など)に当てましたか。大学設置基準にでは、 2 単位の科目の場合、90時間の学習が必要になりますが、講義室では30時間(90分を2時間として扱い×15回=30時間)の学習時間しかありません。そこで、講義室外での学習が必要になります(講義室での2倍の時間)。学習時間にはインターネットを利用した情報収集、講義でのプレゼン準備やレポートの作成、研究室内でのプレゼン準備などに要した時間も含めても構いません。ある1科目を想定して回答しても構いません。

- 設問 16. 学術特別研究(学術研究プログラム)、 実践特別研究(実践研究プログラム)あるいは課題研究(社会人入学者)に要した時間は1日平均どの程度ですか。実験に要した時間に加え、 研究に必要な文献調査や文献講読に要した時間も含めて計算して下さい。
- 設問 17. 大学院教育では、学生自身の主体的、意欲的な学習が要求されます。あなたは講義についてどのような姿勢で取り組みましたか。
- 設問 18. 大学院在学中のカリキュラムで、もっとも印象に残った科目があれば、その科目名と 理由を記入して下さい。

[学生への教育支援、施設・設備について]

本研究科や本学では皆さんに助言したり、皆さんからの相談・苦情を受け付けたり、皆さんのニーズを把握するために、以下のようなルートを用意しています。在学中あなたは次の(1)~(3)の項目について主にどれを利用しましたか(複数回答可)。

- 1. 学生センター
- 2. 指導教員と面談
- 3. 指導教員以外の教員と面談

- 4. 学科長と面談
- 5. 学生総合相談室
- 6. 保健管理センター

- 8. 就職支援センター
- 9. 学部長直言箱
- 10. 学長直言箱

- 11. その他
- 12. 利用したことはない

設問 19. (1) 学業

設問 20. (2) 学生生活

設問 21. (3) 進路

設問 22. 上記(1)~(3)の項目について、それぞれの対応に関して改善すべき点があれば以下に 簡潔に記入して下さい。

設問 23. 本学部の以下の施設について、どのように感じていますか。

評 価 施 設	1. 充分満足	2. ほぼ満足	3. どちらと も言えない	4. やや不充分	5. かなり不 充分
1. 講義室					
2. 実験・実習室					
3. 情報処理演習室					
4. 蔵書室(4 階)					
5. 学生自習室、学生控室(2階)					
6. 修士研究を行った 研究室					

設問 24. 各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

[修士研究について]

- 設問 25. 修士研究について満足していますか。
- 設問 26. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。
- 設問 27. 研究科修了後のあなたの進路は次のうちのどれですか。
- 設問 28. 本研究科のカリキュラムで学んだことは、進路の決定にどのように影響しましたか。
- 設問 29. 本学および本研究科の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。

[本研究科の教育のあり方について]

- 設問 30. あなたが本研究科を修了するに当たり、大学院修了者に相応の知識および学力を身に 付けたと感じていますか。
- 設問 31. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。
- 設問 32. 本研究科の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点を、次の項目の中から 一つを選んで下さい。
- 設問 33. 上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい。
- 設問 34. 本研究科で学生が期待する教育を受けるとともに充実した学生生活を送るために、希望する点や、大学または学部が改善すべき点があれば具体的に記入して下さい。
- 設問 35. 総合的に判断して本研究科・コースの教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。
- 設問36. 上記のように回答した理由を記入して下さい。

2. 調査結果

設問 1. あなたの所属コースをお答え下さい。

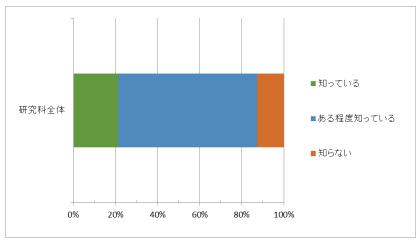
表Ⅱ-1. コース別アンケート回答率

コース	対象者人数 (人)	回答者数(人)	回答率(%)
生物学コース	21	16	76
分子生命科学コース	12	15	125
生物資源学コース	10	9	90
園芸農学コース	8	6	75
地域環境工学コース	2	1	50
合 計	53	47	89

研究科全体の回答率は89%で、令和元年度(88%)とほぼ同等であった。分子生命科学コースの回収率が100%を超えており、別のコースの学生が誤って回答したものと考えられる.なお、回答者数が少ないため、以降の集計は研究科全体で行った。

[研究科・コースの教育目標等の認識について]

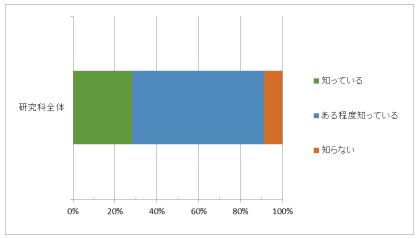
設問 2. 本研究科の教育目的および教育目標を知っていますか。



図Ⅱ-2. 本研究科の教育目的等の認識

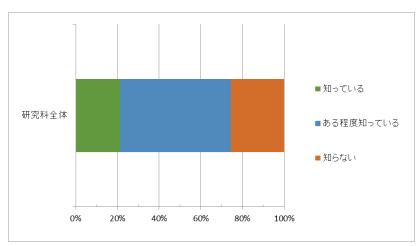
「知っている」および「ある程度知っている」が87%と、平成30年度(75%)、令和元年度(76%)と比べて上昇した。引き続き、教育目的および教育目標の周知を図る努力を継続する必要がある。

設問 3. あなたが所属するコースについて、コースの概要を知っていますか。



図Ⅱ-3(1). 所属コースの概要の認識

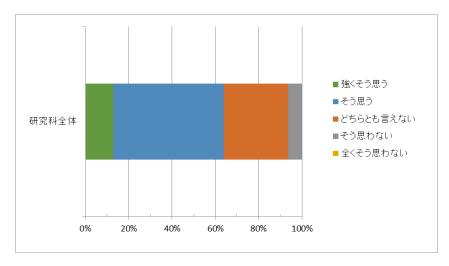
設問 4. あなたが所属するコースの入学者受入れ方針(アドミッションポリシー)を知っていますか。



図Ⅱ-3(2). コースの入学者受け入れ方針の認識

概要については、「知っている」および「ある程度知っている」が89%で、平成30年度は69%、令和元年度は86%であった。また、入学者受け入れ方針については74%となり、平成30年度は58%、令和元年度は79%であった。どちらも令和元年度と同程度であり、平成30年度と比較すると高い値を維持している。引き続き、大学院入試説明会等において、丁寧に説明し、周知に努める必要がある。

設問 5. あなたが所属するコースのカリキュラムはその目標に合致していると思いますか。



図Ⅱ-4. コースの概要とカリキュラムの合致度

「目標に合致しているか」の問いに対し、「強くそう思う」および「そう思う」は 64%で、令和元年度 (76%) から低下し、平成 30 年度 (61%) と同程度であった。引き続き、大学院入試説明会等における説明を継続することが必要である。

設問 6. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

- 1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない
- 5. 全くそう思わない

【生物学コース】

- 1 自分が研究で培ったものと一致したため
- 1 基礎から生態まで広く生物の知識と経験を学ぶことができたため
- 2 自ら考える授業が多くあるため
- 2 基礎、生態の詳しい内容の授業を受けることができるから
- 2 M1 の授業量が少し多かったように思えたから。
- 2 卒業していく人らの研究成果は十分目標を満たしていると思うから
- 3 特になし
- 3 キャリア授業は不要だと思うから
- 3 あまり深く考えたことがない
- 3 コース全体のカリキュラムに興味がなく把握していない
- 3 専門技術者として必要な技術が具体的によく分からなかった。
- 4 講義は面白く非常にためになるものが多いが、研究室での指導は先生に任されており、指導体系が整っている研究室と全く整っておらず学生が困窮する研究室の両方があるように思えるため。

【分子生命科学コース】

- 1 合致してたから
- 2 講義や研究活動で合致していたから

- 2 研究分野は目標に合っていると思う。
- 2 生物の持つ機能や反応機構の解明,及び生物による物質生産とその制御に関する専門的な 知識及び技術を身に付けられたと感じたから
- 2 隣接コースの講義もとることになっているから。
- 2 アドミッションポリシー程の多岐にわたったカリキュラムを全員が選択するわけではない ため
- 2 基礎から応用の内容まで授業が多岐に渡っている。
- 3 教育目標などの内容を在学時に実感することがほとんどないので、判断できないため。
- 3 カリキュラムについてよく知らないため
- 4 関連性がわからない

【生物資源学コース】

- 2 学部生時代のカリキュラムを踏襲しており、大きな内容の逸脱も少なかったため。
- 2 研究分野は多岐にわたるが、主軸は生物資源・食料資源としての利用というのが理解できるカリキュラムが組まれているから。
- 2 研究テーマと受けた講義の内容が合致しているため。
- 2 病害管理関連の知識を得ることができた
- 2 自分の研究テーマに近い内容の授業を受けると選択必修の単位はほとんど足りるし、違う コースの授業も受講する必要があり、その結果より広い視野で物事を考えることができるか ら。
- 2 数々の講義の中で、目標達成のための知識と経験を提供して頂きました。
- 2 講義を受けることで、コース内容についての知識を得ることができたから。
- 3 もっと実習や実験が多くてもいいと思う。授業を受けて、技術が身についているかは疑問 を感じる。

【園芸農学コース】

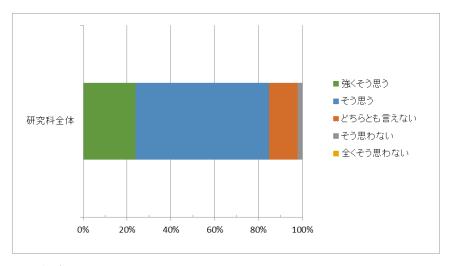
- 1 経営経済流通領域において学んだ知識が修士論文作成の際や就職活動で大いに役に立った ため、専門領域の諸問題の発見、解決できる能力、が十分得られた実感による
- 2 農業の経済を継続的な成長するため、知識をもらいました。
- 2 専門分野を学べるから
- 3 目標を知らないから

【地域環境工学コース】

(コメントなし)

[コースの教育について]

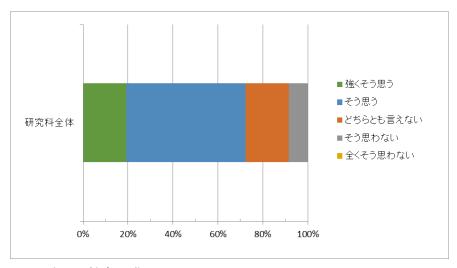
設問 7. シラバスは受講する科目の選択あるいは授業の全体的な構成の把握に役立ちましたか。



図Ⅱ-5. シラバスは役立ったか

「強くそう思う」と「そう思う」の合計は83%であった。令和元年度(76%)から増加、平成30年度(86%)と同程度となった。引き続きシラバスの内容と講義の内容の乖離を是正する努力を継続することが必要である。

設問 8. あなたが所属するコースで受けた教育(講義・演習など)について満足していますか (修士研究については設問 25 で別に聞きます)。



図Ⅱ-6. 所属コースで受けた教育に満足しているか

「強くそう思う」および「そう思う」の合計は72%で、令和元年度(71%)と同程度となり、平成30年度(66%)からの改善を維持した。「そう思わない」「全くそう思わない」は9%と、令和元年度(8%)と同程度であり、平成30年度(14%)から改善した。引き続き、少数意見も取り入れた教育の改善が必要である。

設問 9. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

- 1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない
- 5. 全くそう思わない

【生物学コース】

- 1 非常に勉強になったため
- 1 自身が受けたい授業があったため
- 2 一部の講義を除き、研究室を選択するうえで役立った。また、生物学コースでは様々な分野の研究が行われており、自分が専攻する分野以外にも広く学ぶことのできる環境であるように思う。
- 2 講義内容も興味深かったが、自主的に学んで発表する場も多くより深く学べたとかんじる から
- 2 楽しかったから
- 2 学部生の時とは異なる部類の講義を受講することができた。
- 2 分野外のことを知ることができるから
- 3 自分のためになる科目もあるが、専門外の科目を取ることが必修となっているため不必要 な可能性のある科目もとらなければならなかったため。そのような科目は学部のうちに教養 科目として履修させるか、個人の選択にすればよいと思った。
- 3 特になし
- 3 講義の存在は研究の妨げになったから
- 3 プレゼンテーション演習 1 及び 2 の内容は、大幅に見直す必要を感じる。
- 3 プレゼンテーション演習に関しては専門分野を意識した内容ではなく、専門的な内容を含む内容が避けられてた。修士課程のカリキュラムとして不適格だと考える。
- 3 生物学の専門的なもの以外の講義、社会に出てからに向けた内容の講義などがこの先到底 役に立つとは思えなかった
- 4 修士研究で必要な知識・技術を講義等で学ぶことが出来ていないから(特に統計学)
- 4 座学講義の内容が学部時の講義とかぶっているものが多かったため。また、講義数そのもの、出席を重要視する講義が多く(季節的な偏りも大きすぎる)、メインであるはずの研究活動に支障があった。

【分子生命科学コース】

- 1 自分の研究がうまく進んでいて、これからの進路も明らかになりました。
- 1 幅広い知識が身についたと感じるから
- 1 どの講義も自分の興味に合っていたため
- 2 十分に学べたため
- 2 "研究"という観点からの授業も多く、自分の研究に役立ったから。
- 2 自分の学習したい内容を深く学習でき、そこに繋がる別の内容にも触れることが出来るため。
- 2 学部よりも専門的な内容を学ぶことは楽しかったが、プレゼン演習が多く、強く満足する ほどではない

4 評価基準が不明確

【生物資源学コース】

- 1 大学院でなければ学べなかった知識に出会えた
- 1 講義内の発表やディスカッションで深い内容まで議論することができたから。
- 2 概ね必要な専門教育を履修できたため、大学卒業としてふさわしいカリキュラムであった。
- 2 自分の研究分野とは違う視点の講義を受けることで視野が広がったから。
- 2 研究や講義で得た知識が身についたちめ。 (自己評価委員会:原文通り)
- 2 演習を通した活動に困難さを感じた一方で、やはり貴重な経験になったと実感しています。
- 2 研究を行う上での、基礎知識が身につき、研究活動での役に立ったため
- 4 一部の授業では学生に好きな論文を選ばせ、論文紹介をさせているが、前提となる授業を 教員がせず、素人の学生が素人知識で授業しているような状態はすぐに改善してほしい。な んでプロからの講義を受けられないのか甚だ疑問を感じる。

【園芸農学コース】

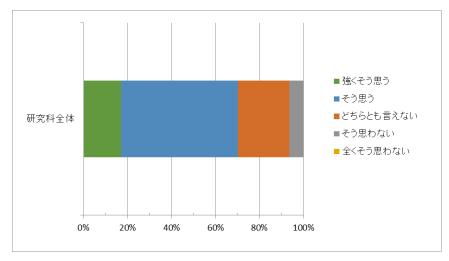
- 2 同コースの同分野の講義が被っておりひとつだけ取れない事が有ったため
- 2 全面的な知識をもらいました
- 2 講義で色々学べたから

【地域環境工学コース】

(コメントなし)

肯定的な意見では、「研究を行う上で役に立った」「幅広く学ぶことができた」「自主的に学び発表する場があった」等の理由が挙げられており、一定の教育効果があったと考えられるが、他方では演習形式の授業に対する不満や、研究活動との両立の難しさを挙げる声が散見された。講義内容や開講時期等の検討が求められる。

設問 10. 本研究科では年度初めに指導教員がガイダンスを行っていますが、その内容は適切であったと思いますか。

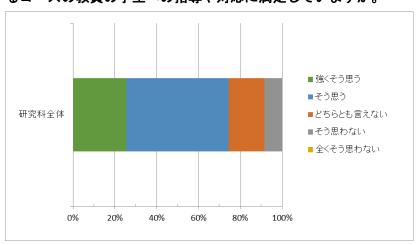


図Ⅱ-7. ガイダンス内容は適切だったか

「強くそう思う」と「そう思う」の合計は70%で、平成30年度(58%)からは改善されたが、令和元年度(84%)から低下した。改善が見られた。「そう思わない」「全くそう思わない」が6%となり、平成30年度(0%)、令和元年度(3%)から微増した。今後も引き続き改善の努力を続ける必要がある。

[教員の指導について]

設問 11. 所属するコースの教員の学生への指導や対応に満足していますか。



図Ⅱ-8. 教員の指導や対応に満足か

「強くそう思う」および「そう思う」の合計は74%で、平成30年度(83%)、令和元年度(95%)と比較して低下した。「そう思わない」「全くそう思わない」は9%で、平成30年度(6%)、令和元年度(0%)から増加した。大学院生への指導や対応の改善に努めることが重要である

設問 12. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

- 1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない
- 5. 全くそう思わない

【生物学コース】

- 1 教員方全員が熱心であったから
- 1 親身に教育して頂いたため。
- 2 ほかの研究室の学生に対しても積極的に意見やアドバイスをしているように思う
- 2 自分なりにも成長できた気がするから
- 2 特になし
- 2 適宜相談に乗ってくれるから
- 2 そう思う。
- 2 学部から修士にかけて論文やレポートの書き方に関して指導が一部不足している様に感じた。
- 2 学生らが十分に研究を出来ていると感じるから
- 2 丁寧に対応しているから
- 3 指導教員とのコミュニケーションの取り方が難しかった。
- 4 指導教員は相談にのってくれることもあるが、時間のないときは対応がおろそかであり機嫌によってはひどい態度を取られることもしばしばあったため。また、学生の自発的な行動ばかりに頼っていて基本的に放任している姿勢が見られたので、学生としては相談に行きづらい事が多々あったため。お互いが些細なことでも頼り頼られるシステムの構築が必要だと思った。副指導の先生に相談することができる点は学生の精神衛生のケアのために良いシステムだと思った。
- 4 人に教育しているような雰囲気ではなかったため

【分子生命科学コース】

- 1 指導教授は熱心に実験等を指導しました。
- 1 特に不満を感じたことがなかったから
- 1 学生のことを気にかけてくれる教員が多いため
- 2 指導教員意外と接点が乏しかったため
- 2 研究について親身になって相談に乗ってくれたり、指導してくれる。
- 2 懇切丁寧に指導していただいたため
- 3 どちらとも言えるから
- 3 指導してもらっていない 対応は良いがいかに問題を起こさないかということに重点を置いている
- 4 論文発表会など、重要事項に関しての詳細連絡を回すのが遅いから。
- 4 他学部他学科よりパワハラの話が絶えないため

【生物資源学コース】

1 特に不満はない

- 2 特に不満はないが、学生のマネジメントが上手いとは思わない。放任主義と言えば聞こえがいいが、学生が何をして、何を考えているのかを把握している気になっている人は多いと思う。
- 2 実験指導のほか、実験計画の相談に丁寧に対応して頂けたため
- 2 先生にもよるが、会うたびに研究状況や就職について適切なアドバイスや声掛けをしてくれたから。
- 2 諸事情で指導教員が変わったりしたのですが、その際しっかりと対応していただけたから。
- 2 個別の相談にも丁寧に対応してくださいました。
- 3 あまり多くのコミュニケーションをとろうはしないが、質問に対しては丁寧に答えていた だけたため。
- 3 教員ごとの目標に対する温度差が激しく、教員の当たり外れが大きいため。

【園芸農学コース】

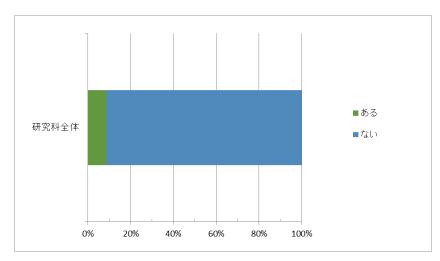
- 1 修士論文作成の際に有意義なディスカッションを行い、大いに研究をサポートしてくれた ため
- 1 農業経済学における全面な知識システムを受け取りました
- 2 論文を何度も添削してもらったため、

【地域環境工学コース】

(コメントなし)

概ね「丁寧な指導を受けることができた」という回答であったが、一部でコミュニケーション 不足を感じていた学生もおり、継続的な改善努力が重要である。

設問 13. 大学院で履修した科目の成績評価についてお尋ねします。成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはありますか。



図Ⅱ-9. 成績評価の結果に疑問や異議を持ったことはあるか

「成績評価の結果に疑問や異議を持ったことがある」が9%で、令和元年度(13%)から改善、平成30年度(8%)と同程度であった。重要な項目であるためさらなる改善が望まれる。

設問 14. 疑問や異議があったとき、あなたは実際にどこに相談し、その対応に満足しましたか。

【生物学コース】

- 1 言っても意味がないと思ってどこにも相談していない
- 1 学生相談室にいった
- 1 学務。満足しています。
- 2 ない
- 2 特になし

【分子生命科学コース】

(コメントなし)

【生物資源学コース】

- 2 研究科の教務担当に相談した。説明がわかりやすくて疑問の解決に役立った。
- 2 友人に話す程度。

【園芸農学コース】

(コメントなし)

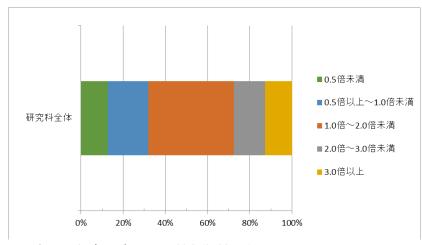
【地域環境工学コース】

(コメントなし)

疑問や異議があったときに実際に相談等の行動をした大学院生は少なかったが、相談窓口の周知や相談等がしやすい環境を整備することが望ましいと思われる。

[学生の主体的学習について]

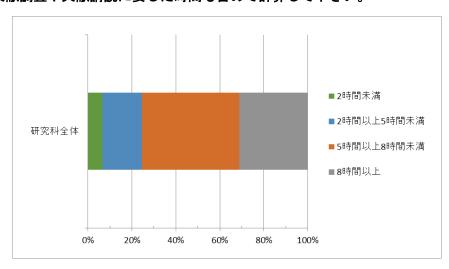
設問 15. 講義の受講に当たり、受講期間中にあなたは講義室での受講時間の何倍程度の時間を、講義室外での学習(予習や復習など)に当てましたか。大学設置基準では、2 単位の科目の場合、90 時間の学習が必要になりますが、講義室では 30 時間(90 分を 2 時間として扱い×15回=30 時間)の学習時間しかありません。そこで、講義室外での学習が必要になります(講義室での 2 倍の時間)。学習時間にはインターネットを利用した情報収集、講義でのプレゼン準備やレポートの作成、研究室内でのプレゼン準備などに要した時間も含めても構いません。ある 1科目を想定して回答しても構いません。



図Ⅱ-10(1). 1日平均どの程度の時間を予習や復習に充てたか

講義時間の2倍以上の時間を予習や復習に充てたという回答は28%で、平成30年度(25%)、令和元年度(21%)と同程度であり、大学設置基準を満たしていない大学院生が多い。改善が必要である。

設問 16. 学術特別研究(学術研究プログラム)、実践特別研究(実践研究プログラム)あるいは課題研究(社会人入学者)に要した時間は1日平均どの程度ですか。実験に要した時間に加え、研究に必要な文献調査や文献講読に要した時間も含めて計算して下さい。



図Ⅱ-10(2). 1日平均どの程度の時間を研究に充てたか

5時間以上もしくは8時間以上と回答した大学院生が73%で、平成30年度(67%)から改善、令和元年度(73%)と同じであった。引き続き、学生が研究に対するモチベーションを維持できるよう指導を工夫していく必要がある。

設問 17. 大学院教育では、学生自身の主体的、意欲的な学習が要求されます。あなたは講義についてどのような姿勢で取り組みましたか。

【生物学コース】

・学部時代と比較して、自身の研究と関連付けて取り組む機会が増えた

- ・熱心に取り組んだ
- ・予習や復習を行った。
- ・主体的に学ぶ姿勢で取り組んだ
- ・自分の知識を補うように取り組んだ
- ・主体的には行動するよう心がけた。しかしながら、学生が主体的であるから先生が受動的で良いということにはならないので、その点は学生も先生も認知しておく必要があるのではないかと思う。お互いに意欲的に活動するほうがより活発な議論や交流が進むと個人的には思う。
- ・積極的に取り組んだ
- ・主体的、意欲的に学習した
- ・意欲的に取り組んだ。
- ・講義で学んだ内容を自身の研究に如何に応用するかを考え、実際に取り組んだ。
- ・自分にとって必要な知識を抽出できるように取り組んだ
- ・できる範囲で積極的な姿勢を心掛けた。
- ・ 積極的に取り込んだ
- ・ささっと終わらせて自分の実験がしたいと思って取り組んだ

【分子生命科学コース】

- ・意欲的に取り組んだ
- ・意欲的に勉強しています。
- ・ 積極的に取り組んだ
- ・真面目に取り組んだ
- ・意欲的に取り組んだ
- ・自分の研究に役立てられることはないかと考えながら受講した。
- ・主体的に取り組んだ
- わからない点は教材やインターネットで調べた
- ・主体的、意欲的であるとは言えない姿勢であった
- ・こなせばいいもの

【生物資源学コース】

- ・なるべく疑問点を早期に調べ、地道に全体の解決に取り組んだ。
 - ・主体的に取り組んだ
 - ・疑問に思ったことは先生に質問していた。
 - ・講義内容について事前に調べたり、わからない内容や気になったことに関しては参考書 や論文で調べていた。
 - ・疑問を持つこと、調べることを意識した
 - ・疑問点などはそのままにせず、教員に質問するか、自分で調べたりしていた。
 - ・専門分野の講義はもちろん、専門外の講義に対しても、積極的に学習して授業を受けた。

【園芸農学コース】

- ・学生による報告やレジュメ作成が多かったので、講義で得られる効果を最大限に高めるため準備をしっかり行なった。
- ・積極的な工夫します。
- ・真面目に取り組む姿勢

【地域環境工学コース】

(コメントなし)

多くの大学院生が主体的および意欲的な姿勢で取り組んだと回答しており、教員の提示した要求に応えていると思われる。

設問 18. 大学院在学中のカリキュラムで、もっとも印象に残った科目があれば、その科目名と 理由を記入して下さい。

【生物学コース】

- ・プレゼンテーション演習:全体の前で発表もしたし、発言もしたけど成績評価がイマイチで不満だったのが印象的
- ・プレゼンテーション演習: 就職活動においては有用な内容だったが、もっと研究活動に即した内容にすべき
- ・プレゼンテーション演習。内容を大幅に見直す必要を感じる。
- ・プレゼンテーション演習Ⅱ(英語でのプレゼン)については学術的な内容は皆無であり、何を目的に授業を行なっていたかが最後まで理解できなかった。
- ・プレゼンテーション演習Ⅱ
- 研究方法論
- 実践特別研究
- ・学術特別研究:2年間のほぼすべてを費やしたから
- ・実践特別研究:かけた時間が最も長いから
- ・動植物史研究特論 自分の苦手な研究発表を通して自身の研究に対しての理解を深めることができた。
- ・特になし。
- ・特になし

【分子生命科学コース】

- ・食品栄養学、他コースの授業が受けられたため
- 遺伝子制御学
- · 分析技術法 G
- ・細胞制御学特論。最後に英語でのメールの書き方ぬついての指導もあり、非常に実用的な科目であったため。
- ・なし

【生物資源学コース】

- ・家畜栄養生理学 映像を用いた視覚的な教育と、実際に主体的な考え方を述べる教育が両立されており、非常にわかりやすかった。
- ・研究方法論 コースにいる先生方のお話をじっくりと聞くことができたので興味深かったから。
- ・プレゼンテーション演習 I 理由:講義内容が他とは毛色が違ったため。
- 植物分類学
- ・食品物性機能制御学 食品の物性についての詳しい講義が今までになかったから
- ・プレゼンテーション演習 I (内容の偏りは多少あるが、今後必要な能力であると感じたため)
- ・構成的生態学 I (授業の内容も面白く、先端的な情報を先生が体系立てて教えてくれていたのは印象的だった。)

【園芸農学コース】

国際食品マーケティング特論 農業経済学、国際マーケティング 研究方法論

【地域環境工学コース】

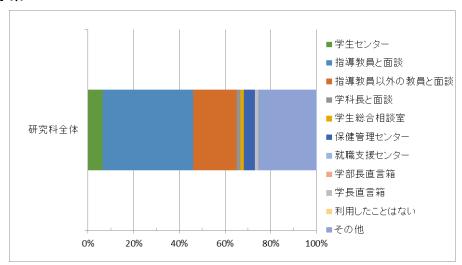
(コメントなし)

プレゼンテーション演習について学生に授業の目的や意図が伝わっていないようで不満が見られる。過去には平成26年度から平成28年度、平成30年度は内容に対する不満が多く、平成29年度は肯定的な意見が多かった。令和元年度は肯定的意見と否定的意見の両方が見られた。学生の状況や考え方によって受け止め方が様々である。今後も検討が必要である

[学生への教育支援、 施設・設備について]

本研究科や本学では皆さんに助言したり、皆さんからの相談・苦情を受け付けたり、皆さんの ニーズを把握するために、以下のようなルートを用意しています。在学中あなたは次の(1)~(3) の項目について主にどれを利用しましたか(複数回答可)。

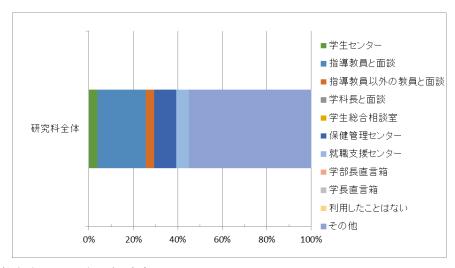
設問 19. (1) 学業



図Ⅱ-12(1). 学業に関する相談窓口

「利用したことがない」と回答した学生は 0%で、平成 30 年度 (25%)、令和元年度 (50%) に対し、学生がいずれかの相談窓口を利用できていた。相談した学生の多くは「指導教員と面談」「指導教員以外の教員と面談」(全体の 59%)であった。教員と大学院生の間の垣根を低くする努力を継続することが必要と思われる。

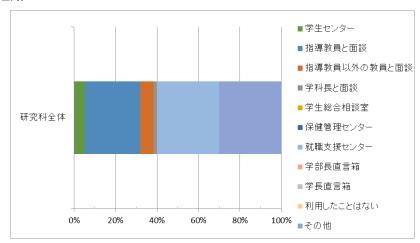
設問 20. (2) 学生生活



図Ⅱ-12(2). 学生生活に関する相談窓口

「利用したことがない」と回答した学生は0%で、平成30年度(45%)、令和元年度(71%)に対し、学生がいずれかの相談窓口を利用できていた。引き続き学生生活に関する相談ができる窓口が複数用意されていることを周知する努力が必要である。「その他」が最も多かったが、具体的な回答は得られなかった。

設問 21. (3) 進路



図Ⅱ-12(3). 進路に関する相談窓口

就職支援センターの利用は30%であり、平成30年度(31%)、令和元年度(32%)と同程度であった。一方、「利用したことがない」との回答は0%で、平成30年度(25%)、令和元年度(32%)に対し、学生がいずれかの窓口を利用できていた。

設問 22. 上記(1) \sim (3) の項目について、それぞれの対応に関して改善すべき点があれば以下に 簡潔に記入して下さい。

【生物学コース】

- 特になし
- ・特になし
- ・就職支援センターは修士課程の学生の進路や方向性について理解されていない方が多く、参考にならなかった。

【分子生命科学コース】

- ・同期生のパワハラセクハラに私自身と後輩たちが困らされていた際、相談場所などが明示されていなかったため利用しにくかった。
- 話を聞いてくれる人とそうでない人がいる

【生物資源学コース】

- ・問題点の指摘を相談可能な施設は多いが、多くの指摘は単なる「検討中」で終わっているため、学生が実感できる形で意見の反映をもっと迅速に行ってほしい。
- ・利用していないのでわかりません。 (注:問 $12(1) \sim (3)$ では「その他」を選択)
- ・特になし。

【園芸農学コース】

・なし

【地域環境工学コース】

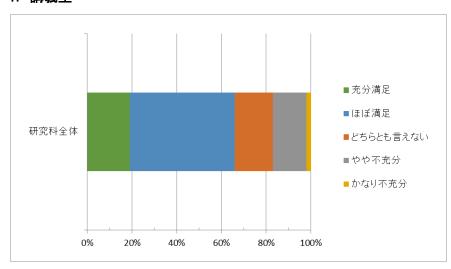
(コメントなし)

相談したものの、満足した対応が得られなかったとの意見も見受けられた。

設問 23. 本学部の以下の施設について、どのように感じていますか。

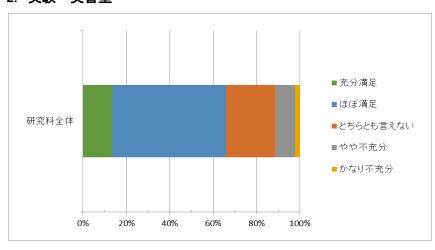
証 設	1. 充分満足	2. ほぼ満足	3. どちらとも 言えない	4. やや不充 分	5. かなり不 充分
1. 講義室					
2. 実験·実習室					
3. 情報処理演習室					
4. 蔵書室(4 階)					
5. 学生自習室、学生控 室(2 階)					
6. 修士研究を行った 研究室					

1. 講義室



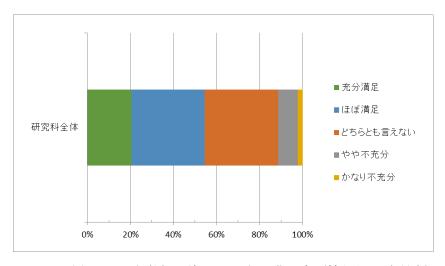
図Ⅱ-13(1) - 1. 本学部の施設に対する満足度(講義室)

2. 実験・実習室



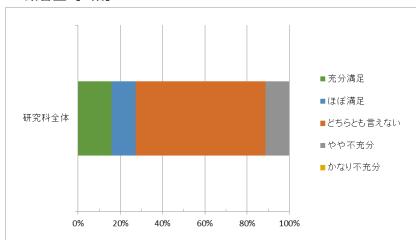
図Ⅱ-13(1) - 2. 本学部の施設に対する満足度(実験・実習室)

3. 情報処理演習室



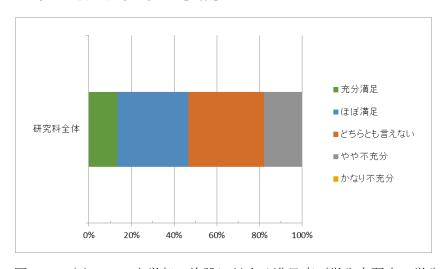
図Ⅱ-13(1)-3. 本学部の施設に対する満足度(情報処理演習室)

4. 蔵書室 [4階]



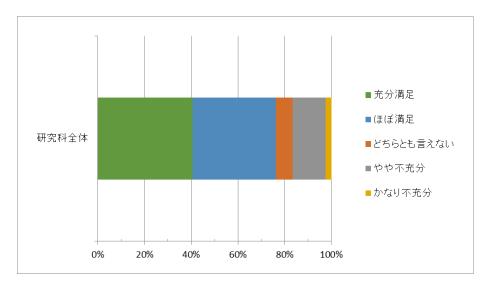
図Ⅱ-13(1) - 4. 本学部の施設に対する満足度(蔵書室 [4階])

5. 学生自習室、学生控室 [2階]



図Ⅱ-13(1)-5. 本学部の施設に対する満足度(学生自習室、学生控室 [2階])

6. 修士研究を行った研究室



図Ⅱ-13(1) - 6. 本学部の施設に対する満足度(修士研究を行った研究室)

本学部の施設について、1. 講義室、2. 実験・実習室、3. 情報処理演習室、4. 蔵書室、5. 学生自習室・学生控室(2階)、6. 修士研究を行った研究室の6箇所を対象に満足度を聞いた。6. 修士研究を行なった研究室の満足度が76%となり、平成28年度(30%)、平成29年度(26%)、平成30年度(23%)、令和元年度(26%)から向上した。

設問 24. 各施設に対する要望がありましたら具体的に記述して下さい。

- ・講義室、修士研究を行った研究室については夏の間クーラーを取り付けるべきだと思う。
- ・冷暖房を完備してください
- ・修士研究を行った学生部屋のエアコンがつかない
- ・農学生命科学部の学生実験室への冷房の設置をお願いしたいです。学生実験の時期が 6.7 月と 真夏のは (自己評価委員会:原文通り)
- ・冷暖房設備の格差を是正してほしい。いくつかの研究室はクーラーが設置されている中で、ま だ設置されていない研究室もあるのは不平等ではないでしょうか。
- ・窓に網戸があると良いと思った。
- ・実験室の面積が狭い
- ・特にないですが少し研究室が狭いです。
- ・遺伝子組み換え実験が多く、進学の多い分子生物学コースと生物学コースの学生は食事場所や 学習を行うスペースがないので院生室が必要だと感じた。
- ・建物全体を通して、ネット環境が脆弱すぎる。
- ・修士研究を行った研究室について、研究室と学生の控え室が共用になっているため分けてもらいたい。
- ・蔵書室は存在を知らない人が多いし、アクセスの悪さと入室のしにくさから、利用機会はほとんどない。
- ・学生控室は席数に不足を感じた。講義室は温度調節に難があったと感じた。蔵書室は未利用な ためこの評価になった

- ・清掃が行われておらず埃が溜まっているためのどが弱い人間は一時間居るだけで体調を崩した
- ・農生棟の自習室でコンセントが使える机の席数が少ない。
- ・トイレの水勢を早急に改善した方がいい
- ・特になし×4

例年と同様に講義室や研究室の冷暖房管理に関する要望が複数あった。これらを受けて、数年前よりいくつかの講義室に冷房設備を設置するなど改善を図っている。また、実験室や研究室のスペースについての要望もあった。様々な制限のもとでこれらの要望に即座に答えることは容易ではないが、学生への理解を求めるとともに、継続して改善していく必要がある。

設問25. 修士研究について満足していますか。

図Ⅱ-14(1). 修士研究に対する満足度

研究科全体で「強くそう思う」と「そう思う」を合わせた肯定的評価は 71%であり、半数以上が修士研究に満足しているとの結果であったものの、平成 30 年度の 81%、令和元年度の 76% からは微減した。また、「そう思わない」という否定的評価が 9%であり、前年度 (10%) と同程度であった。平成 25 年度から平成 28 年度までの傾向として肯定的評価の減少(平成 25 年度から順に 82% \rightarrow 76% \rightarrow 65% \rightarrow 63%)が続いていたが、平成 29 年度以降は改善が見られている。否定的意見に関しては、期待していた結果が得られなかったこと、計画通り進められなかったことのほか、人間関係に関する意見もあり、引き続き問題点の究明と改善の努力を続ける必要がある。

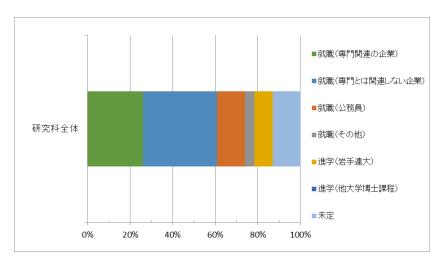
設問 26. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

- 1 楽しかったから
- 1 努力できたから
- 1 満足した
- 1 やりたいことは充分に行うことができた
- 1 とてもいい環境で研究できたから。
- 1 興味がある分野を意欲的に取り組み、成果を挙げることができたため
- 1 親身になって研究に対する指導をしていただいたから。

- 1 深く学ぶことができた
- 1 終始卒業までに目標としていた内容を終えることができたから。
- 2 もう少しやれることがあったかなと思うから
- 2 そう思う。
- 2 自分の望む研究成果を指導教員とともに出せたから
- 2 実験には真剣に取り組めたが自主的な学習が不足していたから
- 2 研究の良い結果が出ました。
- 2 学会発表に参加して実践成果の発表を行うのは楽しかった
- 2 今年は新型コロナの影響やそれに伴う就職活動の不安定さもあったが、おおむね予定通り に研究をすすめることができたから。
- 2 貴重な時間でした
- 2 実験を計画通りに進めることができ、自分が納得できるところまでのデータを出すことができたから。
- 2 コロナウイルスの影響により事例が一つ減った
- 2 関連知識ももらいました
- 2 目的を果たせたため
- 3 やりたかったのにできなかったことがたくさんあった
- 3 自主的な活動をしていたが、意欲性は足りなかったと感じるため
- 3 どちらとも言えるから
- 3 まだ学部生だから (自己評価委員会:学部生が回答したと思われる)
- 3 担当教員が押しつけが激しいため、自分を見失っていくから
- 3 最新の論文や新しい解析法の導入に意欲的であるにも関わらず、マニュアルの作成を学生 任せにするなど、研究が結局非効率化する矛盾を抱えているため。
- 3 研究を予定していたところまで進められなかったため。
- 3 幅広さは十分だったが、もっと深く突き詰める研究がしたかったと思う。
- 4 期間が短い
- 4 研究自体は面白かったが、指導教員の研究室運営に問題があり研究以外の悩みによって疲弊してしまったため。
- 4 もっと自分から積極的に動くべきだったと感じたから。
- 4 同期からのパワハラ、それを黙認し雑用などを押し付ける研究室の体制、研究技術を教えない体制

設問 27. 研究科修了後のあなたの進路は次のうちのどれですか。

- 1. 就職(専門関連の企業) 2. 就職(専門とは関連しない企業) 3. 就職(公務員)
- 4. 就職(その他) 5. 進学(岩手連大) 6. 進学(他大学博士課程) 7. 未定

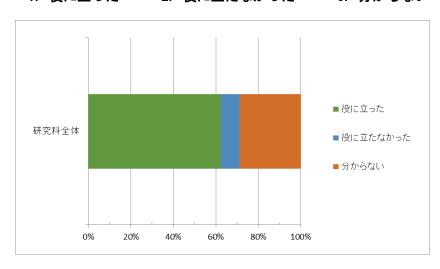


図Ⅱ-15(1). 研究科修了後の進路

研究科全体では「専門関連の企業」への就職が26%であり、昨年度(36%)から減少、「専門と は関連しない企業」への就職は35%と昨年度(29%)から増加した。一方、「公務員」は13%と昨 年度(10%)より微増した。博士課程進学者は9%で、昨年度の5%から増加した。

設問 28. 本研究科のカリキュラムで学んだことは、進路の決定にどのように影響しましたか。

- 1. 役に立った 2. 役に立たなかった 3. 分からない

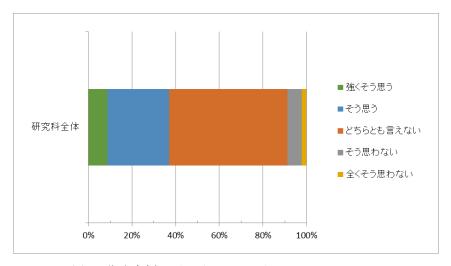


図II - 15(2). 研究科で学んだことはどのように進路に影響したか

研究科全体では「役に立った」が62%で昨年度(74%)に比べて低下した。「役に立たなかっ た」は9%で昨年度(11%)から微減した。

設問 29. 本学および本研究科の進路支援に対する取り組みは十分だったと思いますか。

1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない 5. 全くそう思わない

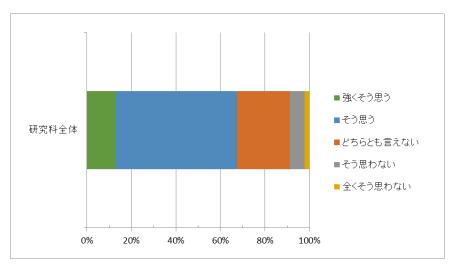


図Ⅱ-15(3). 進路支援の取り組みは十分か

研究科全体では肯定的評価が 37%で、平成 30 年度(56%)、令和元年度(42%)と低下傾向にある。否定的評価は 9%で昨年度 16%から減っているが、支援の方法等について見直す必要があると考えられる。

設問 30. あなたが本研究科を修了するに当たり、大学院修了者に相応の知識および学力を身に付けたと感じていますか。

1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない5. 全くそう思わない

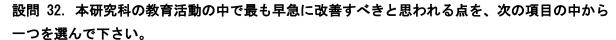


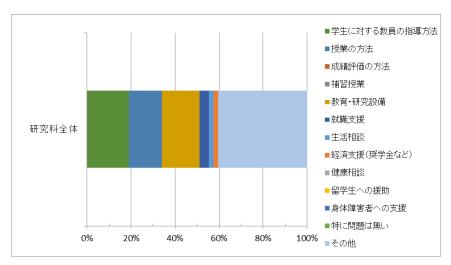
図Ⅱ-16(1). 大学院修了者に相応の知識および学力を身に付けたか

過去3年で見ると、研究科全体では、「強くそう思う・そう思う」($64\% \rightarrow 68\% \rightarrow 67\%$)、「どちらとも言えない」($25\% \rightarrow 26\% \rightarrow 24\%$)、「全くそう思わない・そう思わない」($11\% \rightarrow 5\% \rightarrow 9\%$)であった。過去3年間で同程度で推移している。今後も継続してその傾向を把握し、習得度の低下が客観的にも認識されるようであればその理由とともに分析し改善する必要がある。

設問 31. 上記のように回答した理由を簡潔に記入して下さい。

- 1 専門性が高く、教えてくださる教員方の熱意もあったから
- 1 学部で学んだ内容をもとに自身で仮説を立て、実証に取り組むことができた。
- 1 学会発表等で成果を発表できたため
- 1 どの場所でも自らの研究成果について自信を持って話せる
- 2 専攻いかせる企業がなかったため
- 2 前は知らないことが今はわかるようになったから
- 2 以前より物をよく調べ、考えるようになったため。また、科学的な手法が以前より身についたのではないかと感じるため。
- 2 特になし
- 2 特になし
- 2 そう思う。
- 2 自分の専門に関して、指導教員と対等に議論できるレベルになったから
- 2 相応の知識が求められる就職先に合格できたため
- 2 実験がだんだん上手になりました。分野の知識も身についています。
- 2 研究内容については学会発表などの機会もあり、学部生のときよりは理解が進んだように 思えるから。
- 2 研究テーマに関係した知識は身についたため。
- 2 どうやって知識を深めていくか、どうやって検証を行うかのノウハウは身についたと思う。
- 2 学部の時よりも専門分野に深く触れることができ、多くの実験を行うことで幅広い分野の 知識を得ることができたから。
- 2 将来に生かせる可能性があるため
- 3 所属研究室の教員の不在により得た知識が正しいかの議論が不十分だったから
- 3 自主的な行動が足りなかったから
- 3 専門的なことについての知識は身につけたが、学部で学んだ広い知識を忘れてしまったから。
- 3 まだ学部生だから (自己評価委員会:学部生が回答したと思われる)
- 3 研究ばかりで勉強する時間を取れなかった
- 3 教員の指導方針が、就職活動に際して殆ど活かされなかったため、客観的には大学院相応 とみられていなかった可能性があるため。
- 3 自分の分野についてはたくさん勉強する機会があり知識は身につけたと思うが、そのほかの分野などについては少し触れ合う機会が少なく知識を身につけることができなかったため。
- 3 未熟な部分がいまだにあります
- 4 周りの学生や他大の学生と比べて、劣っているように感じる
- 4 あまり指導を受ける時間が無く、周りの大学院修了者と比べると自分は劣っていると感じることが多いから。
- 5 研究活動をする環境は整っていた一方で、研究活動に最大限の努力を払うことができな かったため。





図Ⅱ-17(1). 本研究科の教育活動の中で最も早急に改善すべき点

「学生に対する教員の指導方法」が19%となり、平成30年度(9%)、令和元年度(11%)と比較して増加した。一方、「教育研究設備」は令和元年度(18%)と同程度の17%で、「問題あり」の中で2番目に高かった。「授業方法」が15%と3番目に高かった。例年、比較的割合の高い「就職支援」は今年度は4%にとどまった。「その他」が40%に上ったが、具体的な回答はなかった。

設問 33. 上記で選択した項目に関する要望を具体的に記入して下さい。

- 1. 学生に対する教員の指導方法 2. 授業の方法 3. 成績評価の方法 4. 補習授業
- 5. 教育・研究設備 6. 就職支援 7. 生活相談 8. 経済支援(奨学金など)
- 9. 健康相談 10. 留学生への援助 11. 身体障害者への支援
- 12. その他 () 13. 特に問題は無い
- 1 教育者ではないなと感じたため
- 1 研究室内で教員が学生を傷つけるような態度を取ることで学生の精神が病んでいく現状が 見られた。そのため、研究室マネジメントについて第3者が監視するシステムがあったほう が良いと思う。一度病んでしまうとなかなか外部に相談できないし、学生が教員に対して異 議申し立てを行うことは心理的負荷が大きすぎると思う。また、研究室を選択する前にいく つかの研究室を数週間あるいは数ヶ月単位で体験できるシステムがあると自分により合う指 導教員を見つけることができると思う。
- 1 最低限の教育の基準を設けると良いと思った。
- 1 決定事項を迅速に学生に伝達してほしい。
- 1 学生の対応をするのは先生方の本部ではありませんが、身近にいる人に相談などをすることは当たり前だと思いますので、そのあたりをご配慮ください。また、研究室同士で関わってはいけない、遊びに来るなといった指導はやめたほうがいい。
- 1 なるべく教員本位の価値観の押しつけにならないようにしてほしい。上意下達では主体性 の尊重が損なわれる可能性があるため。

- 2 院生の研究活動に即した内容にすべき講義がいくつかある
- 2 大学院は研究がメインなので授業はそんなに必要ない
- 2 もっと実際の研究の際に活用できる知識(特にRやその他ソフトの使い方)を教えるべき
- 2 大学院のメインは研究活動のはずなので、研究活動でやむなく講義を欠席する場合は考慮 してほしい。また、履修しなくてはいけない講義に季節的な偏りが大きい。春先にしかでき ない実験などに支障があった。
- 2 授業数が多すぎるため研究に集中できない。
- 2 文献紹介形式の授業をする前に、プロである教員が、文献を読むための基本的な講義くらいはしてほしい。何を目的とした学問なのか、有名な研究例は何なのか、よく使われる研究手法は何かなど、体系立った知識を身につける場にしてほしい。
- 5 卒論、修論発表が近づくにつれて、実験機器の使用頻度、使用人口が増え、故障する事態がありました(PCR)。その時期はとても困りましたので、あらかじめ故障をしないための使用ルールやメンテナンスなどを行なっていただけると今後使用する方々のためになると思う。
- 6 就職関連の講義でためになったのが卒業された先輩方からのお話だけで、キャリア関係の 方が行った講義は特に役に立ったと思わなかったため。
- 13 特になし
- 13 特にありません。
- 13 特になし。

設問 34. 本研究科で学生が期待する教育を受けるとともに充実した学生生活を送るために、希望する点や、大学または学部が改善すべき点があれば具体的に記入して下さい。

- ・学舎の整備
- ・教授と第三者とで学生教育について議論する場が必要ではないかと感じた。
- ・講義を減らし、研究に当てられる時間を増やすべきである
- ・(1)経済支援の拡充。(2)プレゼンテーション演習の見直し。(3)同じ研究科であっても、専攻が違うと全く関わりがない。他の専攻の講義を受けて、とても面白かったと感じた。なので、もう少し、他の専攻との交流ができると面白いのかなと思う。講義という形だと重いので、オープンでラフな研究室紹介の場とかあってもいいかもしれない。セミナーで、外部の方が来てお話ししてくれるように、内部の人が内部の人に向けて話す機会があってもいいかもしれない。
- ・授業数を減らし、実験実習を増やすべき。

教員を増員し、一つの専門科目に対し2人以上の専門教員を充てるべき 研究室に対しても、学 生の人数に応じて教員を増やすべき

- ・各タームの講義を減らし、集中講義を増やしてほしい。弘前以外で研究活動を行うことができない。
- ・仮眠室とシャワー室が欲しい
- ・学食、コンビニなどがあると便利
- ・就職活動が長期化した学生への、何らかの学業両立支援策を具体的に講じてほしい。殆ど守られていない深夜の学内滞在への規制をもっと強化してほしい。
- ・教員に学生のマネジメントの仕方を学んでほしい。特に、精神的に病んでいる学生の取り扱い

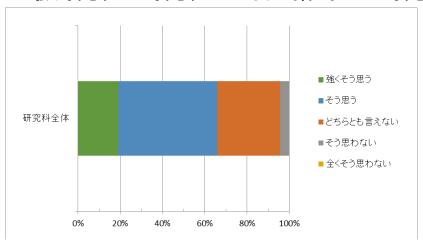
方など。

- ・暖房設備の充実
- ・特になし。×6

継続して要望や批判に耳を傾け、改善を図っていく必要がある。

設問 35. 総合的に判断して本研究科・コースの教育・研究に対する取組み・姿勢に満足していますか。

1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない 5. 全くそう思わない



図Ⅱ-19. 本研究科・コースの教育・研究に対する取組み・姿勢に満足か

設問 36. 上記のように回答した理由を記入してください。

- 1 サポートも良く、成果も出せたので満足している
- 1 充実した2年間を過ごせたから
- 1 大学院にいる期間、特に不自由さを感じることはなかったから。
- 2 楽しかったから
- 2 現状の弘前大学大学院は、学生・指導教員の個々の能力に強く依存し、大学のカリキュラムによって何かを達成できているとは考えにくいが、現状は十分な研究を出来ていると思うから。しかし、今後10年の生物学の発展に追従していけるとは考えにくいため、まずは設備面の拡充を急務とすべきだと思う。
- 2 学習への意識が変わったから
- 2 授業や修士研究を通して、満足感をもって学生生活を送ることができたから。
- 2 得た知識やスキルを認められて、就業先が決まったため。
- 2 修士課程を終えるまでに特に不便だと思ったことがなかったため。
- 3 人間関係について満足できない部分があったため
- 3 研究や学問の楽しさもあったが、それだけでなく指導教員にたいする不満も大きく複雑な 心境にあるため。
- 3 特になし
- 3 研究には満足しているが、講義の在り方には不満がある
- 3 あまり学校に行くことができなかったため判断ができなかった。

- 3 研究はできたが、ほかのことをやっていない
- 3 ある程度までは教育目標の達成や学生支援のための改善努力が認められるが、教授会の権力が強すぎて大学の行う改善努力が停滞している部分がみられるため。
- 3 環境として満足はしているが、都市部の大学と比べると、入ってくる情報量が少なく感じる。もう少し他大学の大学院生との情報交換をする機会があるといい。

「強くそう思う」「そう思う」が 67%であった。肯定的な意見としては、十分なサポートが受けられた、研究に満足しているという意見があった一方、否定的意見として、人間関係や設備面の不十分さを挙げる声があった。

Ⅲ. 教員対象教育評価アンケート

1. アンケート調査内容

調査目的:農学生命科学部の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため学部教育に関する教 員の意識について調査することを目的とした。

調査方法:電子メールで教員に本アンケートについて周知し、Forms で回答を依頼した。なお、アンケートは個人を特定できない設定にして行われた。

調査対象:令和3年2月に学部、研究科および生物共生教育研究センター、白神自然環境研究 センターに所属する教員とした。

調査期間:令和3年2月1日~3月31日

調査対象教員数:79名 有効回答者数:70名 (回答率88.6%)

調査項目:設問は以下の通りである。

設問1. あなたの所属学科およびコースをお答えください。

設問 2. 本学部および本研究科の理念、教育目的および教育目標を知っていますか。

設問3. あなたが所属する学科・コースの教育目的を知っていますか。

設問 4. 本学部の入学者受け入れ方針(アドミッションポリシー)を知っていますか。

設問 5. あなたが所属する学科・コースの教育目的は学部ホームページにあるとおりですが、学 科(教養教育科目および専門教育科目)およびコースのカリキュラムはその目標によく 合致すると感じていますか。

設問 6. あなたはシラバス作成時に、学科・コースの教育目的や教育目標に従った講義内容にしようとしていますか。

設問 7.

- (1) 授業内容がシラバス記載の内容と異なることをどのようにお考えですか。
 - 1. シラバスと授業内容が異なることは極力避けるべきである
 - 2. より良い授業内容を提供するためには、ある程度異なっても構わない
 - 3. 担当科目の性格から、異なることは避けられない
 - 4. その他()
- (2) 何らかの理由で授業内容がシラバス記載の内容と異なった場合、あなたは受講生に対す る説明の必要性についてどのようにお考えですか。
 - 1. 異なる理由を受講生に説明する必要がある
 - 2. 受講生に説明する必要はない
 - 3. その他(
- (3) 上記の設問で「2.」と回答した理由を教えて下さい。
- 設問 8. 本学では「授業方法改善のための学生による授業評価に関するアンケート調査」が平成 15 年度後期から実施されています。その結果についてお尋ねします。
 - (1) 学生による授業評価の妥当性についてどのようにお考えですか。
 - 1. かなり妥当な授業評価である 2. ほぼ妥当な授業評価である
 - 3. どちらとも言えない 4. やや妥当でない授業評価である
 - 5. まったく妥当でない授業評価である

- 設問 9. 本学では教育改善のための各種の研修活動 (FD活動) が行われています。ここで言う「FD活動」とは、学部・研究科・学科・コース等で実施されている教育改善に関わる各種研修活動全般を意味します。
 - (1) この1年間でどのようなFD活動に参加されましたか。参加された回数をお答え下さい (参加されなかった場合は0を記入して下さい)。
 - (2) 参加された活動は、教育改善に役立ちましたか。
- 設問 10. 担当科目において学生の授業時間外の学習を促すためにどのような工夫をしていますか。

設問 11.

- (1)本学部の以下の施設と設備についてどのように感じていますか。該当する欄に○を書き込んで下さい。
- (2)上記で「4. やや不充分」と「5. かなり不充分」を選択した場合、その理由を次の欄に具体的に書いて下さい。

設問 12.

- (1) 卒業研究は必要であると思いますか。
- (2)上記のように回答した理由を下欄に分りやすく記入して下さい。

設問 13.

- (1) あなたの学科の大多数の卒業生は、本学部での教育により大学卒業生に相応の知識と学力を身に付けたと思いますか。
- (2)上記で「4. そう思わない」と「5. 全くそう思わない」を選択した場合、その理由は何ですか。以下の中から選んで下さい。

設問 14.

- (1) あなたの専攻の大多数の修了生は、本研究科での教育により大学院修了程度の専門知識を身に付けたと思いますか。
- (2) 上記で「4. そう思わない」と「5. 全くそう思わない」を選択した場合、その理由は何ですか。以下の中から選んで下さい。

2. 調査結果

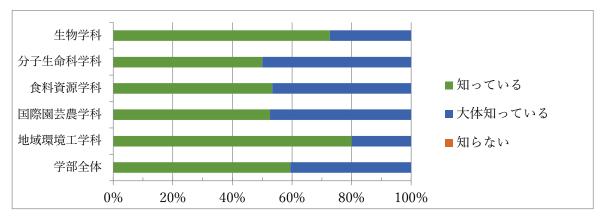
設問 1. あなたの所属学科およびコースをお答えください。

≠m	1	回燃素
表Ⅲ-	Ι.	回答率

学科	教員数	回答数	回答率	R2 元回答率
生物学科(白神含む)	14	11	79%	88%
分子生命科学科	14	14	100%	85%
食料資源学科	20	15	75%	90%
国際園芸農学科 (農場含む)	21	20	95%	100%
地域環境工学科	10	10	100%	90%
学部全体	79	70	89%	91%

3 か年(平成 30~令和 2 年度)の学部全体の回答率を見ると、76%→91%→89%と推移した。 学科毎に見ると、「生物学科」(82%→88%→79%)、「分子生命科学科」(77%→85%→100%)、「食料資源学科」67%→90%→75%)、「国際園芸農学科」(71%→100%→95%)、「地域環境工学科」 (91%→90%→100%)と推移している。なお、「白神自然環境研究センター(白神)」は「生物学科」に、「生物共生教育研究センター(農場)」は「園芸農学科」に含めて集計している。本年度においては、全学科の回答率が高い水準で見られた。分子生命科学科および地域環境工学科は100%であった。

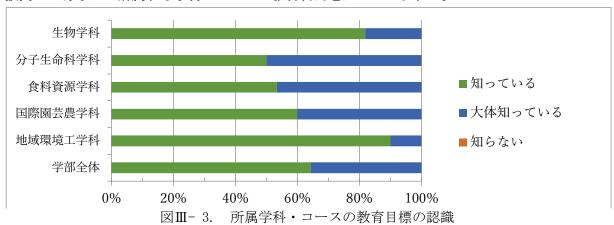
設問 2. 本学部および本研究科の理念、教育目的および教育目標を知っていますか。



図Ⅲ-2. 学部・研究科の理念・教育目的・教育目標の認識

学部・研究科の理念・教育目的・教育目標の認知について、3か年の推移を学部全体で見ると、「知っている」(57%→58%→60%)、「大体知っている」(41%→42%→40%)と推移している。「知らない」と回答した人が、昨年度から0%と続いている。本年度も全ての教員が、学部と研究科の理念・教育目的・教育目標を概ね認知している。

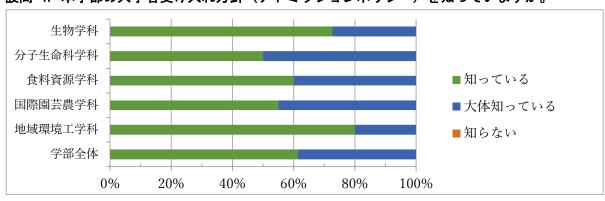
3 か年の推移を学科別に見ると、「知っている」は「生物学科」(57%→47%→73%)、「分子生命科学科」(50%→55%→50%)、「食料資源学科」(33%→67%→53%)、国際園芸農学科」(58%→52%→53%)「地域環境工学科」(90%→78%→80%)となった。



設問 3. あなたが所属する学科・コースの教育目的を知っていますか。

所属学科・コースの教育目標の認知について、3か年の推移を学部全体で見ると、「知っている」 $(54\% \rightarrow 66\% \rightarrow 64\%)$ 、「大体知っている」 $(45\% \rightarrow 34\% \rightarrow 36\%)$ 、「知らない $(1\% \rightarrow 0\% \rightarrow 0\%)$ と推移しており、 全教員が概ね認知している。

学科別に「知っている」の3か年の推移を見ると、「生物学科」(57%→53%→82%)、「分子生命科学科」(40%→64%→50%)、「食料資源学科」(33%→67%→53%)、「国際園芸農学科」(53%→67%→60%)、「地域環境工学科」(90%→89%→90%)と推移している。特に「地域環境工学科」に「知っている」の割合が高い傾向である。



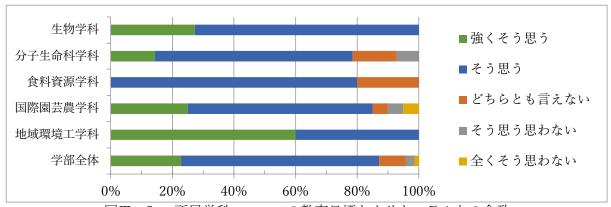
設問 4. 本学部の入学者受け入れ方針(アドミッションポリシー)を知っていますか。

図Ⅲ- 4. 入学者受け入れ方針の認識

アドミッションポリシーの認知について、3 か年の変化を学部全体で見ると、「知っている」 $(62\% \rightarrow 66\% \rightarrow 61\%)$ 、「大体知っている」 $(37\% \rightarrow 34\% \rightarrow 39\%)$ 、「知らない」 $(1\% \rightarrow 0\% \rightarrow 0\%)$ と 推移している。このように、 教員全員がアドミッションポリシーを概ね認知している。

「知っている」の比率を学科別に3カ年で見ると、「生物学科」(57%→53%→73%)、「分子生命科学科」(60%→64%→50%)、「食料資源学科」(50%→72%→60%)、「国際園芸農学科」(63%→67%→50%)、「地域環境工学科」(80%→78%→80%)となっている。

設問 5. あなたが所属する学科・コースの教育目的は学部ホームページにあるとおりですが、学科(教養教育科目および専門教育科目) およびコースのカリキュラムはその目標によく合致すると感じていますか。

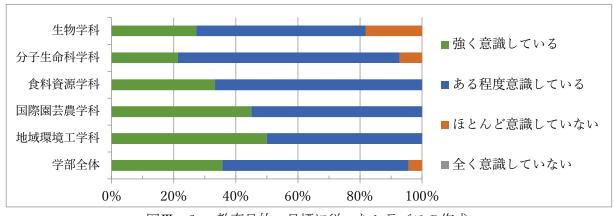


図Ⅲ- 5. 所属学科・コースの教育目標とカリキュラムとの合致

学部全体では肯定的評価(「強くそう思う」と「そう思う」) を 3 か年で見ると、81%→92%→87%であり、 ほとんどの教員が概ね合致すると考えている。

学科別の「肯定的評価」を 3 か年で見ると、「生物学科」が $(86\% \rightarrow 100\% \rightarrow 100\%)$ 、「分子生命科学科」 $(89\% \rightarrow 100\% \rightarrow 79\%)$ 、「食料資源学科」 $(75\% \rightarrow 94\% \rightarrow 80\%)$ 、「国際園芸農学科」 $(68\% \rightarrow 62\% \rightarrow 85\%)$ 、「地域環境工学科」 $(100\% \rightarrow 100\% \rightarrow 100\%)$ となっている。

設問 6. あなたはシラバス作成時に、学科・コースの教育目的や教育目標に従った講義内容にしようとしていますか。



図Ⅲ-6. 教育目的・目標に従ったシラバスの作成

3か年で見ると、学部全体で「強く意識している」($34\% \rightarrow 34\% \rightarrow 36\%$)、「ある程度意識している」($66\% \rightarrow 66\% \rightarrow 60\%$)と推移した。全ての教員が「強く」あるいは「ある程度」意識しており、全体として「教育目的・目標に従ったシラバスの作成」が意識されている。

学科別に「強く意識している」と「ある程度意識している」の合計割合を 3 か年で見ても、「生物学科」が $100\% \rightarrow 100\% \rightarrow 82\%$ 、「分子生命科学科」 $100\% \rightarrow 100\% \rightarrow 93\%$ 、「食料資源学科」 $100\% \rightarrow 100\% \rightarrow 100\%$ 、「国際園芸農学科」が $100\% \rightarrow 100\%$ 、「地域環境工学科」が $100\% \rightarrow 100\%$ であり各学科で教育目的・目標に従ったシラバス作成が意識されている。

生物学科 ■シラバスと授業内容が異なること は極力さけるべきである 分子生命科学科 ■より良い授業を提供するために 食料資源学科 は、ある程度異なっても構わない 国際園芸農学科 ■担当科目の性格から、異なること 地域環境工学科 は避けられない ■その他 学部全体 0% 20% 40% 60% 80% 100%

設問 7. (1) 授業内容がシラバス記載の内容と異なることをどのようにお考えですか。

図Ⅲ-7(1). シラバスと実際の授業内容の不一致に対する見解

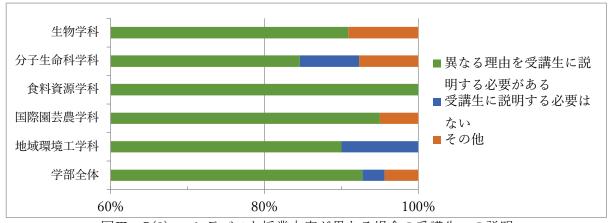
3 か年で見ると、学部全体で、「極力さける」 $44\% \rightarrow 49\% \rightarrow 43\%$)、「ある程度異なってもかまわない」($56\% \rightarrow 51\% \rightarrow 56\%$)、「異なることは避けられない」($0\% \rightarrow 0\% \rightarrow 0\%$) と推移している。このように教員の意見は、「極力さける」と「ある程度異なっても構わない」にほぼ分かれている。学科別の 3 か年の推移は以下の通りである。「生物学科」では「極力さける」 $29\% \rightarrow 53\% \rightarrow 36\%$ 、「ある程度異なってもかまわない」 $71\% \rightarrow 47\% \rightarrow 64\%$ 、「分子生命科学科」では「極力さける」 $60\% \rightarrow 55\% \rightarrow 57\%$ 、「ある程度異なってもかまわない」 $40\% \rightarrow 45\% \rightarrow 43\%$ 、「食料資源学科」では「極力さける」 $67\% \rightarrow 61\% \rightarrow 33\%$ 、「ある程度異なっても構わない」 $33\% \rightarrow 39\% \rightarrow 67\%$ 、「国際園芸農学科」では「極力さける」 $44\% \rightarrow 52\% \rightarrow 55\%$ 、「ある程度異なっても構わない」 $56\% \rightarrow 43\% \rightarrow 40\%$ 、「地域環境工学科」では「極力さける」 $20\% \rightarrow 0\% \rightarrow 20\%$ 、「ある程度異なっても構わない」 $80\% \rightarrow 100\% \rightarrow 80\%$ となった。

「国際園芸農学科」で「その他」の回答が1名いた。

「その他」の「自由記述欄」には、以下の記述があった。

・程度の問題

(2) 何らかの理由で授業内容がシラバス記載の内容と異なった場合、あなたは受講生に対する説明の必要性についてどのようにお考えですか。



図Ⅲ- 7(2). シラバスと授業内容が異なる場合の受講生への説明

3 か年で見ると「異なる理由を受講生に説明する必要がある」が 95% \rightarrow 95% \rightarrow 91%と大勢を占めている。しかし、「説明する必要はない」との意見も 3% \rightarrow 3% \rightarrow 3%ある。

「その他」の「自由記述欄」には、以下の記述があった。

【生物学科】

・必要に応じて説明する必要が有ると思う。

【分子生命科学科】

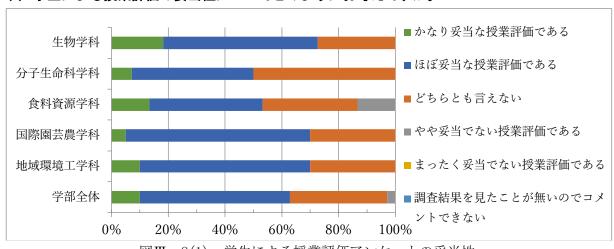
どちらでも良い

(3) 上記の質問で2. と回答した理由を教えて下さい。

・研究室学生に尋ねると、そもそも受講生もシラバスを読んでいない。読んでいたとしても記憶していない。

設問 8. 本学では「授業方法改善のための学生による授業評価に関するアンケート調査」が平成 15 年度後期から実施されています。その結果についてお尋ねします。

(1) 学生による授業評価の妥当性についてどのようにお考えですか。

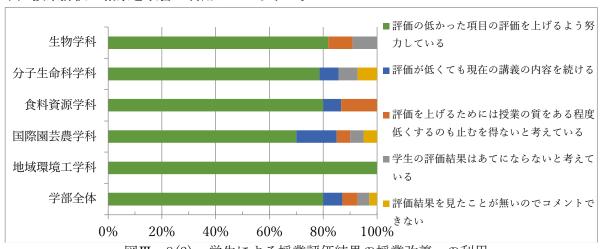


図Ⅲ-8(1). 学生による授業評価アンケートの妥当性

3か年で見ると学部全体では、「かなり妥当」と「ほぼ妥当」の合計は $60\% \rightarrow 65\% \rightarrow 63\%$ と推移した。「やや妥当でない」と「まったく妥当でない」の合計は、 $3\% \rightarrow 1\% \rightarrow 3\%$ と推移した。6 割近い教員は学生による授業評価を概ね妥当だと肯定的に受け止めているが、 34%の教員は「どちらとも言えない」と懐疑的である。「

「かなり妥当」と「ほぼ妥当」の合計の3か年の変化を学科別に見ると、「生物学科」(86%→80%→73%)、「分子生命科学科」(40%→64%→50%)、「食料資源学科」(67%→50%→53%)、「国際園芸農学科」(53%→71%→70%)、「地域環境工学科」(50%→56%→70%)となっている。本年度の「学生による授業評価」への信頼感の度合いは、全ての学科で5割以上だった。

(2) 授業評価の結果を改善に利用していますか。



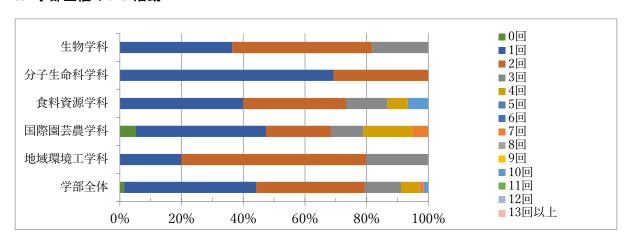
図Ⅲ-8(2). 学生による授業評価結果の授業改善への利用

3か年で見ると、学部全体では「評価の低かった項目の評価を上げるよう努力している」(81% \rightarrow 76% \rightarrow 80%)、「評価が低くても現在の講義の内容を続ける」(5% \rightarrow 6% \rightarrow 7%)、「評価を上げるためには授業の質をある程度低くするのもやむを得ない」(5% \rightarrow 7% \rightarrow 6%)、「学生の評価結果はあてにならない」(3% \rightarrow 4% \rightarrow 4%)、「評価結果を見たことがないのでコメントできない」(6% \rightarrow 4% \rightarrow 3%)となった。約8割の教員が授業評価結果を授業の改善に利用しているが、漸減傾向が見られる。また、間8(1)と同様に「調査結果を見たことが無いのでコメントできない」が3%みられ講義担当前の新任教員の回答と思われる。

設問 9. 本学では教育改善のための各種の研修活動(FD活動)が行われています。ここで言う「FD活動」とは、学部・研究科・学科・コース等で実施されている教育改善に関わる各種研修活動全般を意味します。

(1) この1年間でどのようなFD活動に参加されましたか。参加された回数をお答え下さい。 (参加されなかった場合は0を記入して下さい)。

1. 学部主催のFD活動



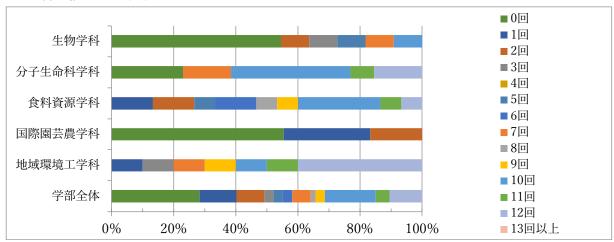
図Ⅲ-9(1) - 1. 学部主催のFD活動への参加回数

学部主催のFD活動への参加回数毎の集計を 3 か年で見ると、学部全体で 0 回 (15% \rightarrow 12% \rightarrow 1%)、1 回 (41% \rightarrow 54% \rightarrow 41%)、2 回 (25% \rightarrow 25% \rightarrow 34%)、3 回 (25% \rightarrow 6% \rightarrow 11%) であった。

1回以上、FD活動に参加した教員は99%を占めている(昨年度85%)。

学部全体の延べ参加回数を 3 か年で見ると 92 回 $\rightarrow 92$ 回 $\rightarrow 134$ 回と推移した。1 教員当たりの参加回数を 3 か年で見ると、学部全体では 1.6 回 $\rightarrow 1.4$ 回 $\rightarrow 1.9$ 回と推移した。

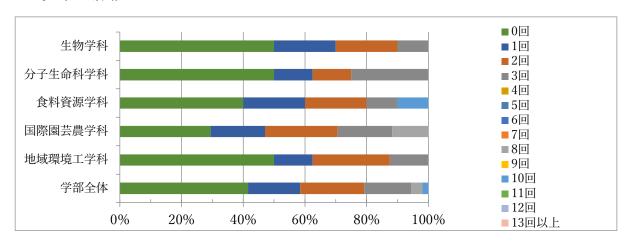
2. 学科主催のFD活動



図Ⅲ-9(1) - 2. 学科主催のFD活動への参加回数

学科主催のFD活動への参加回数は、多い教員で12回で地域環境工学科に割合が高い。学科別の1教員当たりの参加回数を3か年で見ると、「生物学科」(4.4回→4.2回→2.5回)、「分子生命科学科」(8.1回→9.7回→7.6回)、「食料資源学科」(6.8回→8.7回→6.9回)、「国際園芸農学科」(0.9回→3.9回→0.6回)、「地域環境工学科」(8.3回→8.3回→8.9回)、となっている。「地域環境工学科」、「分子生命科学科」が継続して多く、「国際園芸農学科」が少ない。回数の違いは、学科によってFDの位置付けに違いがあるためと考えられる。

3. その他の活動

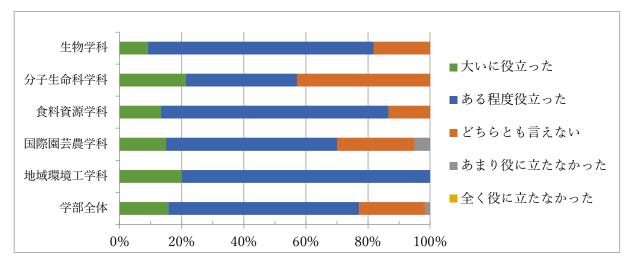


図Ⅲ-9(1)-3. その他の活動への参加回数

その他のFD活動とは、大学全体のFD活動や学外でのFD活動である。参加回数毎に3か年で見ると、学部全体では0回(67%→59%→42%)、1回(14%→33%→17%)、2回(11%→5%→21%)、3回(6%→3%→15%)となっており、今年度は加えて8回が2人、10回が1人いる。

学科別の回答者 1 人当りの平均参加回数を 3 か年で見ると、「生物学科」(1.2 回→0.1 回→0.9 回)、「分子生命科学科」(0 回→0.2 回→1.1 回)、「食料資源学科」(0.7 回→0.6 回→1.9 回)、「国際園芸農学科」(0.5 回→0.8 回→2.1 回)、「地域環境工学科」(0.8 回→0.7 回→1 回)と推移している。約4割の教員が、学部や学科主宰以外のFD活動へは参加していない状況が認められる。

(2) 参加された活動は、教育改善に役立ちましたか。

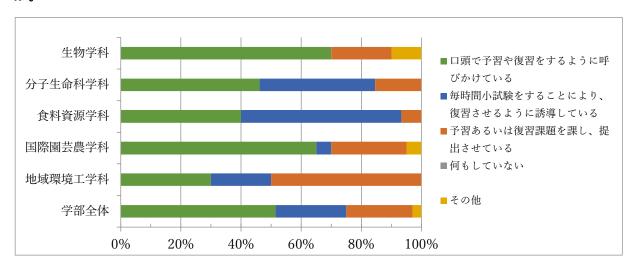


図Ⅲ-9(2).参加したFD活動の教育改善効果

学部全体では 3 か年で見ると、肯定的評価 (「大いに役立った」16%、「ある程度役立った」61%)が $74\% \rightarrow 83\% \rightarrow 77\%$ であった。約 8 割の教員が F D活動の教育改善効果を認めているが、「どちらとも言えない」 (21%) や「あまり役に立たなかった」 (1%) という評価もあった。

学科別に3か年で見ると、肯定的評価は「生物学科」(71%→69%→82%)、「分子生命科学科」(80%→90%→57%)、「食料資源学科」(75%→94%→87%)、「国際園芸農学科」(56%→70%→70%)、「地域環境工学科」(100%→100%→100%)であった。

設問 10. 担当科目において学生の授業時間外の学習を促すためにどのような工夫をしていますか。



図Ⅲ- 10. 学生に対する時間外学習の促進方法

3 か年の推移を見ると、学部全体では、「口頭での予習・復習の呼びかけ」(42%→43%→51%)、「予習・復習課題を課す」(33%→20%→22%)、「小試験で復習を誘導する」(14%→24%→24%)、「何もしていない」(10%→9%→0%)、その他 (0%→4%→3%) であった。約9割近い教員が時間外学習を促している。

「その他」の「自由記述欄」には、以下の記述があった。

【生物学科】

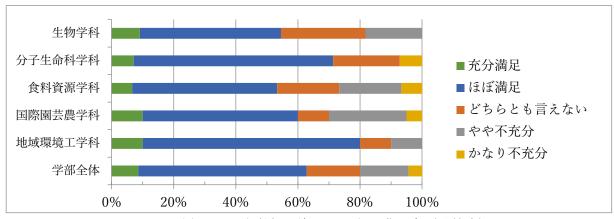
毎時鑑賞試験をすることにより、予習させるように誘導している。

【国際園芸農学科】

・教科書その他の教材を指定して、徹底的に予習復習するよう指導する。

設問 11. (1) 本学部の以下の施設と設備についてどのように感じていますか。該当する欄に〇を書き込んで下さい。

1. 講義室

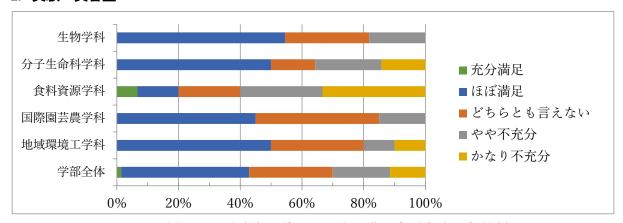


図Ⅲ-11(1)-1. 本学部の施設に対する満足度(講義室)

講義室について 3 か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」(66% \rightarrow 69% \rightarrow 63%)、「どちらとも言えない」(14% \rightarrow 14% \rightarrow 17%)、「やや不充分」(15% \rightarrow 15% \rightarrow 16%)、「かなり不充分」(5% \rightarrow 7% \rightarrow 4%) であった。「充分満足・ほぼ満足」の減少傾向は、昨今の夏の暑さの影響もあると思われる。順次、エアコンの整備が進んでいるが、今後の動向を注視する必要がある。

「充分満足」・「ほぼ満足」を学科別に見ると「生物学科」(57%→73%→55%)、「分子生命科学科」(80%→73%→71%)、「食料資源学科」(67%→56%→53%)、「国際園芸農学科」(58%→67%→60%)、「地域環境工学科」(80%→89%→80%)となった。

2. 実験·実習室

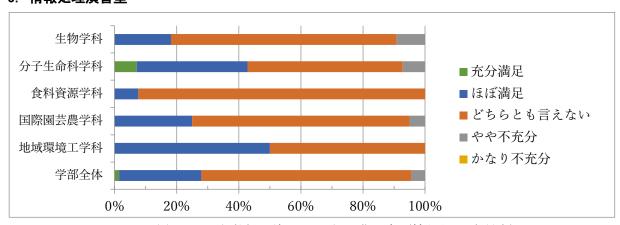


図Ⅲ- 11(1) - 2. 本学部の施設に対する満足度(実験・実習室)

実験・実習室について 3 か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」(54% \rightarrow 48% \rightarrow 43%)、「どちらとも言えない」(25% \rightarrow 23% \rightarrow 27%)、「かなり不充分・やや不充分」(21% \rightarrow 29% \rightarrow 30%)と推移している。このように、半数近い教員(57%)が「満足」していない。

学科別に「充分満足」・「ほぼ満足」を見ると「生物学科」(54%→60%→55%)、「分子生命科学科」(60%→55%→50%)、「食料資源学科」(58%→39%→20%)、「国際園芸農学科」(47%→50%→45%)、「地域環境工学科」(56%→33%→50%)であった。「かなり不充分・やや不充分」は、「生物学科」(23%→13%→18%)、「分子生命科学科」(10%→27%→36%)、「食料資源学科」(42%→56%→60%)、「国際園芸農学科」(11%→20%→15%)、「地域環境工学科」(22%→22%→20%)と推移した。「食料資源学科」に不充分と考える教員が6割合以上と高い。

3. 情報処理演習室



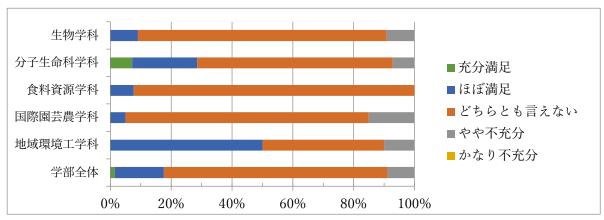
図Ⅲ- 11(1) - 3. 本学部の施設に対する満足度(情報処理演習室)

情報処理演習室について 3 か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」($38\% \rightarrow 40\% \rightarrow 28\%$)、「どちらとも言えない」($56\% \rightarrow 55\% \rightarrow 68\%$)、「かなり不充分・やや不充分」($7\% \rightarrow 4\% \rightarrow 4\%$) と推移した。肯定的評価が減少傾向を示し、「どちらとも言えない」が過半数となった。この結果は、講義等での利用頻度によるものと考えられる。

学科別に「充分満足・ほぼ満足」を見ると「生物学科」(33%→36%→18%)、「分子生命科学科」(60%→60%→43%)、「食料資源学科」(0%→27%→8%)、「国際園芸農学科」(37%→42%→25%)、「地域環境工学科」(60%→44%→50%)と各学科とも概ね低下傾向にある。「かなり不十分・や

や不十分」は、「生物学科」(8%→0%→9%)、「分子生命科学科」(10%→10%→7%)、「食料資源学科」(0%→0%→0%)、「国際園芸農学科」(11%→11%→5%)、「地域環境工学科」(0%→0%→0%)であった。各学科とも「どちらとも言えない」が多くなっており、演習室のあり方について検討する必要がある。R2年度はコロナ状況下で利用がほとんどないと考える。

4. 蔵書室(4階)

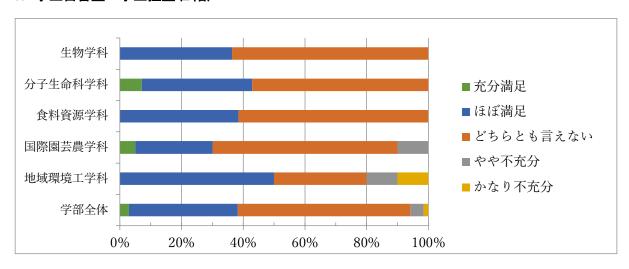


図Ⅲ- 11(1) - 4. 本学部の施設に対する満足度(蔵書室 [4 階])

4階の蔵書室は、平成28年3月に2階の図書閲覧室の書物が移されて新設された。過去3か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」が $20\% \rightarrow 25\% \rightarrow 18\%$ 、「どちらとも言えない」が $64\% \rightarrow 63\% \rightarrow 74\%$ 、「やや不充分」が $8\% \rightarrow 8\% \rightarrow 9\%$ 、「かなり不充分」が $9\% \rightarrow 7\% \rightarrow 0\%$ と推移している。「やや不充分」、「かなり不充分」は9%程度であるが、7割以上の教員が「どちらとも言えない」と答えている。認知度が低く、あまり有効に活用されていない状況が考えられる。

学科別に「充分満足」と「ほぼ満足」の合計を見ると「生物学科」が $8\% \rightarrow 15\% \rightarrow 9\%$ 、「分子生命科学科」が $30\% \rightarrow 22\% \rightarrow 7\%$ 、「食料資源学科」が $0\% \rightarrow 27\% \rightarrow 0\%$ 、「国際園芸農学科」が $28\% \rightarrow 26\% \rightarrow 5\%$ 、「地域環境工学科」が $33\% \rightarrow 33\% \rightarrow 0\%$ と推移している。 R2 年度はコロナ状況下で利用がほとんどないと考える。

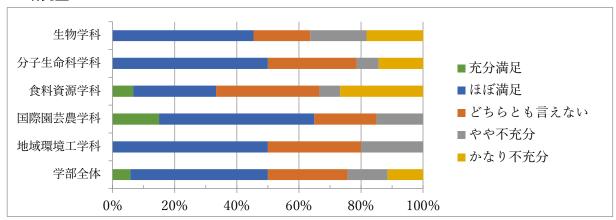
5. 学生自習室・学生控室(2階)



図Ⅲ- 11(1) - 5. 本学部の施設に対する満足度(学生実習室・学生控室 [2階])

2 階の学生自習室・学生控室(2 階) は平成 28 年 3 月より新設された。過去 3 か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」が $52\% \rightarrow 46\% \rightarrow 38\%$ 、「どちらとも言えない」が $42\% \rightarrow 46\% \rightarrow 56\%$ 、「やや不充分」が $5\% \rightarrow 6\% \rightarrow 5\%$ 、「かなり不充分」が $2\% \rightarrow 1\% \rightarrow 1\%$ と推移している。このように、約 4 割の教員が概ね満足しており、R2 年度はコロナ状況下で「どちらとも言えない」の割合が高まったと考える。学科別に「充分満足」と「ほぼ満足」の合計を見ると、「生物学科」が $62\% \rightarrow 64\% \rightarrow 36\%$ 、「分子生命科学科」が $60\% \rightarrow 40\% \rightarrow 43\%$ 、「食料資源学科」が $50\% \rightarrow 47\% \rightarrow 38\%$ 、「国際園芸農学科」が $37\% \rightarrow 42\% \rightarrow 30\%$ 、「地域環境工学科」が $63\% \rightarrow 33\% \rightarrow 50\%$ と推移している。「かなり不充分」と「やや不充分」の合計は、「生物学科」が $0\% \rightarrow 0\% \rightarrow 0\%$ 、「分子生命科学科」が $10\% \rightarrow 10\% \rightarrow 10\% \rightarrow 0\%$ 、「食料資源学科」が $10\% \rightarrow 0\% \rightarrow 0\%$ 、「食料資源学科」が $10\% \rightarrow 10\% \rightarrow$

6. 研究室



図Ⅲ- 11(1) - 6. 本学部の施設に対する満足度(研究室)

研究室について 3 か年で見ると、学部全体では「充分満足・ほぼ満足」(51% \rightarrow 52% \rightarrow 50%)、「どちらとも言えない」(28% \rightarrow 23% \rightarrow 26%)、「かなり不充分・やや不充分」(22% \rightarrow 25% \rightarrow 24%)と推移した。満足している教員が 5 割を維持しているが、不充分と感じている教員も 2 割程度いる状況である。

学科別に「充分満足・ほぼ満足」を見ると、「生物学科」($21\% \rightarrow 36\% \rightarrow 45\%$)、「分子生命科学科」($70\% \rightarrow 60\% \rightarrow 50\%$)、「食料資源学科」($50\% \rightarrow 44\% \rightarrow 33\%$)、「国際園芸農学科」($58\% \rightarrow 65\% \rightarrow 65\%$)「地域環境工学科」($60\% \rightarrow 56\% \rightarrow 50\%$) である。「かなり不充分・やや不充分」は、「生物学科」($57\% \rightarrow 29\% \rightarrow 36\%$)、「分子生命科学科」($10\% \rightarrow 10\% \rightarrow 21\%$)、「食料資源学科」($25\% \rightarrow 33\% \rightarrow 33\%$)、「国際園芸農学科」($5\% \rightarrow 30\% \rightarrow 15\%$)、「地域環境工学科」($10\% \rightarrow 11\% \rightarrow 20\%$)と推移した。

(2) 上記で「4. やや不充分」と「5. かなり不充分」を選択した場合、その理由を次の欄に具体的に書いて下さい。

【生物学科】

・部屋の広さに対してプロジェクターが小さい、もしくはモニターが少ない講義室がいくつかあ る。

- ・スペースの削減が促進されているため。農学部の情報処理室がなくなったため。エアコンのない講義室があるため。
- ・スクリーンのシミ、汚れが目立つ。研究室は学生が増えて手狭にもなり、また秘匿性が高い情報をハンドルする機会も増えてきたので学生と一緒の居室がきつくなってきた。
- ・実験のためのスペース、物品保管のためのスペース、学生の学習スペースが絶対的に足りない。

【分子生命科学科】

- ・実験室にエアコンがないため。学生実験だけでなく高校生対象のオープンキャンパス等にも支 障があるため早急な改善が望まれる。情報処理演習室はとても狭く、通路から離れた席に座って いる学生まで目が届きにくいため。
- ・実験設備が足りない
- ・スペースが狭いこと。全員がそろうと三密を回避できない。交代制など取らざるを得なくなる。
- ・機器の老朽化が激しい
- ・講義室:プロジェクターと黒板の併用ができません。 実験・実習室:もっと関係学科(学科というより研究分野のようにも思います。学科間のやり取りがあると、これはこの学科、あれはこの学科、機器だけでなく場所の話まで挙がる顛末で、結局はめんどくさい、やりたくないということになると思います)で話し合い、備品を常設した機能性のある実験・実習室にしたほうが良いと思います。普段も卒論生・修論生がもっと活用できる機器を集約させるなど、スペースだけでなく、機器を設置することで実習生からの見た目(印象)もよくなると思います。また実習の時間の前に卒論・修論生が作業をしていたりすると、下級生の意識向上にも貢献してくれたりするように思います。 研究室:近いユニットが機器を共有できる工夫が必要ではないでしょうか(研究室の移動)?冷蔵・冷凍庫のシェアにより光熱費削減につながります。試薬の重複も避けられる可能性が高く、研究経費の節約にもなります。機器の更新も各研究室で行うのではなく、より計画的に実施できると思います。
- ・受講生の人数分の台数の顕微鏡を備えたい。

【食料資源科学科】

- 講義室:コロナによる収容人員不足;実験・実習室:ガラス器具がほぼ無い
- ・学生実験室の実験器具が十分でない、研究室が狭い
- ・実習室に空調は必須であると思います。夏に窓を開けて行う必要があり、微生物等の管理の面においても、学生の体調面の維持においても非常に問題だと思っています。早急な改善をお願いしたいです。
- ・学生用研究室と実験室がかなり離れており、大変利用しづらい
- ・ホワイトボードも準備してもらいたい.プロジェクターとともに利用したいから

【国際園芸農学科】

- ・蔵書数やスペースの面で充分ではない気がします
- ・実験機器がたくさんあるため居室スペースが狭くなっている。研究室で学生がデスクワークで きるスペースが確保できない
- ・広い講義室には後方にモニターを設置してほしい。設置してある部屋もあるが、ない部屋は前

のプロジェクターだけでは不十分と思われる。

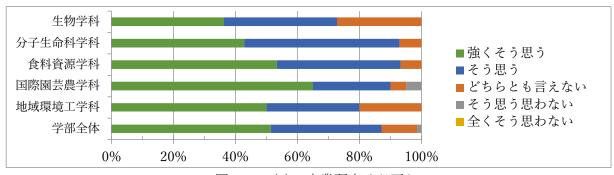
- ・情報機器の不具合が多いことやカーテンなどの設備が老朽化していること
- ・①プロジェクタが古くて自分のノートパソコンと接続できない場合がある。②コース教員の頻繁な異動に伴い、当初の学生割り当て(1 学年教員 1 人当たり 3 名)を超えてしまい、ゼミ室が学生数に対して狭くなっている。
- ・夏場の空調設備が不十分

【地域環境科学科】

- ・数や施設整備が不足しているから。
- ・アクセスの悪さ。利便性。

設問 12. (1) 卒業研究は必要であると思いますか。

1. 強くそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない 5. 全くそう思わない



図Ⅲ- 12(1). 卒業研究は必要か

3 か年で見ると、学部全体で、「強くそう思う・そう思う」(92%→92%→87%)、「どちらとも言えない」(5%→7%→11%)、「そう思わない・全くそう思わない」(3%→1%→2%)となった。卒業研究は必要と考える教員の割合は約9割となっている。

学科別に見ると、「強くそう思う・そう思う」は、「生物学科」(93%→80%→73%)、「分子生命科学科」(90%→100%→93%)、「食料資源学科」(100%→100%→93%)、「国際園芸農学科」(84%→90%→90%)、「地域環境工学科」(100%→89%→80%)と推移した。

(2) 上記のように回答した理由を下欄に分りやすく記入して下さい。

【生物学科】

- ・卒業研究をする1年間での成長が著しい学生が大半だと思うから。
- ・主体的かつ論理的に一通りの物事を進めることを学ぶため
- ・物事を調べる、まとめる、人に伝える大事な訓練だと考えているから
- ・大学での学習の総合的な成果として不可欠だから
- ・卒業研究に適さない学生が増えてはいるものの、全体としては学生の満足度が高いこと、教育 効果高いことが示されている。必修を継続するかについては議論が必要であるが、やめる性質と は言えない。
- ・発達障害や学習障害のある人が入学試験をクリアして入学してくるため、指導が困難なことが

ままある為。

・学生のレベルややる気、都合(就活、公務員試験、教育実習など)により卒業研究の遂行や十分な指導が困難なケースがある。画一的な基準(到達目標や実施方法)を設けず、学生個々に応じて対応した方が学生・教員双方にとって有益な場合もあると強く感じる。

【分子生命科学科】

- ・能動的に自分の手を動かして学習することは特に重要であるため
- もっとも効果的なアクティブラーニングであると思っている。
- ・希望しない学生には違う道があっても良いと思う。時代が変わっても研究には一定の厳しさが ある。無理にやらせると耐えられない学生が多くなった。問題が生じやすい。
- ・研究や調査活動の経験という意味では大事だが、うまく対応できない学生もいるので、強制力 は程々が良いようにも感じる。
- ・1年間、一つのことに打ち込み、問題解決を経験することは重要だ。
- ・自ら考え、計画し、仕事をしていく性格のものだから。
- ・教育の質の保証を求められている中で、これまで学習してきたことを基にして課題解決を目指し、調査や仮説の検証を実践することが必要でないとは思えません。研究成果を出すために学生に卒論という単位で研究に従事させる意図もありますが、調査する、まとめる、伝えるスキルの向上に取り組む機会、またそれらのスキルの重要性に気付かせる機会を提供しないのは、社会に対して責任を果たしている大学の教育といえるのか?と疑問を感じます。
- 研究へのモチベーションになる。
- ・カリキュラムをの集大成が卒業研究であるので理系の大学から卒業研究をなくすのは自滅行為。

【食料資源学科】

- ・課題解決、探求力、ならびに要約する力が身につくため。
- ・思考力及び調査力が必要とされ、さらに周りとの連携が必要とされ、大学生としての能力が最 も鍛えられるから
- 一部にやる気のない学生がいるため
- ・座学とは異なる、自律性が求められるから。
- ・卒業研究というしばりがあるから学生が辛うじて実験するが、それがなければ就活で終わって しまう。
- ・理系の国立大学だから
- ・講義・実験・実習などに比べ教育効果が高いと思われるから。
- ・決められたこと以外の物事に取り組む機会であり、人生で何度もあることではないから
- ・理系の学部として必要な教育であると思うから。
- ・卒業研究を通して、論理的思考力、プレゼンテーション能力、レポートの書き方などが学べる ため。他の講義ではこのような点を教授することは難しい。
- ・通常の座学や実習では学ぶことの出来ないような答えの無い答えの探求、問題解決能力の涵養、 論理的および批判的思考の訓練の機会となっており、これらは社会に出てからの生きる術の獲 得の足がかりになると思うから
- ・積極的に教育を受けた内容を深めるため

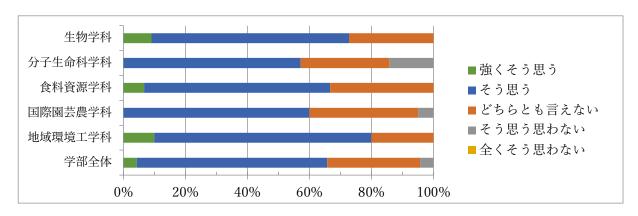
【国際園芸農学科】

- ・授業で得られない知識、技術などが多い。
- ・計画をまとめて、実行して、結果をまとめる、という一連の作業の経験は卒業してからも役に 立つと思うから
- ・物事を論理的にまとめる力をつけることができる
- ・実験等を通じて教わることが多いため
- ・自覚と責任を持って取り組む大事なトレーニングだと思っているため
- ・研究をさせるために必要。卒業研究をなくすとバイトや就活等でほとんど研究室に来なくなる と思われる。
- ・卒業研究を行う中で、研究技術だけではなく、社会人として必要な忍耐力やコミュニケーション力を身につけることができるから
- ・一般社会で常に求められる、「何らかの行動を意思決定する力」を身につけるために必要
- ・社会で要求される作業のスキルや取り組み方などを学ぶ上で最も効果的と考えられるから。た だ、担当する教員としては、卒業研究遂行にかかる経費の負担や学生のモチベーションや知識の レベルが十分でないため、負担は極めて過重になってきている。
- ・情報収集能力、思考力を鍛える貴重な機会であり、卒業後も役立つものと考えられる。
- ・学生によっては教育効果が上がっていない。
- ・教員一人で学生を10人以上担当し、卒業研究を与えることが出来ない私学と差別化するため。また、卒業研究の過程で学生が成長するのが感じられるから。
- ・まだ2回しか卒業研究を指導したことがないのではっきりしたことは言えないが、毎年学生の モチベーションが下がっている印象を受ける。また、研究室選択に当たって、教員との話し合い の機会を持たないまま研究室を決めてしまう学生がおり、そのような学生に卒業論文の指導を 行うことに困難を感じることが多い。

【地域環境工学科】

- ・何か一つでもやり遂げた事柄を持って卒業した方が良いと思うし、ゼミ内の先輩・後輩の繋が りが強くなる。また、就職活動で卒論内容について面接官に聞かれる。
- ・目的を持って個人で研究を進めるので、学生の能力向上に役立つ。
- ・大学の学びの集大成として総合的な力がつくので教育効果は高いと思う
- ・適性にの個人差が大きくなり、一律の基準の卒論レベルが維持できない
- 各科目で得た知識を総合化するために必要と考えています。

設問 13. (1) あなたの学科の大多数の卒業生は、本学部での教育により大学卒業生に相応の知識と学力を身に付けたと思いますか。



図Ⅲ-13(1). 学部卒業生に相応の知識と学力を身に付けたか

3か年で見ると学部全体で、「強くそう思う・そう思う」(75% \rightarrow 74% \rightarrow 66%)、「どちらとも言えない」(21% \rightarrow 24% \rightarrow 30%)、「全くそう思わない・そう思わない」(3% \rightarrow 1% \rightarrow 4%) であった。約7割の教員が、「卒業生は知識と学力を身に付けた」と考えている。

学科別に3か年で「強くそう思う・そう思う」を見ると、「生物学科」(77%→67%→73%)、「分子生命科学科」(80%→64%→57%)、「食料資源学科」(82%→78%→67%)、「国際園芸農学科」(58%→71%→60%)、「地域環境工学科」(90%→100%→80%)、と推移している。このように、学部生の知識と学力が身についたと感じる度合いは、各学科で約6割以上と高い。「全くそうは思わない・そう思わない」は、「生物学科」(0%→0%→0%)、「分子生命科学科」(0%→0%→14%)、「食料資源学科」(2%→6%→0%)、「国際園芸農学科」2%→0%→5%)、「地域環境工学科」(0%→0%→0%)と推移した。

- (2) 上記で「4. そう思わない」と「5. 全くそう思わない」を選択した場合、その理由は何ですか。以下の中から選んで下さい。
 - 1. 学生に意欲がない 2. 学生の基礎学力不足 3. 講義内容が高度過ぎた
 - 4. 教員に問題 5. その他()

表Ⅲ-13(2). 身についていない理由(学部)

理由	回答数(学科)
学生に意欲がない	1(国際 1)
学生の基礎学力不足	2 (分子 1、国際 1)
講義内容が高度過ぎた	0
教員に問題	0
その他	2 (分子1、国際1)

3 か年で見ると、「学生の基礎学力不足」(0 人→0 人→1 人)、「学生の意欲がない」(2 人→0 人→2 人)、「教員に問題」(1 人→0 人→0 人)、「講義内容が高度過ぎた」(0 人→0 人→0 人) と推移した。

「その他」の「自由記述欄」には、以下の記述があった。

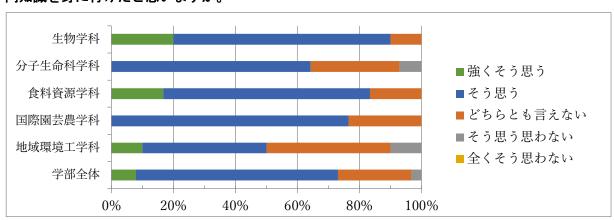
【分子生命科学科】

・今、そしてこれからの学生に対して必要なことは何なのか。研究活動のレベルを維持するために必要なことは何なのか。メンタルケアが本当に必要な学生と、そうではないのにやる気のない学生の扱いをどのように分けていき、教育・研究のレベルを維持できるのか。これらに必要な体制の改革は何なのか。オープンに議論することも無く、ひとまず先送り、今後の課題、面倒だから変えたくない、といった教員側の意識が問題の一つではないかと思います。そのような姿勢が、普段の教育や研究にも影響し、学生の意識向上につながらない、負のスパイラルにつながっているように思います。

【国際園芸農学科】

・留年させる学生を少なくさせるという忖度がはたらくため中途半端

設問 14. (1) あなたの専攻の大多数の修了生は、本研究科での教育により大学院修了程度の専門知識を身に付けたと思いますか。



図Ⅲ- 14(1). 大学院修了生は相応の専門知識を身に付けたか

3 か年で見ると研究科全体で「強くそう思う・そう思う」(75%→72%→73%)、「どちらとも言えない」(24%→28%→24%)、「全くそう思わない・そう思わない」(2%→0%→3%)であった。コース別に 3 か年で見ると、「強くそう思う・そう思う」は、「生物学コース」(85%→73%→90%)、「分子生命科学コース」(80%→73%→64%)、「生物資源学コース」(82%→88%→83%)、「園芸農学コース」(68%→57%→76%)、「地域環境工学コース」(60%→78%→50%)と推移した。

- (2) 上記で「4. そう思わない」と「5. 全くそう思わない」を選択した場合、その理由は何ですか. 以下の中から選んで下さい。
 - 1. 学生に意欲がない 2. 学生の基礎学力不足 3. 講義内容が高度過ぎた
- 4. 教員に問題 5. その他 ()

表Ⅲ- 14(2). 身についていない理由(研究科)

理 由	回答数(コース)
学生に意欲がない	0
学生の基礎学力不足	0

講義内容が高度過ぎた	0
教員に問題	0
その他	0

本年度は、「4. そう思わない」と「5. 全くそう思わない」を選択した教員がいなかった。

Ⅳ. 教員対象授業アンケート(学部授業および研究科授業)

1. アンケート調査内容

調査目的:農学生命科学部および研究科の教育内容ならびに方法の改善に役立てるため、学部および研究科の授業に関する教員の意識について調査することを目的にアンケート調査を実施した。

調査方法:電子メールで教員に本アンケートについて周知し、Forms で回答を依頼した。なお、アンケートは個人を特定できない設定にして行われた。

調査対象:令和3年2月に学部、研究科および生物共生教育研究センター、白神自然環境研 究センターに所属する教員とした。

調査期間:令和3年2月1日~3月31日

教員数: 79名 有効回答者数:70名 (回答率 88.6%)

調査項目:設問は以下の通りである。

「学部授業に関する調査』

ご担当の**学部専門教育科目**の中から最も重要と考える**1科目**についてお答え下さい。なお、学生実験、実習、演習は対象から除きます。また、本年度に授業を開講しなかった場合は、設問 2 以降回答の必要はありません。

設問 1. あなたが所属する学科を選択して下さい^{注1)}。

- 1. 生物学科 2. 分子生命科学科 3. 食料資源学科 4. 国際園芸農学科
- 5. 地域環境工学科
 - ^{注1)} 白神自然環境研究センターの先生は1を、生物共生教育研究センターの先生は4をお 選び下さい。
- 設問2. 授業の予定回数と実施回数について記入して下さい。
 - (1) 予定回数(2単位15回とし、集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は90分間を1回に換算して下さい。オムニバス形式の科目を除きます)

() 回

(2) 実施回数(集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は90分間を1回に換算して下さい。オムニバス形式の科目を除きます)

() 回

- (3) 今年度、担当されていない方は、その旨を記載下さい。その場合は、以下の設問3~7 の回答は不要です。設問8~10についてはご回答下さい。(
- 設問3. 休講した場合の代償措置はどのようにしましたか。
 - 1. 休講回数分を補講した 2. 一部補講した 3. 他の措置()
 - 4. 何もしなかった 5. 休講していない
- 設問 4. (1) シラバス記載の内容と実際の授業内容との一致の程度について答えて下さい。
 - 1. シラバスに記載した内容に一致させて講義を行った
 - 2. シラバスに記載した内容を意識し、できるだけ沿うように講義した

- 3. シラバスに記載した内容にはとらわれないで講義した
 - (2) 上記で、「3.」と回答した方はその理由を下欄に具体的に記入して下さい。
- 設問 5. (1) 本年度のシラバスの記載内容は昨年度と同一でしたか。
 - 1. 昨年度と同一であった 2. 一部変更した 3. 大幅に変更した
- (2) 上記で、「2.」または「3.」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。
- (3) 上記の場合で、シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。
 - 1. 教育効果が向上した 2. 教育効果は変わらなかった 3. 教育効果は低下した
 - 4. 分からない
- (4) 上記の設問(3)で「1」と回答した方は、その具体的な事例を教えて下さい。
- 設問 6. 学部の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。
 - 1. 大多数の学生のレベルを意識して展開した
 - 2. より専門性を重視して展開した
 - 3. その他(
- 設問 7. 学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい(複数回答可)。
 - 1. 視聴覚教材(ビデオや DVD 教材など)の利用
 - 2. 画像データ (OHP、スライドプロジェクター、プレゼンテーションソフトなど) の提示
 - 3. 授業の合間に質疑や討論の時間を設けた
 - 4. 小グループによる課題学習の発表や討論の場を設けた
 - 5. 宿題 (レポートを含む) を課した
 - 6. その他(
- 設問 8. 成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが、そのような場合への対応として、どのような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。
- 設問 9. 教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために、このアンケートに追加した方がよい とお考えの項目がありましたらご記入下さい。
- 設問 10. このアンケート調査の実施や内容について他にご意見がありましたらご記入下さい。

[研究科授業に関する調査]

ご担当の研究科授業科目の中から最も重要と考える1科目についてお答え下さい。なお、学生 実験、実習、演習は対象から除きます。また、本年度に授業を開講しなかった場合は、設問2以 降回答の必要はありません。

設問 1. あなたが所属するコースを選択して下さい。

- 1. 生物学コース 2. 分子生命科学コース 3. 生物資源学コース 4. 園芸農学コース
- 5. 地域環境工学コース
- ^{注1)} 地域共創科学研究科の先生は回答不要です。

- 設問2. 授業の予定回数と実施回数を選択して下さい。
 - ① 予定回数 (1単位8回とし、集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は90分間を1回に換算して下さい。オムニバス形式の科目は除きます。)
 - 1.8回 2.7回 3.6回 4.5回以下 5.担当していない
 - ② 実施回数(集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は90分間を1回に換算して下さい。オムニバス形式の科目は除きます。)
 - 1.8回 2.7回 3.6回 4.5回以下 5.担当していない
 - *今年度、担当されていない方は、以下の設問 3~7 の回答は不要です。設問 8~10 についてはご回答下さい。
- 設問3. 休講した場合の代償措置はどのようにしましたか。
 - 1. 休講回数分を補講した 2. 一部補講した 3. 他の措置()
 - 4. 何もしなかった 5. 休講していない

設問 4.

- ① シラバス記載の内容と実際の授業内容との一致の程度について答えて下さい。
 - 1. シラバスに記載した内容に一致させて講義を行った
 - 2. シラバスに記載した内容を意識し、できるだけ沿うように講義した
 - 3. シラバスに記載した内容にはとらわれないで講義した
- ② 上記で、「3.」と回答した方はその理由を下欄に具体的に記入して下さい。 設問 5.
 - (1) 本年度のシラバスの記載内容は昨年度と同一でしたか。
 - 1. 昨年度と同一であった 2. 一部変更した 3. 大幅に変更した
 - (2)上記で、「2.」または「3.」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。
 - (3) 上記の場合で、シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。
 - 1. 教育効果が向上した 2. 教育効果は変わらなかった 3. 教育効果は低下した
 - 4. 分からない
 - (4) 上記の設問(3)で「1」と回答した方は、その具体的な事例を教えて下さい。
- 設問 6. 大学院の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。
 - 1. 大多数の学生のレベルを意識して展開した
 - 2. より専門性を重視して展開した
 - 3. その他(
- 設問7. 学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい(複数回答可)。
 - 1. 視聴覚教材(ビデオや DVD 教材など)の利用
 - 2. 画像データ (OHP、スライドプロジェクター、プレゼンテーションソフトなど) の提示
 - 3. 授業の合間に質疑や討論の時間を設けた
 - 4. 小グループによる課題学習の発表や討論の場を設けた
 - 5. 宿題 (レポートを含む) を課した
 - 6. 実習形式の授業を行った
 - 7. その他()
- 設問 8. 成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが、そのような場合への対応として、どの

ような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。

設問 9. 教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために、このアンケートに追加した方がよいとお考えの項目がありましたらご記入下さい。

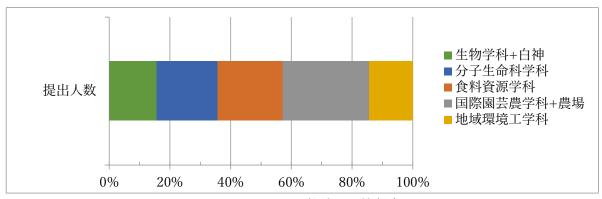
設問10.このアンケート調査の実施や内容についてご意見がありましたらご記入下さい。

2. 学部授業に関する調査結果

設問 1. あなたが所属する学科を選択して下さい

表IV-2-1. 回答率

	教員数 (人)	回答数(人)	回答率(%)
生物学科(白神含む)	14	11	78
分子生命科学科	14	14	100
食料資源学科	20	15	75
国際園芸農学科 (農場含む)	21	20	95
地域環境工学科	10	10	100
学部全体	79	70	88

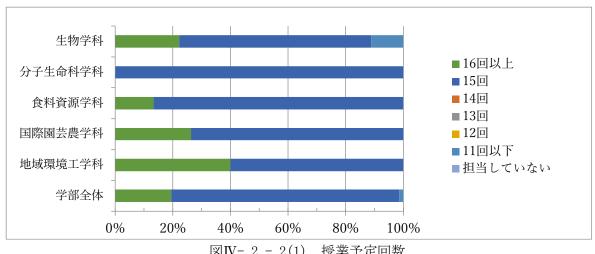


図IV-2-1. 学科別回答割合

学部全体の回答率は84%で過去2年(平成30年度:76%, 令和元年度:84%) と比して上昇した。前年度までとは異なり、今年度からオンラインでの回答になったため、回答への負担が小さくなったことが一因かもしれない。学科別では分子生命科学科と食料資源学科が70%代と比較的低い傾向にある。一方、国際園芸農学科は95%、及び分子生命科学科と地域環境工学科は100%と高い値であった。

設問 2. 授業の予定回数と実施回数について記入して下さい。

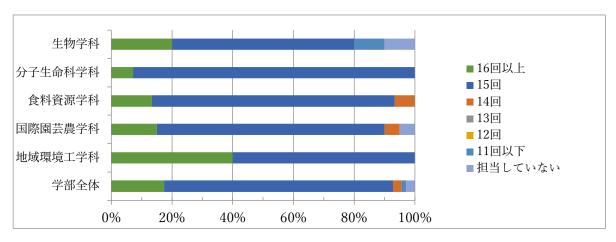
(1) 予定回数(2単位15回とし、集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は90分間を1回に換算して下さい。オムニバス形式の科目を除きます)



図IV-2-2(1). 授業予定回数

生物学科1名に11回以下の回答があった以外は、すべての回答が15回以上である。また16回 以上は19.4%と昨年度20.2%と同水準であった。

(2) 実施回数(集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は90分間を1回に換算して 下さい。オムニバス形式の科目を除きます)



図IV-2-2(2). 授業実施回数

学部全体回答数 67 である。実施回数 15 回以上が今年度 95.5%と過去 2 年間と同水準に高かっ た(平成30年度:90%, 令和元年度:94%)。また,16回以上実施との回答は、今年度17%であり 令和元年度の 20%、平成 30 年度の 21% と比べて若干減少した (平成 29 年度:16%)。担当してい ないとの回答は2名あり、新任教員だと思われる。一方で、14回以下との回答は3名のみであっ た。そのうちの1名は予定回数の通り、11回以下実施されている。14回実施は、食料資源学科お よび国際園芸農学科でそれぞれ1名であった。

(3) 今年度、担当されていない方は、その旨を記載下さい。 上述の通り、2名が該当した。

設問 3. 休講した場合の代償措置はどのようにしましたか。

図IV-2-3. 休講の代償措置

80%

100%

60%

学部全体の回答数は 61 である。休講したのは回答者全体の 36%の教員であり、そのうち休講への対応がなかった教員は生物学科と分子生命科学科にそれぞれ 1 名ずついた。休講回数分の補講措置が取られたのは,該当者の 54%であり、昨年度の 54%、一昨年度の 52%と同水準であった。一方、「一部補講した」・「他の措置」も併せなんらかの措置を取ったとの回答は 90%であり、平成 30 年度 88%、令和元年度 92%と同水準と言える。学科別では,地域環境工学科は昨年度と同様に「休講回数分補講した」が 100%であった。

「講じた代替措置」については以下の記述があった。

20%

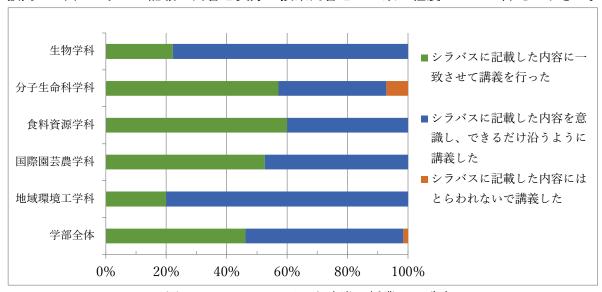
40%

- ・補講および宿題(生物学科1件、食料資源学科1件)
- ・レポート(食料資源学科1件)

0%

・課題(国際園芸農学科1件)





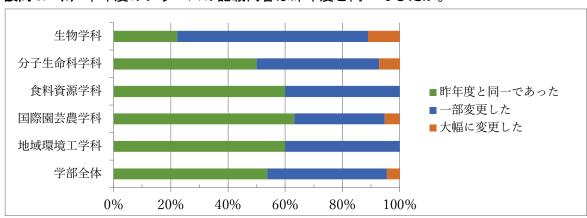
図IV-2-4. シラバスと実際の授業の一致度

全体回答数は67である。学部全体で、「シラバスに一致させた講義を行った」が、46%であり、

平成30年度の49%, 令和元年度の52%と比して若干減少した。「記載した内容にはとらわれないで講義した」の回答は分子生命科学科に1名あった。しかし概して、シラバスを重視して授業が行われていると言える。学科別では、「シラバスに一致させた講義を行った」は、分子生命科学科、食料資源学科、国際園芸科学科で比較的高かった。

(2) 上記で、「3. 内容にはとらわれないで講義した。」と回答した方はその理由を下欄に具体的に記入して下さい。

シラバスなど無意味(分子生命科学科1名)



設問 5. (1) 本年度のシラバスの記載内容は昨年度と同一でしたか。

図IV-2-5(1). 昨年度のシラバスとの比較

全体回答数は 67 である。学部全体では、「一部変更した」が 41%、「大幅に変更した」が 4% であり、「昨年度と同一」(53%) の傾向がある。しかしながら、「昨年度と同一」を選んだのは、 平成 30 年度 75%、令和元年度 67%であることから、本年度は過去 2年よりも変更されるケース が多かった。メディア授業に対応するために行われたと推測される。学科別では、生物学科が変更された割合が高かった(77%)。

(2) 上記で、「2. 一部変更した。」または「3. 大幅に変更した。」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。

【生物学科】

- ・メディア授業となったため。(2名)
- ・昨年度に行った授業の内容を振り返り、実際に行った形に近くなるように記述を少しずつ改めている。
- ・担当者が変更されたため。
- ・新型コロナ対応。
- ・より具体的な記述になるように変更した。

【分子生命科学科】

- ・今年度新たに講義を担当したため。
- ・コロナによる遠隔授業のため、授業の進行が例年と異なった。
- メディア授業になったから。
- ・委員に指摘を受けたから。
- ・最新の情報を反映させるため。昨年度の学生の理解が十分ではなかったところを厚く、十分で あったところをやや薄くしたため。

【食料資源学科】

- コロナ対応のため。
- ・講義内容をアップデートしたため。(2名)
- ・進行状況に合わせて。
- ・昨年度でシラバスどおりに実行できない部分があり、今年度はシラバスどおりに進められるようにするため。
- 向上させるため。

【国際園芸農学科】

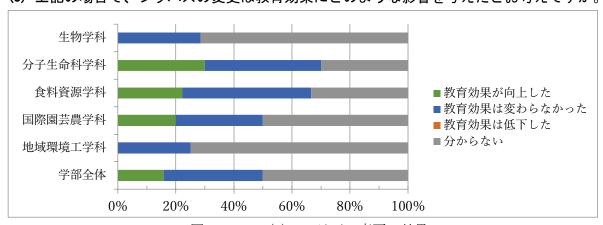
- ・前年度の問題点を改善したため。
- ・授業の目標達成のため、改善を加えた。
- ・メディア授業に対応するため、記入事項に変更が必要になった。(2名)
- ・教科書を変更したから。大学の方針に沿わない記載を指摘され変更したから。
- 新任だったため。

【地域環境工学科】

- ・成績評価方法を変更したため。
- より分かりやすくするため。
- ・社会情勢の変化に対応するため。

メディア授業に沿った記載にするための変更や講義のアップデートが主な理由であった。

(3) 上記の場合で、シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。



図IV-2-5(3). シラバス変更の効果

全回答数は44である。学部全体では、教育効果は「変わらなかった」、「分からない」を合わせて令和元年度の77%と比して若干上昇し84%であり(平成30年度:73%)、「教育効果が向上した」に比べ回答割合は大きかった。学科別では、分子生命科学科で3名、食料資源学科と地域環境工学科でそれぞれ2名、「教育効果が向上した」と回答があった。この具体的内容については(4)で述べる。総じて、シラバス変更の教育効果への影響は明瞭でない場合が多いようである。

(4) 上記の設問3で「1. 教育効果が向上した」と回答した方は、その具体的な事例を教えてください。

【分子生命科学科】

- ・項目を整理して減らした結果、学生の基礎的な理解が深まった。
- ・毎回、課題を与えることになったが、これにより復習時間をしっかりとることが出来た。

【食料資源学科】

- ・学生からの質問が多くなり、わかっていないところを再説明し理解を促した。
- 内容を深めることができた。

【国際園芸科学科】

- ・講義を熱心に聞く学生が増えた気がした。
- ・授業内容に興味を示して、質問する学生が増えた。

生物学科 分子生命科学科 ■大多数の学生のレベルを意 識して展開した 食料資源学科 ■より専門性を重視して展開 した 国際園芸農学科 ■その他 地域環境工学科 学部全体 0% 20% 40% 60% 80% 100%

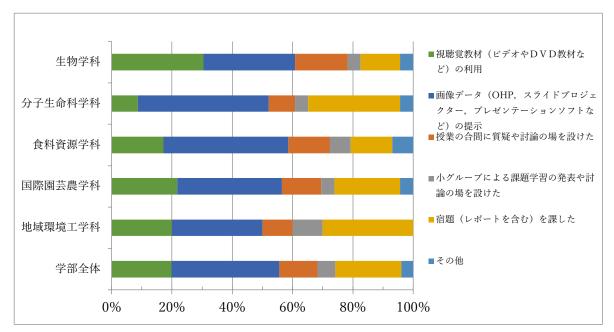
設問 6. 学部の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。

図IV-2-6. 講義展開の考え方

全回答数は 66 である。学部全体では、77%が学生のレベルを意識した講義を行っており、令和元年度の 90%より減少した(平成 30 年度 84%)。学科別では、食料資源学科が比較的専門性を重視して展開しているとの回答(5 名)であった。

「その他」との回答の理由は「講義により伝えるべき点が学生に伝わること(生物学科)」であった。

設問 7. 学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい(複数回答可)。



図IV-2-7. 授業の工夫

回答は生物学科、分子生命科学科、食料資源学科、国際園芸農学科、地域環境工学科からそれぞれ、9名、12名、14名、19名、10名から得られた。全体では、「画像データの呈示」がほかの授業の工夫と比べると過去2年度と同様に最も多く、84%の回答者が選択した。続いて「宿題を課した」を選んだ回答者は51%いた。これは科目の単位取得が、授業受講だけでなく自己学習を含めたものであることから、授業外の学習を重視した取り組みが行われていることを表している。「その他」について、以下の回答があった。

【生物学科】

- ・具体的な関連事象を紹介した。
- ・ほぼ毎時間プリント資料を提供した。

【分子生命科学科】

・Forms を使った小テスト。

【食料資源学科】

- ・資料に空欄を設けて、授業中に指名して答えさせる。
- ・自己学修の進捗度をチェックするため、毎回の授業開始時に前回の内容に関する小テストを実施した。

【国際園芸農学科】

・授業の内容の中で、見解の分かれる部分について、話題提起して、学生自身に考えてもらう機 会を設けた。 ・授業の感想や質問などを書いた紙を提出してもらい、その内容について説明を毎回授業開始時に説明するようにした。

設問 8. 成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが、そのような場合への対応として、どのような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。

【生物学科】

- 知りたい人には情報を開示することを周知している。
- ・個別に納得が得られるまで説明を行っている。
- ・根拠をできるだけ丁寧に説明します。
- ・丁寧に説明する。
- 説明する。
- ・問い合わせを受けたことはないが、問い合わせがあれば対応し、妥当な疑義であれば成績評価 を変更する。
- ・近年はいませんが、答案を一緒に見て一つ一つ納得してもらう。

【分子生命科学科】

- ・ 例年であれば、希望者にテストを返却している。 今年はオンラインであったため返却はしていない。
- ・評価項目、評価基準を具体的に説明します。
- ・出頭して質問すれば回答できる。
- ・求められた場合は、答案を返却する。
- ・試験の答案は返却する。素点を本人に見せる。
- 説明をする。
- ・試験の採点前に採点基準についてのメモを作成する。
- 納得するまで説明する。
- ・そのような学生はこれまでいなかった。

【食料資源学科】

- ・納得するまで対応している。
- ・小テストとテストについて評価の理由を対面で受講生が納得するまで説明する。
- ・点数を示し、間違っている点を指摘。
- ・根拠を提示する。
- ・開示を望む学生には、模範解答例の開示と点数の根拠を説明しています。
- ・答案を直接学生に見せて説明する。
- ・採点結果の開示。
- そのような学生はいない。
- ・初回に成績評価について説明をしているため、特に評価について疑義を受けたことはない。
- ・答案用紙の返却と成績疑義を持った場合の連絡方法を講義中に説明している。
- ・問い合わせがあった場合は評価の根拠を説明する。評価基準についてはルーブリック等により

客観性や明瞭性を担保し、必要に応じて評価基準を明示する。

・解答用紙採点をしたものをみせる。

【国際園芸農学科】

- ・まず初回に採点基準を詳細に説明。疑義のある場合は個別に対応し、説明する。
- ・評価基準、点数を公表すること、問い合わせがあれば、具体的に説明します。
- 話を聞く。
- ・試験の返却と解答例を提示している。
- ・成績評価に対し、疑義を持った学生はいなかった。
- ・評価の根拠を示せるように心がけている。
- ・疑義を持っている点について十分に説明する。
- ・成績の評価方法を講義中に詳細に説明し、全員の評価を厳格に点数化しておくことで対応する。
- ・シラバスの記載と事前の説明を丁寧にすることで、疑義を申し出る学生は出ていない。
- ・得点の構成比、その根拠となる提出物の提出状況と評価内容を説明する。
- ・成績を再確認して回答した。
- 話合いを設ける。
- ・成績評価基準、当該学生の期末試験の粗点、最終評価の平均点、評点分布、当該学生がテストで出来ていなかった箇所などを説明している。
- ・問い合わせがあった場合には、その理由を説明する。

【地域環境工学科】

- ・丁寧に説明する。
- ・親御さんからのクレームに対して丁寧に対応した。
- ・評価項目を明示している。
- ・特にない。
- ・答案返却や解説を行っている。
- ・答案を返却し、採点基準を説明した。
- ・疑義を持たないように評価方法と結果をていねいに説明する。

昨年度同様,成績評価に疑義を持つ学生に対して評価基準を説明・開示したり,理解するまで説明する等の対応が多い。さらに、答案の返却が行われるなど、さまざまな取組がなされており、 多くの教員は学生の疑義に対し積極的に対応している。

設問 9. 教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために、このアンケートに追加した方がよい とお考えの項目がありましたらご記入下さい。

【生物学科】

・学生とのやり取りで困った最近の事例を書いてもらって、教員間で共有できるようにするとよいと思う。ヒヤリハット集のような感じにまとまるとよいと思います。新任の教員の方にも役立てていただけると思うし、古株の教員にとっても最近の学生の気質を知るきっかけになると思

う。

設問 10. このアンケート調査の実施や内容について他にご意見がありましたらご記入下さい。

【国際園芸農学科】

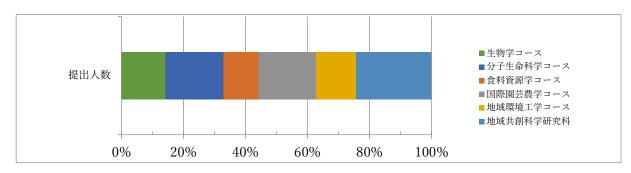
- ・17番目の質問項目は複数回答可にしたほうがより良いように思いました。
- ・毎回アンケートを取って報告会を開いているだけでは改善に結びつかない。カリキュラムを見 直すべきである。

3. 研究科授業に関する調査結果

設問 1. あなたが所属するコースを選択して下さい。

表IV-3-1. 回答数

所属	回答者数
生物学コース	10
分子生命科学コース	13
食料資源学コース	8
国際園芸農学コース	13
地域環境工学コース	9
研究科全体	53
地域共創科学研究科	17 (未対象)

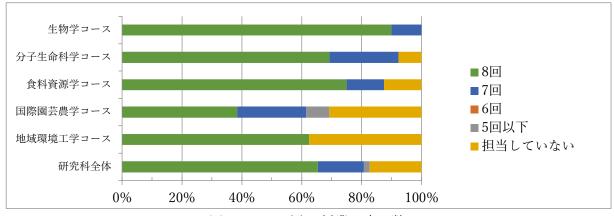


図IV-3-1. コース別回答割合

研究科全体での回答割合は89%で令和元年度(78%)より増加した(平成30年度71%)。国際園芸農学コースは118%の回答率となっているが、地域共創科学研究科の教員が誤って選択したものと推測される(地域共創科学研究科との回答は85%)。

設問 2. 授業の予定回数と実施回数について記入して下さい。

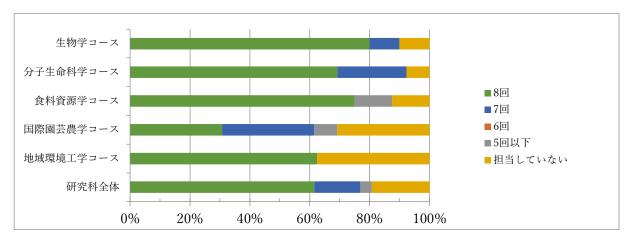
(1) 予定回数(1単位8回とし、集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は90分間を1回に換算して下さい。オムニバス形式の科目は除きます。)



図IV-3-2(1). 授業予定回数

全体回答数は52である。研究科全体で授業予定回数は、8回が65%、7回が15%、担当していないが17%でほとんどが所定講義数を満たしている。5回以下との回答者は国際園芸農学コースに1名いるだけで、昨年度は生物学コース・生物資源学コース・園芸農学コースでそれぞれ1名がいたことに比べると変化が見られた。

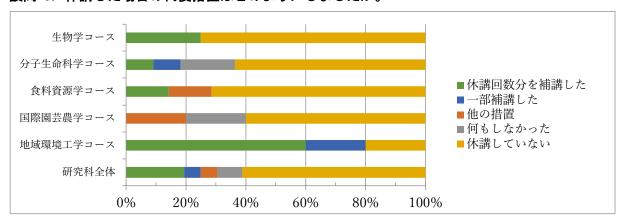
(2) 実施回数 (集中講義など変則的な実施形態を採っている場合は 90 分間を 1 回に換算して下さい。オムニバス形式の科目は除きます。)



図IV-3-2(2). 授業実施回数

全体回答数は52であった。研究科全体では61%が8回講義をしている(昨年度73%)。担当しているが8回の講義を実施されなかったケースは国際園芸農学コースでやや多く、55%であった。地域環境工学コースでは講義を担当している場合は、すべてで8回以上の講義が実施されていた。予定はされていたが、担当していないという回答は、開講の計画はしたが履修者がいなかったものと思われる。





図IV-3-3. 休講の代償措置

全回答数は36であり、前の設問に比べて回答数が低下している。これは、講義を担当していない 教員が多くいるからだと思われる。研究科全体では、「休講していない」が61%であった。一部補 講も含め「補講した」が25%であった。また、「何もしなかった」が研究科全体で8%であった。 「休講していない」を除き、コース別では生物学コース・地域環境工学コースで回答者全員が「補 講した」としている。「他の措置」が食料資源学コースと国際園芸農学コースでそれぞれ1名いた。 「何もしなかった」が分子生命科学コースで2名、国際園芸農学コースで1名いた。 「他の措置」については、以下のようであった。

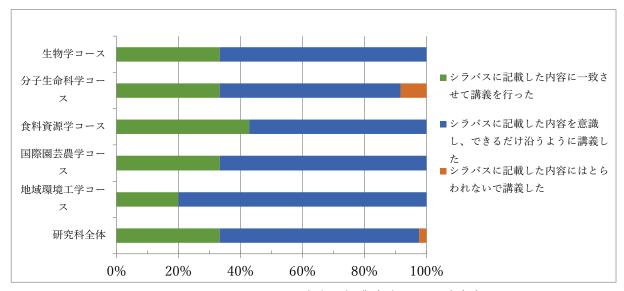
【食料資源学コース】

・休講に代替する課題を与えた

【国際園芸農学コース】

・休講回数分に対応した課題を課して、評価した

設問 4. (1) シラバス記載の内容と実際の授業内容との一致の程度について答えて下さい。



図Ⅳ-3-4.シラバスと実際の授業内容との一致度合

全回答数は42であり、若干少ない。これは、講義を担当していない教員がいるからだと思われる。研究科全体では、「シラバスと一致」、「できるだけ一致」と合わせると97%で、昨年度(100%)とほぼ同様であった。概ね大学院でもほぼシラバスに沿った講義が行われていることが分かる。

(2) 上記で、「3. 内容にとらわれないで講義した」と回答した方はその理由を下欄に具体的に記入して下さい。

シラバスなど無意味(分子生命科学科1名)

生物学コース 会料資源学コース 国際園芸農学コース 地域環境工学コース 研究科全体 0% 20% 40% 60% 80% 100%

設問 5. (1) 本年度のシラバスの記載内容は前年度と同一でしたか。

図IV-3-5(1). 前年度のシラバスとの比較

全回答数は 42 であり、若干少ない。これは、講義を担当していない教員がいるからだと思われる。研究科全体で、「昨年度と同一」と「一部変更」がそれぞれ 72%、28%であった (昨年度は 77% と 23%)。「大幅に変更」は昨年度同様に一人もいなかった。少しずつマイナーチェンジをしながら講義を構成していることがうかがえる。

(2)上記で、「2. 一部変更した。」または「3. 大幅に変更した。」と回答した方はシラバスを変更した理由を教えて下さい。

【生物学コース】

- メディア講義となったため。
- ・シラバスチェックに対応して変えたと記憶しています。
- ・よりよく改善する為。

【分子生命科学コース】

- ・受講している学生の専門性に合わせて授業内容を修正した。
- ・内容の流れをわかりやすくするために、講義内容の順番を一部変えた

【食料資源学コース】

- ・遠隔授業のため。
- ・コロナ禍でのメディア講義になったため、取り扱う内容を変更を行った。
- より深めるため

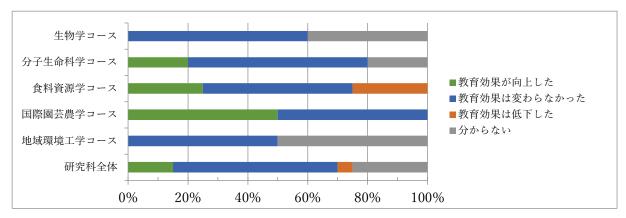
【国際園芸農学コース】

・授業で取り上げる範囲を、最新の知見や社会情勢にあわせて取捨選択した。

【地域環境工学コース】

- ・受講予定学生の専門や研究内容を意識した。
- ・社会情勢の変化に対応した。

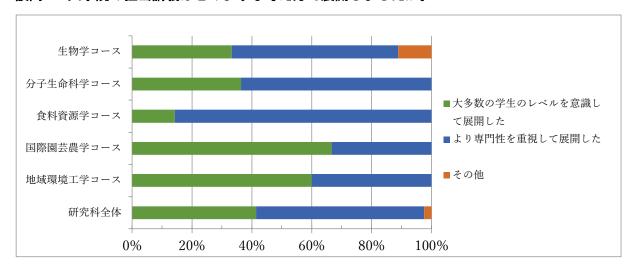
(3) 上記の場合で、シラバスの変更は教育効果にどのような影響を与えたとお考えですか。



図IV-3-5(3). シラバス変更の教育効果

全回答数は 20 件である。該当者のみが回答しているので、回答数は多くない。研究科全体で、「教育効果が向上した」と回答したのは 5人(25%)いて、過去二年と同程度であった(平成 30 年度:29%,令和元年度:23%)。「教育効果は変わらなかった」が55%を占める(令和元年度27%)。「分からない」が5件(25%)と最も高い。メディア授業への対応の目的で変更が行われたため、教育効果にはあまり影響しなかったのかもしれない。

設問 6. 大学院の担当講義はどのような考え方で展開しましたか。



図IV-3-6. 講義展開の考え方

全回答数は 41 である。研究科全体では、「学生のレベルを重視」が 41%(令和元年度 55%)で「専門性重視」とした回答が 56%(令和元年度 45%)であり、やや専門性を重視する傾向があった。学生のレベルと専門性を両立させながら講義に取り組んでいることがうかがえる。

「その他」との回答の理由は「専門性と実用性を勘案して展開した(生物学科)」であった。

■視聴覚教材(ビデオやDVD教 生物学コース 材など)の利用 ■画像データ(OHP, スライドプ 分子生命科学コー ロジェクター. プレゼンテー ス ■ 授業の合間に質疑や討論の場を 設けた 食料資源学コース ■小グループによる課題学習の発 国際園芸農学コー 表や討論の場を設けた ■宿題(レポートを含む)を課し 地域環境工学コー ■実習形式の授業を行った

設問 7. 学生の授業の理解度を上げるために工夫している点があったら教えて下さい(複数回答可)。

図IV-3-7. 授業の工夫

80%

60%

■その他

100%

全体回答数は88件であり、複数回答が認められているため多い。回答は生物学、分子生命科学、 食料資源学、国際園芸農学、地域環境工学の、9名、9名、7名、9名、5名からそれぞれ得られた (計39名)。研究科全体で、「画像データ活用」が26%を占めた。次いで、「授業の合間に質疑・ 討論の場を設けた」、「実習形式の授業を行った」など学生の能動的学習としたケースがそれぞれ 20%であった。

「その他」とした回答はグラフ上では0件となっているが、集計上の都合で反映されておらず、 以下にその他の回答について記す。

【生物学コース】

研究科全体

0%

20%

40%

- ・実習形式の授業を行った。(7件)
- ・実物を用いて体感してもらうこと。

【分子生命科学コース】

- ・演習形式の授業を行った。
- ・演習形式の授業を行った。

【食料資源学コース】

- ・実習形式の授業を行った。
- ・各自に課題を出し、発表と討論の場を設けた。

【国際園芸農学コース】

・実習形式の授業を行った。(3件)

【地域環境工学コース】

・実習形式の授業を行った。(3件)

設問 8. 成績評価に対して疑義を持つ学生がいますが、そのような場合への対応として、どのような取り組みを行なっていますか。下欄に具体的に記入して下さい。

【生物学コース】

- ・希望に応じて成績を開示する旨を周知している。
- ・個別に納得が得られるまで説明している。
- ・成績の根拠について丁寧に説明します。(3件)
- ・疑義があれば応じ、妥当であれば成績を変更する。

【分子生命科学コース】

- ・問い合わせがあった場合は、個別に回答している。
- ・評価項目と評価基準を明確に示す+説明する。
- ・求められた場合には、答案やレポートを返却する。
- ・大学院の場合、疑義を持たれた経験がない。 (3件)
- 納得するまで説明する。

【食料資源学コース】

- ・テストの評点など成績を付けた理由を受講生が納得するまで説明する。
- ・そのような成績になった理由について直接説明する。
- ・初回に評価基準等について説明をしている。
- ・成績評価に対して疑義を持った場合、それを問い合わせることができる制度を説明している。

【国際園芸農学コース】

- ・評価基準、点数を公表します。
- 話を聞く。
- ・成績について事前に説明している。
- ・評価の根拠を示せるように心がけまた準備している。
- ・疑義を持つ点について話を聞いて、改善できるところは改善する。
- ・シラバスと事前の説明を丁寧に行う。
- ・大学院の授業では、疑義を表明されたことはない。(2件)

【地域環境工学コース】

- ・丁寧に説明する。
- ・学生・保証人に対して丁寧に対応している。

- ・答案返却や解説を行っている。
- ・評価方法と評価結果をていねいに説明する。

設問 9. 教育改善に関わる問題をもっと掘り下げるために、このアンケートに追加した方がよいとお考えの項目がありましたらご記入下さい。

【生物学コース】

・学部と同じで、困った事例を書いてもらって、ヒヤリハット集のようなものを作れたらいいの ではないかと思います。

【分子生命科学コース】

・より良い授業を行うための学部や大学への要望(自由記述)。

設問 10. このアンケート調査の実施や内容についてご意見がありましたらご記入下さい。 特になし

V. アンケート調査結果に対する各学科の見解

生物学科

本アンケートは卒業生にとっては初めてのものであるにもかかわらず、「教育アンケートの結果が反映されていない」というコメントがあった。これは学生がこのアンケートに真摯に回答することで少しでも後輩たちの修学環境が改善されることを望んでいるということであり、また、本アンケートで回答しても問題が一部全く解決していないという事実を知っていて、失望の表れであると思う。令和2年度アンケートの生物学科の回答率は100%である。学科教員は学生たちの声を真摯に受けとめるべきであるが、生物学科で経年的に特徴的な問題に対して、学科レベルでの対応では決定的な解決に結びついていないというのが実情である。

生物学科では例年、教員の教育・研究指導力に極端に差があるという指摘が他学科よりも多い傾向にある。そして、指導教員に対する尊敬の念を表明し研究の素晴らしさに感嘆している学生もいるが、その一方でアカハラ・パワハラを訴えるコメントもなくなることがない。令和2年度アンケートでは、学業の相談先にクラス担任や指導教員以外に、指導教員以外の教員と答えている学生が他学科に比べて高かった。また、大学院の回答でも副指導教員に相談できる体制を評価しているコメントがあった。これは数年前から、研究室配属前の学生に学業などの問題が発生した場合には複数の教員で対応するようになった体制が、学生の方にも影響し習慣化してきているのかもしれない。学科教員間、教員学生間のコミュニケーションをさらに増すことで少しでも問題の解決につながるのではないかと個人的には考えている。まずは学科教員間で情報共有をしっかりして「風通しの良い」学科を目指したい。そして、さらに学部としての具体的な対応策が検討されることで根本的な解決につながることを期待している。

(令和3年度学科長 小林一也)

分子生命科学科

例年、「学部の理念」、「学科の理念」、「アドミッションポリシー」の周知は他学科に比べて低いため、ガイダンスや基礎ゼミを通して説明を強化してきた。本年度は他学科と比べてそれほど低いというほどではなかったが、今後もガイダンスや基礎ゼミを通しての説明を継続していく必要があると感じている。

専門教育に対する満足度は90%と高く、昨年の75%と比べて大幅に上昇していた。

講義室外での学習の時間は個人差が大きい。例年通りであるが、講義室での受講時間の2倍(大学設置基準)に満たない学生が8割程度おり、0.5倍未満のものも20%いた。サークル活動やアルバイトが忙しく、なかなか学習の時間をとるのが難しい学生もいることと思われるが、ガイダンスや面談などを通して自主学習の重要性を訴えていく必要があるものと思われる。以前より当学科は過年度生が多いことが問題となっており、学科主催のFDや担任による成績不良学生に対する面談を強化してきた。その甲斐あってか、最近では過年度生がかなり減ってきている。

「教員の指導や対応に対する満足度」については、他学科と比べて明らかに低かった。理由を見てみると、教員や授業によって異なるとの意見が多かった。関連して、「本学部の教育活動の中で最も早急に改善すべきと思われる点」の中で、教員のハラスメントを指摘する意見が多数見受け

られた。ハラスメントの指摘は他の項目にも見られ、他学科と比べて明らかに多かった。ハラスメントや精神的な問題を相談したり訴えたりする方法は複数あるので、それを周知していく必要があると感じた。「アカハラがあっても告発出来る状況ではありません」という意見があることが気になった。ハラスメントや精神的な問題を相談したり訴えたりする方法を知ってはいるが、利用できる状態ではないという学生もいるようである。気軽に相談できる環境作りが必要と思われる。

(令和3年度学科長 姫野俵太)

食料資源学科

1. 学部卒業時学生対象教育評価アンケートの分析

昨年度は、アンケートの回収率を上げる目的を達成するために、卒業研究発表会の際に学科長が回収するという状態でのアンケートではあるが、半ばアンケートの提出を強制された状況で行われたものではなく、アンケートに答えない権利が認められた状態で行われた回答結果であることを前提として見解を述べる。

総合的に判断して、本学科の教育・研究に対する取組み・姿勢に8割の学生が満足している(設問34)。 これは、農学生命科学部全体的でも同様な傾向で、満足度は8割程度である。

総合的な満足度の結果と学科のカリキュラムがその目標に合致していると思うかという質問とはほぼ同様な結果(設問5)を示しており、約8割の受講生・学生が満足していた。さらに、このカリキュラムが進路決定には6割半しか影響していないと判断された(設問28)。しかし、本学科のカリキュラムが「食」の知識を身につける上で役立ったと回答した比率は80%を超えた(設問36)。すなわち、就職時には「食」に限定されることなく、種々な職種にトライしていることがうかがえる。大学で得られた多様な方向へのチャレンジ精神の表れかもしれない。それらの結果と対応して、約8割の受講生が教員の指導や対応に満足(設問11)しており、卒業研究を行った学生においてもほぼ同様に8割の学生が満足していた(設問25)。特に、シラバスの有効性に関しては明らか(設問8)であり、受講生のシラバスの充実の要求の高さがうかがえた。

講義や演習の受講生の講義外学習時間は、2単位の科目の場合90時間の学習が必要であり、講義室では30時間である(設問16)。9割半以上の受講生に対し、講外の学習時間が講義時間の2倍を満たしていないから本来なら単位認定は認められないが、短時間のうちに能率が極めてよい学習をしていることがうかがえる。しかし、試験の内容を工夫し、講義外で一定時間の学習をしていないと、到底合格に達しないような設問にするなどの工夫が現状以上に必要である。また、出席しているから合格できるなどといったことはあってはならない。

一方、大学の施設に関しては、実験実習室や情報処理演習室に関しては8割の学生が満足しているが、講義室や蔵書室に関して満足は前者6割、後者は4割に満たない(設問23)。講義室によっては、暖房の可能な時間の臨機応変な対応が必要と思われる。また、オンラインジャーナルの充実に対する裏返しの結果かもしれない。

2. 教員対象教育評価アンケートの分析

本学部の施設や設備に関して不十分さを指摘する教員は他学科より多く、これは前年度からあまり改善されていない。新任教員が前所属と比較して感じることがこの原因であると推察されて

いたが、着任後時間が経過していても同様な傾向を示すと思われることから、新任教員のみの評価以外にも施設や設備の低評価の原因があると考えられる。その一つに、施設や設備に対しての同様の指摘は学生にもある。ただ、教員からの評価は学生の評価よりも数倍低い(設問11)。

また、学科の大多数の卒業生が大学卒業に相応の知識と学力を身につけたと思う教員が7割弱しかいない(設問13)。これが、卒業研究は必要であると思いますか?という質問(設問12)で約5%の教員がどちらとも言えないと回答している理由であろう。精神的な病を抱えた学生に対する教員の配慮が必要であると考えられることが、原因であろう。一方、本学科を卒業した学生は一人残らず卒業発表会と研究論文を完全にまとめてあげたと太鼓判を捺して社会に送ることは、教員として学生に学士号を与えるためにどうしても譲れない線でもある。

(令和3年度 学科長 佐藤之紀)

3. 研究科学生の回答に基づく分析

研究科の調査結果は研究科全体でまとめられているため、食料資源学コースとしての分析はしなかったが、個別のコメントの中には今後のカリキュラムに反映させる等の形で受け止める必要があるものがあると思われる。

(令和3年度コース長 千田峰生)

国際園芸農学科

学部学生のアンケート回答率が過去2年間90%程度を維持してきたものが、64%と大きく低下した。学部内で最低の回答率であり、オンラインでの回答を求めた今回だけの低下なのか見極める必要があると考えられる。学科の専門教育などに対する満足度は約90%に達しており、本学科で2年次に通年で必修としている農場実習を含む実習系科目の評価は高いようである。一方で、実験については受動的な内容が多いとする意見やコース分属後の3年次の履修を望む意見など、文理融合の学科において両分野の学修内容を一定の質を確保しつつ網羅する上での課題を示す回答が得られている。国際化を標榜する本学科の学修内容として印象に残ったものとして、海外研修と英語の必修単位数の多さを挙げる回答が多いものの、国際化教育の効果や実感に否定的な記載もあり、国際化に資する教育内容の一層の充実を図る必要がある。一部に、「単位が取れさえすれば良い」「卒業できれば良い」といった意見が寄せられており、本来目指すべき学ぶ喜びを引き出す教育の充実に意を払う必要があるかと思われる。この点は、本学科の大学院進学率の低さとの関連も深いものと考えられる。多分野を網羅する学科の特性とあきらめるのではなく、各教員それぞれの専門分野における教育研究の一層の充実が必要であろう。

整備が進みつつあるとはいえ、講義室のエアコン設置を望む声が多く、研究室の施設の充実と あわせて継続的な努力が求められている。

(令和3年度学科長 松﨑正敏)

地域環境工学科

卒業生のアンケート回答率は例年と同程度の87%で、学科の学生の意見を概ね集約出来ていると考えられるが、アンケート回答率の上昇に努める必要がある。

教育目標等の認識に関しては、近年 8 割程度に上昇しており、各学年に対する年度初めのガイダンス等で本学部の教育理念や教育目標等を説明した効果であると考えられ、今後、卒業時に再度認識出来るよう工夫してく必要がある。

カリキュラムやガイダンス内容の適切さに関しては、9割を上回り、シラバスへの評価も肯定的な回答が約9割程度である。特に、学科で受けた教育への満足度について、「強くそう思う」と「そう思う」の回答が合計で100%となり、本学科の教育は学生に高く評価されており、学科教員の教育への努力に対する成果であると考えられる。

学生の主体的学習に関して、授業時間の1倍未満の学生は令和元年度よりも増加し、6割を上回っており、コロナの影響かは不明であるが、課題を課す等で予習復習を習慣づける工夫が必要であろう。2倍以上の学生は15%程度で例年通りであった。

学生の学習環境に関して、教員の相談体制については「その他」を別にすると、クラス担任および指導教員への相談が 9 割程度で、学生への学習指導が丁寧に行われていることを示している。また、施設・設備面では、実験・実習室について 3 割程度の学生が不充分と回答しており、自由意見から Wifi 環境や PC 環境、実験施設に不満があると考えられる。設備面については適宜改善を要望し、実験棟の改修後のアンケート動向にも注視したい。

卒業後の進路に関しては、カリキュラム、進路支援への取組みとも8割を上回る肯定的な回答を得ており、学部内で最も高い水準である。また、大学卒業者として修得した知識・学力について肯定的な回答が7割程度で、学科教育への満足と対応している。

教育活動全体に関しては、早急に改善すべき点について、「特に問題はない」という回答がなくなり「学生に対する教員の指導方法」と「成績評価の方法」の割合が増えた点は今後注視したい。自由記載では施設面の不満が多く、上記記載と関連するため、実験棟の改修後のアンケート動向にも注視したい。卒論テーマに関する不満については今後も注視していきたい。

地域環境工学コース(修士課程)の教育活動に関しては、学部に準じた教育活動が行われているため、大きな問題は存在しないものと推測しているが、修士学生が2名のみであるため、学生の定員充足が最大の課題である。

教員対象教育評価アンケートに関して、本学科教員は例年と同様に学科の教育目標とカリキュラムとの関係を強く意識し、予習復習を学生に課し、学生の反応を見ながら授業運営していることがいずれの設問からも伺える。また、学科会議内で行われていた学生に関する情報交換を学科主催 FD と位置付けているため、FD の参加回数が大きく増加している。施設・設備面については、一部否定的な回答も存在するが、概ね一定水準には達していると評価している。卒業研究の必要性の意識は毎年度高いが、卒業生に相応する知識と学力を身に着けさせたとの回答は8割で例年より若干低下しており、今後注視したい。

教員対象授業アンケートに関して回答率は 100%であった。本学科では JABEE プログラムの影響が大きく、学部の授業実施では規定回数に達しない授業は皆無で、休講時には補講が実施されている。授業実施に際しては、8 割がシラバス通りではなく、シラバスに沿うように授業を行っており、シラバス変更の理由からも常に教育改善を意識して、授業実施に当たっていることが分か

る。また、研究科の授業実施についても、学部と同様であると推測される。

以上、地域環境工学科では教育実施に対し、各教員が継続的な教育改善を実施しており、一定の効果が得られていると考えられるが、学生の評価が高くないところもあり、学生が主体的に学んで行く工夫を凝らす等、引き続き教育改善に努めるとともに、施設・設備面についても改善を求めて行きたい。

(令和3年度学科長 丸居 篤)

VI. 教育改善委員会(令和2年度教育改善にむけたアンケート調査についての意見) ・学部卒業時・研究科修了時学生対象教育評価アンケートについて

(1) 学部・研究科の教育理念、教育目的、教育目標、学部の教育目標、アドミッションポリシーについて

学部の教育理念、教育目的および教育目標の認知度は75%と明らかに高くなった。昨年度に示された改善点を受けて、学生への周知を掲示板を利用して行ったことの効果が現れたと思われる。来年度以降の傾向も注視すべきである。8割を超える学生が学科及びコースの教育目標とカリキュラムの内容が合致していると答えており、肯定的な評価が増え続けている。

(2) 学科/コースの専門教育について

専門教育については学部では9割弱の学生が満足していると答えており、過去3年を上回る高い値となった。学科別に見ると地域環境工学科で全ての学生が満足していると答えた一方、生物学科ではその割合は8割を下回った。専門科目の偏りや実験設備の不足を指摘する意見があり、少数意見も取り入れた専門教育の改善が必要である。研究科では7割以上の学生が受けた教育に満足したと答えており、昨年と同程度であった。

(3) 教員の指導について

教員による指導、対応については、学部全体でみると8割以上の学生が満足していたが、生物と分子生命ではその割合はやや低く8割を切った。教員によって評価が異なるとの意見が学部全体で10件以上あった。研究科でも肯定的な回答が74%と過去に比べて低下しており、各教員が学生との接し方を見直す必要がある。

(4) 主体的学習について

主体的学習に充てた時間については、講義室での学習時間の2倍未満と答えた学部学生が8割を超え、また、研究科でもその割合は7割を占めており、共に例年とあまり変わらない。講義・実習での姿勢についても「真面目に取り組んだ、出来るだけ休まない」など、当たり前の意見や、単位を取ることが目的になってしまったことをうかがわせる意見が多かった。主体的に学ぶための目標を設けるなど、根本的な対策が求められる。研究科では多くの大学院生が主体的および意欲的な姿勢で取り組んだと回答しており、教員の提示した要求に応えているといえる。

(5) 教育支援、施設・設備について

施設・設備については、冷房施設を導入した結果、満足しているとの回答が不充分との回答を 上回った。一方で冬の寒さを指摘する声はいまだに多く、空調設備の改善は引き続き必要であ る。安定したネット環境や充電スペースを求める意見もみられる。学業、学生生活、進路につい ての相談窓口として指導教員あるいはクラス担任が多いという傾向は例年と変わらなかった。

(6) 卒業研究、修士研究に対する満足度

卒業/修士研究について満足していると肯定的に回答した学生は学部全体で約8割、研究科では7割を占めており、評価が高いといえる。コロナの影響により、予定を変更あるいは断念せざるを得なかったとの記述もみられた。否定的な評価としては、指導体制あるいは人間関係などを

挙げる意見が見られた。日頃から教員と学生のコミュニケーションを良好に保ち、丁寧な指導を 続けることが求められる。

(7) 進路指導について

本学および本学部の進路支援について十分であったとの回答は学部全体では5割強を占めていた。進路支援の取り組みについての評価は学科間の差が大きく、地域環境工学科では十分と答えた学生が8割近くに達したのに対し、分子生命では4割程度に留まった。こうした学科間の差は就職/進学率の違いを反映していると思われる。

(8) 教育のあり方について

卒業/修了時に相応の知識や学力が身に付いたかとの問いに対し、学部全体、研究科でともに7割弱の学生がそう思うと答えていた。一方、否定的に答えた学生は学部で1割弱と過去5年間よりも減少した。研究科でもその割合は1割弱であり、例年と同程度であった。自らの取り組み方のまずさや勉強不足に対する反省が多く見られることから、心地よく学べる環境の整備と主体的学習を促す指導が求められる。教育活動の中で最も早急に改善すべき点についてみると、学部全体では「学生に対する教員の指導方法」が4.5割を占め、「成績評価の方法」も3割程度あった。教員によるえこひいきや指導放棄、アカデミックハラスメントを指摘する記述があり、個々の事案に丁寧に対応し改善していく必要がある。また、発達障害者やメンタルヘルスに対する教員の理解が不十分との指摘もあり、専門的なサポート体制の強化が必要である。空調設備やネット環境の整備を求める要望はこの設問でも見られた。

・教員対象授業アンケートについて

学部/研究科の理念、教育目的、教育目標、学科/コースの教育目標とアドミッションポリシーについてはほとんどの教員が認知していた。全ての教員がシラバス作成時に教育目的、教育目標に沿った講義内容にしようと意識していると答えている。学生の授業時間外学習を促す工夫として「宿題を課した」との回答が5割を占め、授業外の学習を促す意識が向上しているといえる。しかしながら、学部生対象アンケートで示されたように、学習時間は授業時間の2倍未満が多く、授業時間外での学習時間を増やすための取り組みが求められる。Forms などの学習ツールの活用についての記述もあり、こうしたツールの活用を授業時間外での学習時間を増やす取り組みに活用することが望まれる。施設・設備についての教員の要望としてスペースの改善が挙げられているが、同じ傾向がここ数年間続いており、対応が難しい。

・教員対象教育評価アンケートについて

学部では9割以上の教員が15回以上授業を実施し、研究科でも8割弱の教員が7回以上授業を実施した。シラバスについては全教員がシラバスと内容を一致させた講義を行った、もしくはシラバスに沿うように講義を行っていた。学部では学生のレベルを意識した授業を行った教員が8割弱を占めていた。研究科では専門性を重視した授業を行った教員が6割弱を占める一方、学生のレベルを意識した授業を行った教員は4割程度であった。

(令和3年度教育改善委員会委員 石田 清)